

## 和仏法律学校講義録

秋山, 雅之介 / 山崎, 覺次郎 / 中村, 進午 / 竹井, 耕一郎  
/ 鈴木, 英太郎

---

(出版者 / Publisher)

和仏法律學校

(巻 / Volume)

1-16

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

73

(発行年 / Year)

1903-06-21

（明治三十五年十一月四日第三種郵便物認可 毎月十九圓一頁五日六日八日十日十一日十二日十三日十五日十六日廿一日廿三日廿五日廿六日廿七日廿八日廿九日三十日發行）

明治三十六年六月二十一日發行

三十六年度 第一學年ノ十六

# 和佛法律學校講義錄

第百參拾貳號

## 和佛法律學校



第一學年第十六號目次

憲

法(自三〇九)

法學士 竹井耕一 郎

民法總則

自第一章(自二七)至第三章(自三三)

法學士 鈴木英太郎

國際公法(平時)

(自二九)

法學博士 中村進 午

國際公法(戰時)

(自一五三)

法學士 秋山雅之介

經濟

學(自二七)

法學士 山崎覺次郎

雜報

○債權ノ讓渡ト確定日附證書○相續人ノ選定ト法定順序○假登記ノ性質及ヒ其當否

090  
1903  
1-1-16

説明アリテ次ニ兩院協議ノ場合ニ移ラントス

第八節 兩院協議

既ニ述ヘタル如ク各院ハ議會ノ一部局タルト共ニ獨立ノ合議體ヲ形成ス故ニ兩院ノ議ニシテ相合セテラシキ議會協賛ノ結果ヲ生スル能ハス是ニ於テカ兩院協議ノ必要ヲ生ス兩院協議ノ手續ヲ述フルニハ廣ク兩院ノ關係ヨリ説キ起サント欲ス先ツ議決ヲ分テテ可決否決修正ノ三ト爲ス

一 可決 政府提出ノ案ヲ甲院可決スレハ之ヲ乙院ニ移ス乙院之ニ同意スレハ甲院ニ通知スルト同時ニ奏上ス又甲院提出ノ案ヲ乙院可決スルトキ亦同シ

二 否決 政府提出ノ案ヲ甲院否決スレハ奏上ス甲院可決スルモ乙院否決スルトキハ奏上スルト同時ニ甲院ニ通知ス次ニ甲院提出案ヲ乙院否決スレハ唯甲院ニ通知スルノミ

三 修正 政府提出案ヲ甲院修正若クハ可決スレハ乙院ニ移ス乙院之ニ同意

シ又ハ否決スレハ委上ト同時ニ甲院ニ通知ス然ルニ若シ乙院ニ於テ更ニ修正ヲ施シタルトキハ之ヲ甲院ニ回付ス甲院之ニ同意スレハ委上ト同時ニ乙院ニ通知ス若シ同意セサレハ兩院協議會ヲ手續ニ依ル次ニ甲院提出ノ案ヲ乙院修正スレハ甲院ニ回付シ甲院同意スレハ同シテ奏上通知ヲ爲ス若シ同意セサレハ同シク兩院協議會ノ手續ニ依ル

兩院協議會ハ各院ヨリ十人以下同數ノ委員ヲ選ビテ會同セシムルモノナリ此等委員ノ協議案成立シタルトキハ先ツ政府ヨリ議案ヲ受取リ又ハ議案ヲ提出シタル院ニ於テ之ヲ議シ次ニ他ノ院ニ移ス各院ハ此案ニ對シテ可否ヲ決スルノミ更ニ修正ヲ爲スコト能ハサルモノトス

第九節 議員

第一項 議員ノ就職、召集及ヒ解職

議員ノ就職ニ關シテハ前ニ貴族院及ヒ衆議院ノ組織ヲ述ヘタル際ニ大體ノ說明ヲ爲シタル方故ニ之ヲ略ス

召集ハ天皇大權ノ行動ニシテ議員ヲ集會セシムルノ手續ナリ憲法ニ議會ヲ召集ストアレトモ嚴密ニ言ヘハ各議員ヲ召集スルナリ召集ハ毎年少クトモ一回ハ之ヲ行ハサルヘカラス召集スヘキ場所及ヒ時日ハ必スシモ一定セズ

一 任期滿了 貴族院議員ニ在リテハ伯子男爵議員及ヒ多額納稅議員ノミ此原因ニ由リ解職ス衆議院議員ハ總テ然リ

二 除名 貴族院議員ノ除名ハ勅裁ニ由ラサルヘカラス衆議院議員ハ然ラス

三 辭職 貴族院議員ニ在リテハ伯子男爵議員及ヒ廣義ノ勅任議員ノミ此原因ニ由リ解職ス而シテ辭職ハ勅許アルヲ必要トス衆議院議員ハ總テ其院ノ許可ニ依リ辭職スルコトヲ得

四 死亡

五 任官任職 即チ或官職ニ任セラレルトキハ議員ノ職ヲ失フ貴族院議員ニ在リテハ伯子男爵議員及ヒ多額納稅議員ノミ此原因ニ由リ解職ス衆議院議員ハ總テ然リ

六 資格喪失 身分能力財產等ノ關係ヨリ議員ノ資格缺乏セル場合ニ解職ス  
 貴族院ニ於テハ皇族公侯伯子男爵及ヒ多額納稅議員ニ關シテノミ此場合ヲ生  
 シ衆議院ニ於テハ總テノ議員ニ關シテ此場合ヲ生ス、又ハ其資格喪失ノ  
 右ノ外衆議院議員ハ解散ノ原因ニ由リテ解職スル場合アリトス

### 第二項 議員職務執行ノ形式

各議員ハ其職務ヲ行フニ左ノ形式ニ依ル  
 一 發言及ヒ表決 發言トハ議事ニ關スル一切ノ言論ヲ謂ヒ表決トハ決議ノ  
 數ニ加ハルヲ謂フ  
 二 發議 議案其他ノ發議ヲ爲スヲ謂フ  
 三 質問 各員ハ議長ヲ經テ政府ニ質問スルコトヲ得質問ニ對シテ國務大臣  
 ハ答辯ヲ爲ササルトキハ其理由ヲ示ササルヘカラス但答辯ハ書面ヲ以テスル  
 モ口頭ヲ以テスルモ可ナリトス尙ホ議院法第五十條ニ依レハ國務大臣ノ答辯  
 ヲ得又ハ得サルトキハ質問ノ事件ニ付キ建議ノ動議ヲ爲スコトヲ得

四 選舉 各種ノ役員ノ選舉ニシテ例ヘハ議長副議長部長委員等ノ選舉是ナ  
 リ貴族院ニ於テハ衆議院ニ比スレハ選舉事務尠シトス

### 第三項 議員ノ權利

議員ノ義務ハ今特ニ之ヲ説明スルノ要ナシ唯議院法第十七章ニ院ノ紀律及ヒ  
 警察ヲ規定スル處ニ於テ議員ハ大體議院法若クハ議事規則ニ違ヒ其他議場ノ  
 秩序ヲ紊ルコト能ハサルハ勿論皇室ニ對シ不敬ノ言語論說ヲ爲スヲ得ス又無  
 禮ノ語ヲ用ヒ及ヒ他人ノ身上ニ涉リ言論スルコトヲ得サル等ノ規定アリ  
 此項ニ於テ主トシテ述フヘキハ議員ノ權利ニ關ス  
 一 發言表決ノ自由權 憲法第五十二條ニ曰ク兩議院ノ議員ハ議院ニ於テ發  
 言シタル意見及ヒ表決ニ付キ院外ニ於テ責ヲ負フコトナシ但シ議員自ラ其言  
 論ヲ演說刊行筆記又ハ其ノ他ノ方法ヲ以テ公布シタルトキハ一般ノ法律ニ依  
 リ處分セラルヘシト此權利ハ議員ノ職務ヲ保護スルカ爲メニ與ヘタルモノニ  
 シテ職務以外即チ一箇人ノ資格ニ於テ其意思ヲ一般ニ表示スル場合ハ固ヨリ

之ヲ保護スルノ限ニ在ラス一般法律ヲ支配ラ受クヘキモノトス。此自由權ハ全ク無制限ノモノニ非ス即チ前述ノ如ク皇室ニ對スル不敬ノ言論他人ノ身上ニ涉ル言論及ヒ無禮ノ言語ヲ爲スヲ得サルノ制限アリ。憲法第五十二條ニ關スル問題ハ(一)憲法ニ所謂發言シタル意見トハ口頭ニ限ルカ又ハ書面ヲ用フル場合モ之ヲ含ムカ蓋シ口頭ト書面トハ理論上之ヲ區別スヘキ根據ナキノミナラス亦實際上區別ノ必要ナシ故ニ發言ト謂フハ廣ク意思發表ノ意ニ解シ書面ノ場合モ之ヲ包含セシムルコソ此權利ヲ與ヘタル趣意ニ適合ス。(二)或學者ノ意見ト云フ中ニ事實ノ陳述ヲモ包含スルヤ否ヤヲ疑問トセリ然レトモ意見ト事實ノ陳述トハ多クノ場合ニ於テ相伴ヒテ分ツヘカラサルノミナラス之ヲ區別スヘキ理論上ノ必要ナシ故ニ意見ト謂フハ廣ク職務上ノ言論ト解スヘキナリ。最後ノ問題トシテハ(三)一方ニ於テ特別ノ身分ヲ有スル議員例ヘハ官吏カ議員ヲ兼スル如キ場合ニ於テモ完全ニ此權利ヲ有スルヤ否ヤ言ヲ換フレハ院內ニ於ケル言論表決ニ付キ上官ノ爲メニ懲戒處分ヲ受タルコトナキヤ否ヤ蓋シ此場合ニ在リテハ一方ニ於ケル議員ノ權利ト他方ニ於

ケル官吏ノ義務ト抵觸スルカ如クニ見ユ然レトモ予ハ以爲ク議員トシテ其職ヲ行フ場合ト官吏トシテ其職ヲ行フ場合トハ全ク區別シテ觀察スヘキモノナルカ故ニ二者ノ間ニ抵觸ノ恐ナシ故ニ一方ニ於テ官吏タル者モ議員トシテ他ノ者ト同シテ完全ニ權利ヲ行ヒ得サルヘカラス此種ノ權利ハ實ニ議員ノ職務執行ニ必要ナリトス。二會期中一定ノ罪ヲ除ク外院ノ許諾ナクシテ逮捕セララルコトナキ權利ニ關シテハ前ニ院ノ職權トシテ逮捕ノ許諾ヲ説明スル際ニ略ホ之ヲ述ヘタリ故ニ詳細ノ説明ハ之ヲ略ス畢竟此權利ハ第一ノ權利ト其目的ヲ同シウシ議員ヲシテ十分ニ職務ヲ盡カシメントスルヲ趣意ニ外ナラス唯第一ハ言論ノ自由ニ關シ第二ハ身體ノ自由ニ關スルノ差アルニミヤシ。此點ニ關シテ一言スヘキハ議院ハ許諾ヲ與フルニ何ノ標準ニ據ルヘキヤノ疑問ナリ蓋シ議院ニ於テ犯罪其レ自身ノ有無ヲ審查スルコト能ハサルヤ明カナリ是ニ於テ成ハ曰テ犯罪ニ對スル嫌疑ニ正當ノ理由アリヤ否ヤ並ニ政府ハ議院ノ獨立ニ干渉スルノ目的ヲ有スルヤ否ヤヲ審查スト成ハ曰テ嫌疑ニ正當ノ

理由アリヤ否キハ審査ノ限ニ在ラス唯政府カ議會ニ干渉スルノ目的ヨリ逮捕ヲ行フモノナリヤ否キヲ審査スルノミト然レトモ此場合ニ於テハ政府干渉ノ有無ハ之ヲ問フヲ須ヒス唯其嫌疑ニ十分ノ理由アリヤ否キヲ審査スルル必要トシ且之ヲ以テ十分ナリト考フヘシ

三 歳費其他ノ手當ヲ受クルノ權 先ツ歳費ハ官吏ニシテ議員タル者及ヒ貴族院ニ於ケル皇族公侯爵議員ハ之ヲ受クルコトヲ得ス召集ニ應ゼサル議員モ亦然リ歳費ハ之ヲ辭スルコトヲ得

四 起訴ノ權 明治二十二年十一月法律第二十八號議員保護律ニ依レハ議員ハ職務執行ニ關シ誹毀侮辱妨害暴行脅迫ヲ爲シタル者ニ對シテ訴ヲ起スコトヲ得ルモノトス又議院法ニ依レハ議員ハ議院又ハ委員會ニ於テ誹毀侮辱ヲ被ラタルトキハ議院ニ訴ヘテ處分ヲ求ムルコトヲ得

以上ヲ以テ議員權利ノ大要ヲ述ヘ了リタルト同時ニ本章ノ説明ヲ了レリ

### 第七章 國務大臣

憲法第五十五條ニ曰ク國務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其ノ責ニ任ス凡テ法律勅令其ノ他國務ニ關スル詔勅ハ國務大臣ノ副署ヲ要ス

先ツ國務大臣國法上ノ地位ヲ論セント欲ス

甲 說ハ曰ク國務大臣トハ最高ノ行政官廳ヲ謂フト此說ハ現行行政法上ノ方面ヨリ國務大臣ヲ觀察シタルモノニシテ憲法上ノ觀察ニ非ス内閣官制ニ依レハ内閣總理大臣及ヒ各省大臣ハ總テ國務大臣タリトス此等ノ大臣ノ外ニ尙ホ國務大臣アリ得ナルニ非スト雖モ此等ノ大臣ト少クトモ國務大臣ノ一部トハ同一ナリ故ニ右ノ如キ定義ヲ下セシモノナルヘシ然レトモ人民ニ對スル行政機關トシテノ觀察ナリ憲法上ニ於ケル國務大臣ハ天皇ニ對スル輔弼ノ機關ナリ此二ノ觀察ハ理論上明カニ區別スヘキモノニシテ一ハ下ニ對シ一ハ上ニ對シ其作用ノ形式全ク異ナルヲ見ルヘシ故ニ曰ク甲說ハ不可ナリト

乙 說ハ曰ク國務大臣ハ直接ニ元首ニ隸屬シ元首ノ政治上ノ行爲ニ參贊シ其責

ニ任スル機關ナリト此説ハ全體ニ於テ曖昧ナルカ故ニ一其缺點ヲ擧ゲテ論  
駁スル價値ナキナリト云フハ其第一ノ理由ニ曰ク甲論ハ不問セリ  
予ハ國務大臣ヲ以テ天皇大權ハ行使ヲ補助スル機關ナリトス一ハ此ニ據リ  
此定義ニ於テ先ツ天皇大權トハ何ソ蓋シ國ノ政務ニ二種アリ一ハ天皇カ親裁  
セラルルモノニハ機關ヲシテ行ハシムルモノ是ナリ天皇ノ大權トハ前者即チ  
親裁ノ政務ヲ稱ス畢竟國務大臣ハ天皇直接ノ政務ニ參襄スルノミ機關ニ依リ  
テ行ハルル政務ニ關シテハ干與スルノ限ニ在ラス云々ト云フハ其第二ノ理由  
次ニ補助トハ何ソ天皇ノ行為ヲ傍ヨリ參贊スルノ意ニシテ天皇ノ行為ノ一部  
ヲ補充スルモノト看ルヘカラス或學者ハ天皇ハ國務大臣ノ補助ヲ拒ミ得ルヤ  
否ヤ問題ト爲ス蓋シ補助ノ權限其レ自身ハ憲法上定マリタルモノニシテ之  
ヲ動スヘキ性質ノモノニ非スト雖モ補助ノ行為ハ必スシモ天皇ヲ拘束スルモ  
ノニ非ス天皇ハ之ヲ拒ミテ納レサルコトモ爲シ得サルニ非サルナリト云フハ  
以上ハ國務大臣ノ性質ノ大體ナリ次ニ國務大臣ノ責任ニ移リテ説明ヲ試ミン  
ト欲ス

大臣責任ノ理論ハ種種アリ先ツ第一ノ理由ニ曰ク甲論ハ不問セリ  
第一説ニ依レハ君主ニ對シテハ其責任ヲ問フコト能ハス故ニ大臣カ代リテ責  
任ヲ負擔スルモノト爲ス然レトモ若シ此ノ如ク他人ノ行為ニ對シテ無關  
係ナル者カ責任ヲ負フコトト爲リ甚タ不道理ノ説ナリト云ハサルヘカラス  
第二説ニ曰ク君主ハ本來過失ナシ唯大臣ノ輔弼宜キヲ得サル爲メニ過失ヲ生  
ス故ニ之ニ對シテ大臣ハ責任ヲ負ハサルヘカラスト此議論ハ先ツ君主ニハ總  
對ニ過失ナキコトヲ斷定スレトモ此斷定ハ必スシモ然リト謂フコト能ハス隨  
テ過失ノ責任ヲ總テ國務大臣ニ歸スル十分ナル證據ヲ有セストノ批難ヲ免ル  
ルコト能ハス  
第三説ニ曰ク君主ハ立法行政司法三權ノ上ニ立テ之ヲ統御スルノ地位ニ在ル  
者ニシテ政治ノ實務ニ當ル者ニ非ス故ニ施政上ノ責任ハ總テ大臣ノミ之ニ當  
ルト此説ハ君主ハ全ク政ヲ行ハストスレトモ憲法上君主親裁ノ政務ハ決シテ  
斷カラス隨テ此點ヨリシテ君主無責任及ヒ大臣責任ヲ論スルコト能ハサルヤ  
亦明カナリト云フハ其第一ノ理由ニ曰ク甲論ハ不問セリ



第四款ニ曰ク大臣ハ君主ト共ニ國家ノ行爲ニ參加ス故ニ總テ責任ヲ負擔セザルヘカラスト此論固ヨリ我國法ニ適用スヘカラス且一般立憲國ノ國法トシテモ大臣ハ君主ニ隸屬スル機關ニ過キス君主ト對立シテ國家ノ行爲ニ參加スルモノト看ルヘキニ非ス故ニ此説ハ不可ナリ

以上大臣責任ニ關スル内外學說ノ主要ナルモノヲ擧ケテ之ヲ略評セリ

予ハ以爲ク大臣責任ノ理由ハ甚ク簡單ナリ今單ニ我憲法ニ就テ論ゼンニ第五十五條ニ於テ大臣ハ天皇ヲ輔弼スルノ權限アルコトヲ定ム此權限ノ存スル所即チ責任ノ生スル所以ナリ總テ權限ヲ有スル者ハ責任之ニ伴フハ當然ノ理ニシテ各種ノ機關皆然ラサルナシ故ニ大臣ノ責任ハ君主ニ代リテ負擔スルニモ非ス君主ト對立シテ負擔スルモノニモ非ス自己カ與ヘラレタル權限ヨリ當然責任ヲ負擔スルニ外ナラス

大臣ノ權限ハ右ニ述ヘタル如ク天皇ヲ輔弼スルニ在リ故ニ天皇ノ行爲ニ關シテハ常ニ國法ニ違ハス以テ一國ノ安寧幸福ヲ維持増進スルコトヲ期シ其職責ヲ盡ササルヘカラス若シ此ノ如クナル能ヘラランカ大臣ハ其權限ヲ忠實ニ行

ハサルノ責ヲ免ルルコト能ハサルナリ

大臣責任ノ理由右ノ如シ然ラズ或ハ曰ハン總テ機關ハ其權限ニ伴ヒテ責任アリ大臣憲法上ノ責任モ之ト異ナラストモハ特ニ此ノ如キ規定ヲ設クル必要ヲ見ス畢竟他ノ機關ト同シク責任ニ關シテハ何等ノ規定ヲ設ケサルモ可ナリ然ルニ憲法ニ於テ特ニ此規定ヲ設ケンハ他ニ責任ノ理由在リテ存スルニ非スヤト

然リ大臣ノミニ關シテニ責任ヲ規定セシハ責任ノ性質カ他ニ異ナルニ非ス別ニ之ヲ規定スヘキ必要アリテ存スルナリ之ヲ知ルカ爲メニハ廻リテ本條全體ヲ通覽スルヲ要ス曰ク國務各大臣ハ……其責任ニ任ヌ下即チ本條ハ各大臣單獨ノ責任ヲ規定シ外國ノ制度ニ於ケル連帶責任ノ主義ニ依ラザルコトヲ明カニスルモノニシテ特ニ責任ノ規定ヲ爲ス必要此ニ在リテ存スルナリ

外國ニ於テハ或ハ黨派政治ノ實ヲ認メ各政黨團體カ内閣ヲ興奪スルカ故ニ國務大臣ノ地位ハ一黨之ヲ占有シ連帶シテ政務ニ當リ其責任モ亦連帶シテ之ニ當ルヲ原則トス然ルニ我國ニ於テハ黨派政治ノ實ヲ認メテ隨テ連帶シテ責任

任スルノ主義モ之ヲ認ムルコトヲ爲ナス大臣ハ各自ノ權限ニ因リテ責任ヲ負  
擔スルヲ原則トス故ニ曰ク各大臣ハ……其責任ニ任ズルヲ……  
右述ヘタル所ニ據リ憲法ニ於テ特ニ大臣ノ責任ヲ規定シタル所以ヲ知ルニ足  
ルヘシ……  
責任ハ何人ニ對シテ負擔スルヤ蓋シ統治ノ機關タル者ハ總テ統治ノ主體ニ對  
シテ責任スルニ外ナラス言フ換フレハ主體ニ由リ付與セラレタル權限ヲ行  
フハ主體ニ對スル義務ニシテ之ニ由リテ責任ヲ生スルナリ我國法ニ於テハ常  
ニ國務大臣ノミナラス百官百司皆天皇ニ對シテ責任スルモノタルヲ論ラ埃  
タス

然ルニ外國ノ學說トシテハ屢大臣ノ輿論ニ對スル責任及ヒ議會又ハ裁判所ニ  
對スル責任等ヲ論ス我國學者モ往往此種ノ說ヲ爲ス者アリ蓋シ輿論ニ對スル  
責任トハ外國ニ於テ國務大臣カ輿論ノ趨勢ニ依リ責任ヲ引キテ退クノ習慣アル  
ヨリ來ルノ說タリ然レトモ此等ハ民主國ニ在リテ論スヘキ事ニシテ我國法ニ  
於テ問フ所ニ非ス次ニ議會及ヒ裁判所ニ對スル責任ト稱スルハ外國ニ於テ或

ハ議會ニ大臣彈劾ノ職權ヲ認マ或ハ大臣ニ對スル裁判機關ヲ設ケタル場合ニ於  
テ學者カ此種ノ責任ヲ舉ク然レトモ正確ナル理論ト謂フヘカラス何トナレハ  
前述ノ如ク機關ノ責任ハ主體ニ對スルニ外ナラス議會ニシテ統治ノ主體タリ  
裁判所ニシテ統治ノ主體タラハ姑ク之ニ對スル責任ヲ論スヘシト雖モ若シ  
然ラサル以上ハ議會ノ彈劾裁判所ノ裁判ハ主體カ此等機關ニ依リテ大臣ノ責  
任ヲ問フ手段ニ過キス此手段ニ供セラルル機關ニ對シテ責任アリト云フノ正確  
ナラサルハ固ヨリ明カナリ……  
外國法ノ論トシテモ右述ヘタル如シ我國法トシテハ勿論大臣ノ彈劾及ヒ裁判  
ノ制度ハ之ヲ認マラス隨テ此種ノ責任ハ論スルヲ要セザルナリ……  
向キ或學者ハ大臣責任ノ種類ヲ舉ク(一)道徳上ノ責任(二)政治上ノ責任(三)法律上  
ノ責任トテ區別スト雖モ此區別カ國法上適當ナラサルハ論ラ埃タス且此處ニ  
於テ説明スルハ單ニ大臣憲法上ノ責任ニ止マルヲ以テ其他ニ及ブノ必要ナク  
此等ノ議論ニ就テハ一辯駁ヲ費ササルヘシ……  
以上ヲ以テ憲法第五十五條第一項ヲ略說セリ次ニ第二項ノ説明ニ移ラントス

同項ニ曰ク凡テ法律勅令其他國務ニ關ル詔勅ハ國務大臣ノ副署ヲ要スル先ツ副署トナ如何ナル性質ヲモフナリヤラ論セサルヘカラス普通ノ學者ハ曰ク副署ハ君主行爲ノ公ノ證明ナリ故ニ副署ナキ君主ノ行爲ハ國法上君主ノ行爲タル能ハスト蓋シ此見解ハ本來ノ道理ヲ誤リ學者ヲシテ一種ノ誤解ヲ生セシムルノ恐ナキニ非ス阿トナレハ副署ハ單ニ君主ノ行爲カ誤ムヘキ一ノ手續ニ過キス之ヲ以テ君主ノ行爲其レ自身ヲ認定スルモノト看ルヘカラス言フ換フレハ副署本來ノ性質ハ國務大臣カ君主ノ行爲ヲ參照セシコトヲ明カニスルモノニシテ進ミテ君主ノ行爲ヲ是認シ證明スルマテノ力ヲ有スルモノニ非ス君主ノ行爲ハ本ナリ副署ハ末ナリ蓋シ其結果ヨリ觀察スレハ副署ナキ法令等ハ效力ヲ生セサルカ故ニ恰モ副署ニ依リ君主ノ行爲カ定マル如ク見ユレトモ是レ本末ヲ誤レル見解ナリ君主ノ行爲カ副署ニ依リテ成ルニ非ス君主ノ行爲ヲ公ニスル一手續トシテ副署ヲ要スル所以ナリ

右述ヘタル如クナルカ故ニ副署ハ大臣カ君主ノ行爲ニ參照シタルコトヲ明カニスル手續ニ外ナラス副署ニ關シ重要ナル問題ハ大臣ハ副署ヲ拒ミ得ルヤ否

ヤノ點ニ在リ之ニ就テハ學說ニ派ニ岐ルニ似タリ

第一説ハ曰ク大臣ハ絕對ニ副署ヲ拒ムコトヲ得ス蓋シ此場合ハ大臣ノ承認ヲ請求スル所以ニ非ス君主カ命シテ副署セシムルナリ君主ノ命スル所大臣ハ之ヲ遵奉スルノ外アルヘカラス縱令其命スル所ニシテ違憲若クハ違悞ナリトスルモ大臣ハ之ヲ爭フノ職權ナシ何トナレハ法ノ最高解釋權ハ君主ニ在リ大臣ハ自己ノ見解ヲ探リテ君主ト相爭フコト能ハサルヤ明カナレムナリ若シ假ニ君主ノ命スル所ヲ違法ナリトシテ副署ヲ拒ミ得トセシカ國ノ實權ハ君主ノ手ニ在セシテ大臣ノ掌握ニ在リト謂ハサルヘカラス是レ實理ノ說ニ非スヤト此論一理アルニ似タリ然レトモ少シク仔細ニ考究スルトキハ右ノ說明ハ尙ホ疑ハシキ點アルヲ免レズ此論ノ要點ハ法ノ正當ナル解釋ハ君主ノミ爲スヲ得大臣ハ之ニ對シテ異議ヲ容ルル能ハスト云フニ在リ此推論ハ必スシモ當ラズ固ヨリ法ハ天皇ノ意思ナリ然レトモ實際ニ當リテ之ヲ應用スル場合ニハ君主ト雖モ往々解釋ヲ誤ルコトナキニ非ス是ニ於テカ大臣輔弼ノ必要アル所以ニシテ違法ノ行爲ニ對シテハ之ヲ匡補スルコトヲ得サルヘカラス

第二説ニ曰ク法ハ真正ナル天皇ノ意思ナリ之ニ違フモノハ正當ナル天皇ノ意思ト謂フコト能ハス故ニ違法ノ行為ニ對シテハ大臣ハ副署ヲ拒ムコトヲ得ナルヘカラス是レ畢竟大臣カ其職務ヲ盡ス所以ナレハナリト此説誤ラス此ノ如クスト雖モ大臣ハ權力ヲ以テ君主ト相争フニ非ス唯法ニ依リテ其輔弼ノ職責ヲ盡スニ外ナラス或ハ曰ハン大臣ノ見解ニシテ誤ルトキハ如何誤レル見解ヲ以テ副署ヲ拒ムハ不當ノ甚シキニ非スヤト固ヨリ然レトモ右述フル所ハ違法ノ場合ナルコトヲ前提トス言ヲ換フレハ大臣ノ見解ノ誤ラナルコトヲ前提トシタルカ故ニ或者ノ云フ如キ批難ヲ生セス若シ君主ノ行為ニシテ違法ニ非テランカ固ヨリ大臣ノ見解如何ニ拘ハラズ副署ヲ拒ムヘキ道理ナシ萬一大臣カ誤レル見解ヲ執リテ強ヒテ副署ヲ拒ム如キコトアリトセンカ天皇ハ常ニ官吏任免ノ權ヲ以テ之ニ臨ムカ故ニ第一説論者ノ言フカ如キ國ノ實權カ大臣ノ手ニ移ルノ論結ヲ生セタルナリ

右述ヘタル所ヲ約スルニ立憲制ノ原則トシテ君主自身モ其機關タル大臣モ總テ法ニ從ヒテ行動ス故ニ理論上違法ノ所爲ニ對シテハ大臣ニ副署ノ義務ヲ生

セタルヘキナリ  
 最後ニ副署ト責任トノ關係ヲ一言セントス或學者ハ曰ク大臣ノ責任ハ副署ニ因リテ生スト此論ハ輔弼ノ權限ト副署トヲ混同セルモノナリ既ニ述ヘタル如ク大臣ノ責任ハ輔弼ノ權限ニ伴ヒテ生ス故ニ縱令副署セタルモ其責任ヲ免ルヘキニ非ス副署ハ天皇ノ行為ヲ公ニスル手續形式ノ一ニ過キス之ニ據リテ大臣參贊ノ實ヲ明カニスルヲ得ト雖モ之ヲ以テ責任發生ノ原因ト看ルヘキニ非ス輔弼ノ權限ハ本ナリ副署ノ手續ハ末ナリ二者ヲ混スルハ誤レリト謂ハサルヘカラス  
 終ニ臨ミ副署ニ關シテ一問題アリ國務大臣全員ヲ同時ニ任免スル場合ハ其任免ノ勅令ニ何人カ副署スヘキヤノ疑問ナリ實例ニ依レハ後任ノ大臣カ副署ヲ爲スコトトス然レトモ理論トシテハ未タ任免ナキニ既ニ後任ノ大臣アルヘキ道理ナシ隨テ副署ヲ爲スノ途アルヘカラス已ムヲ得テレハ實例ニ反シ前任ノ大臣ヲシテ副署セシムルカ穩當ナランカ即チ此勅令ノ效力トシテ前任者ハ免セラレ同時ニ後任ノ大臣ヲ生スルモノトスヘキニ似タリ

以上ノ所述ヲ以テ憲法第五十五條第一項及ヒ第二項ノ説明ヲ了レリ尙ホ憲法全體ニ亙リ覽ルニ國務大臣ノ職權ニ關スル規定ハ之ニ止マラス今參考ヲ爲シニ大體ヲ列舉シ以テ本章ヲ了ラントス

- 一 輔弼 國務大臣憲法上ノ職權ハ主トシテ此ニ在リテ存ス、次則テ之ヲ
- 二 副署 請署ハ輔弼ノ權限ヨリ生ズル形式ナリ但必ス之ヲ相律ビテ起ラヌ
- 三 帝國議會ノ各院ニ出席シ及ヒ發言スルノ權

憲法第五十四條ニ依レハ國務大臣ハ何時タリトモ各議院ニ出席シ及ヒ發言スルコトヲ得又議院法第四十二條ニ依レハ國務大臣ノ發言ハ何時タリトモ之ヲ許スヘシ但之カ爲メニ議員ノ演說ヲ中止セシムルヲ得ナルモノトス尙ホ此權ハ委員會及ヒ協議會ノ場合ニ及フコトハ議院法第四十三條及ヒ第五十七條ニ規定ス

此等ハ勿論發言ニ止マリ表決ノ數ニ加ハルコトヲ得ヌ

- 四 現行法ニ依レハ各省大臣ハ同時ニ國務大臣タルカ故ニ國務各大臣ハ行政長官トシテ政府ノ一部ニ當ルモノトス

五 國務各大臣ハ職權上樞密顧問官タル地位ヲ有シ自ラ會議ニ列席シ發言表決ヲ爲シ或ハ委員ヲ差シテ會議ニ出席シ說明ヲ爲シシムルコトヲ得

以上ヲ以テ國務大臣ニ關スル主要ノ説明ヲ爲シ盡セリト考フ

### 第八章 政府

憲法ニ所謂政府トハ何ソ其意義稍々明確ヲ缺ク或學者ハ曰ク政府トハ天皇大權行使ノ府ナリ大權トハ親裁ノ政務ニシテ之ニ參製スル機關即チ國務大臣及ヒ樞密顧問ヲ政府ト謂フト此論ハ機關ノ性質ヲ誤解ス憲法上政府ノ職務ハ主トシテ議會ニ對シ又ハ臣民ニ對スル關係ナリ然ルニ國務大臣及ヒ樞密顧問ハ天皇ニ對シ内ニ向ヒテ輔翼スル機關ナリ二者ノ間ニ自ラ權限形式ノ差別ヲ見ルヘシ且此論者ハ何故ニ大權行使ノ府ヲ政府ニシテ其他行政事務ヲ掌ル官府ハ政府ニ非ストスルヤ毫モ論據トスル所ナシ

予ハ以爲ク政府トハ文字ノ示ス如ク最高行政ノ府ナリト此ノ如ク解シテ憲法上毫モ支障ナキノミナラス理論上穩當ナリト考フ

最高行政府トハ内閣總理大臣及ヒ各省大臣ヲ主トシテ指揮スルコト固ヨリ論  
 ナシ此等ハ一方ニ於テハ憲法上ノ國務大臣タリ然レトモ此二種ノ權限ハ混  
 混同スヘカラス  
 政府ニ關スル詳細ノ説明ハ行政法ノ範圍ニ讓ルラ至當ナリトス憲法上政府ニ  
 關スル規定ハ甚タ妙キノミナラス此等ハ他ノ場合ト牽連シテ説明シ得ヘキカ  
 故ニ此處ニ於テハ唯政府ノ意義ヲ一言スルニ止メントス

### 第九章 司法裁判所

憲法第五章ニ司法ノ規定ヲ設ケ其首條ニ曰ク「司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ  
 依リ裁判所之ヲ行フ」ト此條ノ説明ヲ爲スニ方リ三段ニ區別シ先ツ第一段ニ  
 「司法權トハ何ソヲ論ゼサルヘカラス彼ノ「モンアスキ」氏以來學者ハ司法ヲ以  
 テ立法及ヒ行政ニ對スル國權ノ區分トシテ説明ス此觀念ハ今日ニ至ルマテ幾  
 多ノ變遷ヲ受ケタリ其初ニ當リテハ國權其レ自身カ立法行政及ヒ司法ノ三ニ  
 分ルル如ク考ヘシモノ國權統一ノ理論明白ナルニ至リ三者ハ國權其レ自身カ根

本的ニ區別セラレルニ非ス唯國權ノ作用カ此ノ如ク分ルルニ過キスト爲スニ  
 至レリ然レトモ此觀念モ仍ホ精確ナラス何トナレハ國權ノ作用ヲ其性質ヨリ  
 三分セントスルハ殆ト無効ノ事ニ屬スレハナリ先ツ立法ハ法規制定ノ行爲ナ  
 リ司法ハ法ヲ解釋適用スル行爲ナリ而シテ行政ハ法ノ範圍内ニ於ケル施政行  
 爲ナリトセンカ今日ノ法制ヲ説明スルニ於テ何ノ效オキゾマナラス却テ學者  
 ノ疑惑ヲ惹起シ易シ例ヘハ今日ノ法制ニ於テ立法機關カ法規ノ制定ヲ掌ル  
 ニ非ス又司法機關カ法ヲ解釋適用ヲ掌ルニ非ス行政機關ト雖モ亦之ヲ爲レ  
 得ヘク畢竟右ノ區別ハ曖昧ニ歸スルヲ免レタルナリ  
 今日ノ法制ニ於ケル立法行政司法ノ別ハ理論的實質的ノモノニ非ス主トシテ  
 沿革上ノ理由ニ基ケル機關ノ權限形式ノ差別タルニ過キスト看ルヘシ  
 沿革上ノ理由トハ何ソ社會發達ノ必要上司法裁判ノ部分ハ夙ニ獨立ノ地位ニ  
 在リ後議會制度ノ發生スルニ及ヒ立法ノ部分カ亦他ノ行政ノ部分ト區別セラ  
 ルルニ至リ茲ニ司法立法及ヒ行政ノ區別ヲ馴致シ今日ノ法制ニ於テモ三者各  
 形式ヲ異ニスルコトト爲リシナリ

右ノ如ク立法司法行政ノ別ハ機關ノ權限形式ノ別ニ過キストシテ茲ニ其意義ヲ論定セント欲ス先ツ司法ノ意義ニ關スル學說ヲ擧ゲン

第一說ニ曰ク司法ハ特定ノ事件ニ對シテ解釋適用ヲ爲スルモノトシテ主タル目的トスル國家ノ行爲ナリト此定義ハ先ツ司法ヲ立法ヲ區別シ立法ハ法律ヲ制定スレトモ司法ハ法ノ解釋適用ヲ爲スモノトス次ニ司法ヲ行政ヲ區別シ行政ニ在リテモ法ノ解釋適用ヲ爲スコトアレトモ司法ノ如ク之ヲ以テ主タル目的ト爲スモノニ非ス行政ノ目的ハ當ニ社會ノ安寧幸福ニ在リトス

此論ハ理論的ニ實質ヨリ司法ノ意義ヲ定メントスルモノニシテ前ニ述ヘタル如ク曖昧タルヲ免レシ例ヘハ論者モ法ノ解釋適用ハ司法ニ限ラス行政ノ範圍ニモ之アルコトヲ認ム唯行政ニ在リテハ其目的カ社會ノ安寧幸福ニ在リト爲ス然レトモ司法ト曰ヒ行政ト曰フモ畢竟社會ノ安寧幸福ヲ目的トスルニ外ナラス而シテ法ヲ解釋適用スルノ途復タ二アルヘカラス此ノ如ク司法ト行政トノ區別既ニ明カナラス其他推シテ知ルヘシ

第二說ニ曰ク司法トハ法律ニ依リ裁判所カ獨立職權トシテ行フ事件ヲ總稱ス

ト此說ハ實質ヨリ司法ノ意義ヲ論定シ難キヲ以テ事件ノ範圍ヲ以テ其意義ヲ定メシトス之ニ依レバ民事刑事ノ訴訟事件ヲミナラス裁判所ノ取扱フ非訟事件等ノ一切ノ事務ヲ總稱シテ司法ト謂フナリ

此說ハ甚タ漠然ニ失シ純粹ナル司法事務ト行政事務ト一部トシテ便宜上裁判所カ取扱フモノト區別ナラズコト能ハス且裁判所ノ取扱フ事件ト謂フモノニテハ殆ト何等ノ意義ヲモ爲サケルナリ

第三說モ形式的ニ定義ヲ試ミテ曰ク國家ノ意思ノ決定ニ當事者カ權利トシテ參與スルヲ得ル事務ヲ稱シテ司法ト謂フト即チ當事者ノ參與ト云フ形式ヲ以テ司法ノ特色ト爲スモノナリ然レトモ此說モ亦不完全ナリ現ニ國法上明カニ司法裁判ト區別セラルル行政裁判ニ於テモ當事者ハ權利トシテ之ニ參與スルコトヲ得ヘキノミナラス此他各種ノ審判制度ニ於テ此形式ヲ取ルモノ亦尠カラス

以上ノ三說孰レモ精確ナル議論ニ非ス此外種種ノ學說ナキニ非テ例ヘバ司法トハ廣列行爲ナリト曰フ者アリ然レトモ裁判ノ司法ニ限ラザルコトハ前述セ

ルカ如シ或ハ司法トハ權利侵害ニ對シテ制裁ヲ加フル行為ナリト曰フ此説モ亦不完全ナリ何トナレハ例ヘハ行政裁判モ亦主トシテ權利侵害ニ對スルモノナレハナリ或ハ又法規違反ニ對スル裁決ヲ稱シテ司法ト曰フ此説モ一面ニ於テハ廣キニ失シ一面ニ於テハ狹キニ失ス何トナレハ一方ニ於テハ法規違反ノモテ裁決ハ司法裁判ニ限ラザルト共ニ一方ニ於テハ司法裁判ハ必スシモ法規違反ノモテ裁決スルニ非ス其他ノ紛争ニ對シテモ之ニ立入ルコトアレハナリ右司法ノ意義ヲ定ムレト固ニ難シ是レ畢竟理論的性質上ヨリ立法行政及ヒ司法ノ區別ヲ立テントスルヨリ來ル困難ナリ予ハ三者區別ノ理論ハ姑ク措キ唯現在ノ法制ニ依リ司法裁判トシテ規定セララルル所ヲ研鑽セント欲ス

憲法ニ依レハ司法裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ムトセリ此條ニ依リ裁判所構成法ノ發布アリタリ而シテ同法第二條ニ司法裁判所ノ權限ヲ定ム曰ク通常裁判所ニ於テハ民事刑事ヲ裁判スルモノトス但シ法律ヲ以テ特別裁判所ノ管轄ニ屬セシメタルモノハ此ノ限ニ在ラスト此規定ニ依レハ司法ハ主トシテ民事刑事ノ裁判ヲ掌ルト解スヘキカ如シ尙ホ憲法及ヒ此議ノ規定ニ依レハ司

法裁判ニ通常特別ノ二種アリ原則トシテハ民事刑事ノ裁判ハ通常裁判所ニ於テ之ヲ管轄ス唯特別ノ場合ニ種種ノ裁判所ヲ置キテ民事刑事ヲ掌ラシムルコトアリ所謂通常裁判所トハ區裁判所地方裁判所控訴院及ヒ大審院是ナリ所謂特別裁判所トハ軍事裁判所等ノ種類ヲ指稱ス

右ハ構成法ニ於ケル司法裁判ノ意義ナリ何故ニ司法裁判ヲ主トシテ民事刑事ニ限界シタルヤ自ラ其理由アリテ存ス今説明ノ便宜ノ爲メニ各種ノ裁判所ニ於テ取扱フ事件ヲ舉ク其司法裁判ト異ナル所以ヲ説明スルトキハ歸スル所司法裁判ハ主トシテ民事刑事ニ限ララルコトヲ知ルヘキナリ

先ツ行政上ノ事件ニ關シテハ主トシテ行政裁判ノ制度アリテ司法裁判ト區別セララルコトハ憲法第六十一條ノ規定ニ依リ明カナリ曰ク「行政官廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ傷害セラレタリトスルノ訴訟ニシテ別ニ法律ヲ以テ定メタル行政裁判所ノ裁判ニ屬スヘキモノハ司法裁判所ニ於テ受理スルヲ限ニ在ラスト本條ニ關シテハ三箇ノ問題アリ得ヘシ今序ニ之ヲ略述スヘシ」(一)行政官廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ傷害セラレタリトスル場合ニ總テ訴訟ヲ起シ得ヘキ事



蓋シ憲法ノ條文ハ唯訴訟ヲ起シ得ヘキ場合ノミヲ規定ニシテ他ノ場合ニ訴訟ヲ起シ得ルコトヲ定メタルニ非ス現ニ訴訟ヲ許ス場合ハ法律ニ由リ特定セラル(一)此性質ノ訴訟ハ行政裁判所以外ノ裁判所ニ提起スルコトヲ得ザルヤ否ヤ蓋シ本條ニ行政官廳云云ノ訴訟ニシテ行政裁判所ニ屬スヘキモノト規定シタルハ原則トシテ此ノ如キ訴訟ハ行政裁判ニ專屬スヘキコトヲ定メタル點ニ付テハ憲法ノ規定ハ毫モ制限的ニ非ス現ニ此種以外ノ訴訟ニシテ行政裁判ニ依ル場合尠カラヌ右述ヘタル所ニ依リ憲法第六十一條ハ要スルニ行政裁判ト司法裁判トノ區別ヲ立テ原則トシテ行政裁判ニ屬スヘキ事件ヲ規定シタルモノナリ言ヲ換フレバ行政事件ニ關シテハ原則トシテ司法裁判所ヲ管轄スル所ニ非タルナリ

次に行政裁判以外ニ於ケル各種ノ行政上ノ裁決ハ總テ行政上ノ機關カ之ヲ掌ルヲ便宜トスルカ故ニ今日ノ制度ハ總テ之ニ依リ司法裁判カ之ニ干渉セザルナリ其理由ハ(一)行政上ノ便宜ニ通スルハ行政上ノ機關ニ如クモゾナシ司法裁

判官ハ此點ニ於テ不十分ナルヲ免レヌ(二)行政ト司法トハ各機關ノ種類ヲ分テ監督權ノ作用ヲ別ニスルカ故ニ二者相干渉スルハ不便ナルヲ以テオラスニ機關ノ間ニ軋轢ヲ生セシムル恐アリ右ノ重ナル二理由ニ據リ行政上ノ事件ハ司法裁判ニ於テ取扱ハサルヲ原則トス

又次ニ權限裁判ニ關シテハ勿論司法裁判所ノ取扱ヘキ所ニ非ス何トナレハ權限裁判所ハ司法機關ト行政機關トノ間ノ爭議ナルカ故ニ此等機關ノ上ニ位スル機關ニ非サレハ不可ナルコト明カナレハナリ

又次ニ特別ノ身分アル者ニ對スル懲戒事件ハ是レ亦別種ノ裁判ヲ必要トス例ヘハ官吏ニ對スル懲戒ハ懲戒委員會ノ裁決ニ依ルカ如シ隨テ懲戒事件ハ司法裁判所ニ於テ取扱フヘキ性質ノモノニ非ス

以上述ヘ來レル所ニ依リ歸スル所司法裁判所ノ權限ハ主トシテ民事及ヒ刑事ニ在ルコトヲ知ルヘキナリ

右ハ憲法第五十七條司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フト規定セル中ニ就キ第一ニ司法ノ意義ヲ説明シタルナリ

次ニ本條ニ所謂天皇ノ名ニ於テ行フトハ何ノ憲法全體ヲ通覽スルニ天皇ノ名ニ於テ下規定スルモノニアリ一ハ第十七條ノ規定ニシテ攝政ハ天皇ノ名ニ於テ大權ヲ行フトアリニハ本條是ナリ

畢竟天皇ノ名ニ於テ下ハ他ヨリ拘束セラルルコトナク直接ニ天皇ノ名ヲ以テスルノ意ナリ攝政ハ直接ニ天皇ヲ大權ヲ行フモノナルガ故ニ論ナシ裁判官モ其身分ニ關シテ憲法上ノ保障ヲ有シ他ノ牽制羈束ヲ受ケス法令等ニ依リ嚴正ニ裁決ヲ行フコトヲ得此點ハ普通行政機關ト大ニ異ナレリ普通行政機關ハ上官ノ關係及ヒ其他監督權ノ作用等ニ依リ其行為ハ常ニ牽制ヲ受クルヲ免レス然ルニ司法裁判官ハ法ヲ執リテ一般國民ノ權利利益ヲ左右スルヲ以テ其主タル職務ト爲スカ故ニ其地位行動ハ特ニ憲法ニ依リテ保障セラルルナリ

以上憲法第五十七條第一項第二段ノ略說ナリ次ニ第三段ニ「法律ニ依リ」行フトトヲ定ム此點モ亦議論ノ存スル所ナリ

第一說ハ曰ク「法律ニ依リ」行フトハ裁判所ハ法律ノモヲ解釋適用スルテ意ナリト外國學者ニ此說ヲ採ル者多シ然レトモ法規ヲ定ム人ノ權利義務ヲ定ムルハ

必スシモ法律ヲミニ限ラス命令ト雖モ亦然リ然ルニ裁判所ハ法律ノ外解釋適用スルコトヲ得スルハ救済ニシテ且道理ナキ議論ナリ況ヤ法令不備ノ場合ニ於テモ裁判官ハ之ヲ理由トシテ裁決ヲ拒絕スルカラサルハ古來ノ原則ニシテ此ノ如キ場合ハ裁判官ハ依リテ裁決スルハ必要アルニ於テヤ

第二說ハ曰ク此句ノ意ハ法律ニ依リテ裁判官ヲ羈束スルヲ得命令等ハ羈束ノ效力ヲ有セス何トナレバ裁判官ハ見解如何ニ依リテ之ヲ適用セサルヲ得レハナリト此說モ未タ完全ナク蓋シ是レ實ニ法律ヲ以テ命令ト雖モ國法止正當ニシテ有效ナルモノナランニハ裁判官ハ之ヲ適用セサルハカラス果シテ然ラハ法律ノ羈束力ヲ有スト云フハ決シテ適當ナラズ

第三說ハ曰ク法律ニ依リテハ判決ノ標準ヲ規定シタルニ非ス裁判官ノ行ハ手續ノ規定ナリ即チ法律ヲ以テ定メタル手續ニ依リ裁判官ノ行ハ手續ニ外ナラズト所謂手續法律トハ民事訴訟法刑事訴訟法ノ如キ是才見此說ハ是モ適當ナルニ似タリ或ハ曰ク裁判手續ノ如キハ法律ヲ以テ定ムルハ必要ヲ見ス例ハ勅

令ヲ以テ之ヲ規定スルモ何等ノ支障アリ故ニ第五十七條ニ所謂法律ニ依リテ  
 ハ手續ニ關スル規定ニ非スト然レトモ司法裁判ニ關シテ憲法ハ特ニ鄭重ノ  
 規定ヲ設ケ例ハ裁判所ヲ構成裁判官ノ身分裁判ノ對審判決等主トシテ法律  
 ニ依リテ規定スヘキコトヲ定ム(第五八條第五九條左ノハ)般ニ裁判手續ヲ法  
 律ニ由リ規定セラルヘシトスルハ專ラ至當ノ事ニ屬スルナリ故ニ曰ク第三說  
 ハ最モ穩當ナリトスルベシ也  
 右ハ憲法第五十七條第一項第三段法律ニ依リテ行フノ句ヲ解釋シタルナリ之ヲ  
 以テ同條大體ノ說明ヲ行フニ考テ則チ之ニ依リテ司法裁判官ノ更ニ其内容ニ  
 司法裁判所ノ職權ノ大體ハ以上述ヘタル所ニ依リ明カナリ命令更ニ其内容ニ  
 進ミテ裁判所ノ審査權ニ關スル問題ニ移ラントス詳ク言ヘハ裁判所カ法令ヲ  
 解釋適用スルニ當リ其法令ニ關シ如何ナル程度ヲ審査行ヒ得ルヤ否ヤノ問  
 題ナリ之ヲ論スルニハ法律ニ命令トシテ區別シテ觀察スルニシテ古來ノ原則ニ  
 (一)法律ハ法律ノ審査ヲ分テテ形式ヲ審査及ヒ實質ヲ審査スル結合不離ニ  
 甲ニ形式ヲ審査スルニ關シテ命令ニ關シテ然レバハ其範圍ハ裁判官ノ解釋權

第五十三條理事ノ任免ニ關スル規定  
 第六十三條社員タル資格ノ得喪ニ關スル規定  
 以上ノ六事項ハ必ズ之ヲ定款ニ記載スルコトヲ要ス若シ此一ヲ欠缺スルトキ  
 ハ定款ノ效力ナキモノナリ然レトモ之ニ反シ右ニ述ヘタル以外ノ事項ハ之ヲ  
 定款ニ規定スルコト能ハストノ法律ノ趣旨ニ非ス例ヘハ總會ノ決議ノ方法又  
 ハ理事ノ權限或ハ監事ヲ設置スルコト或ハ總會ノ度數ヲ定ムルコト又ハ總會  
 招集ノ方法ヲ定ムルコト或ハ解散ノ事由ヲ定ムルコト或ハ財産ノ處分方法ヲ  
 定ムルコト或ハ清算人タル者ヲ定ムルコト等ヲ定款ニ記載スルコトアルヘキ  
 ハ民法ノ規定ニ依リテ推測スルコトヲ得(第三八條第五二條第五三條第五五條  
 第五八條第六一條第六二條第六三條第六八條第六九條第七二條第七四條)右  
 ノ如ク定款ナルモノハ社團法人ノ存在及ヒ活動ノ基礎トモ謂フヘキ事項ヲ  
 定ムルモノニシテ社團法人ノ憲法上關フヘキモノナリ而シテ定款上ハ何ヲ謂  
 フカ此點ニ付キ學者ノ見解ニ様ナラス或ハ定款ヲ以テ一箇ノ法律ナリトシ或  
 ハ法律行爲ナリトシ或ハ法律行爲ニ非ズル一類ノ私法上ノ行爲ナリトセリ此

ノ如ク定款ノ性質ニ關シ見解ノ分歧スル理由ハ一ハ法人ノ性質ニ關スル意見ヲ異ニスルト又一ハ法律行為ノ定義ニ關シ其說ヲ異ニスルカ爲メナリ予ノ信スル所ニ據レハ定款トハ我民法上主務官廳ノ許可ヲ得テ其效力ヲ生スルモノナルモ爲メニ國家ノ意思ト謂フコト能ハス定款ハ社團法人ヲ組織スル自然人ノ意思ナルコト明カナリ然ルニ法律ハ必ズ國家ノ意思ニ基テモリナレバ若シ定款ヲ以テ一箇ノ法律ナリトノ說ヲ採レンハ國家ハ社團法人ヲ組織スル自然人ニ對シテ所謂自主權 (Autonomie) ヲ付與シ自ラ法律ヲ制定スルノ權力ヲ與ヘタルモノト謂ハサルヘカラス然レトモ我國法上此ノ如キ自主權ヲ付與スルカ如キ規定ナキヲ以テ一箇ノ法律ナリトノ說ヲ採用スルコト能ハス熟考フルニ定款ハ社團法人ヲ組織スル自然人カ法律上ノ效果ヲ生セシメテ目的トスル意思ヲ合致ニ過キサルナリ故ニ定款ハ一ノ法律行為ニシテ二人以上ノ意思ノ合致ニ因リテ成立スルモノナルヲ以テ所謂契約ナリト謂フコトヲ得然ルニ學者カ之ヲ法律行為又ハ契約ナリト主張セサル理由ハ契約ハ必ズ債權債務ノ關係ヲ發生スルコトヲ目的トスルモノノミラ謂フト爲スカ爲メナラント信ス然

レトモ我民法上契約ハ債權債務ノ發生ヲ目的トスル行為ニ限ラス物權ノ發生其他總テノ法律上ノ效果ヲ目的トシテ法律カ當事者ノ希望ニ應ジテ其效果ヲ付與スルモノヲ稱シテ法律行為ナリト信スルヲ以テ定款ハ一ノ法律行為殊ニ契約ト謂フモ少シモ妨ケサルモノナルヘシ

定款ハ之ヲ變更スルコトヲ得ルモノナルニ元來定款トハ前ニモ述ヘタルカ如ク社團法人ノ存在活動ノ基礎ヲ定メタルモノニシテ設立者ノ一致ノ意思ニ因リテ成立セルヲ以テ之ヲ變更スルモ亦總社員ノ意思ノ一致ヲ必要トスルニミナラス若シ之ヲ變更スルニ於テハ之ニ因リテ前法人ハ消滅シテ而シテ更ニ新ナル法人成立スルモノト爲ヌヲ以テ理論上正當ナリト信ス然レトモ此ノ如ク然ストキハ實際上ノ不便少カラサルヲ以テ立法上或ハ或條件ヲ設ケ定款ノ變更ヲ許シ之カ爲メ前法人消滅セサルモノトスルヲ必要トス故ニ我民法ハ此趣旨ニ基キ二ノ條件ヲ以テ定款ノ變更ヲ許スコトト爲セリ而シテ其二ノ條件トハ一ハ總社員ノ四分ノ三以上ノ同意アルコト及ヒ主務官廳ノ許可ヲ得ルコトノ二ナリ但右ノ總社員ノ四分ノ三以上ト云フコトニ付キ定款ニ於テ例ヘハ總社員

ノ承諾ヲ要スル旨若クハ社員半數ノ同意アレハ足ルト云フカ如キ之ト異ナル規定ヲ設クルコトヲ得(第三八條)

社團法人ノ設立者カ定款ヲ作ルカ如ク財團法人ノ設立者ハ寄附行爲ヲ爲スコトヲ要ス寄附行爲トハ或目的ノ爲メニ自己ノ財産ヲ分割シテ其財産ヲ基礎トシテ法人ヲ設立セントスル單獨行爲ヲ謂フ此寄附行爲ノ財團法人ニ對スル關係ハ定款カ社團法人ニ對スル關係ト同様ナリ即チ寄附行爲ハ財團法人ノ存立及ヒ活動ノ基礎ヲ定ムルモノナリ故ニ寄附行爲ヲ以テ定ムル事項モ亦定款ヲ以テ定ムル事項ト同一ナリ即チ財團法人ノ設立者カ寄附行爲ヲ以テ定ムル事項ハ法人ノ目的名稱事務所資産ニ關スル規定及ヒ理事ノ任免ニ關スル規定等ナリ(第三九條第三七條然レトモ寄附行爲ハ定款ト異ナリ社員タル資格ノ得喪ニ關スル規定ヲ定ムルコトヲ要セザルハ財團法人ノ性質上當然ナリ尙ホ寄附行爲ハ定款ト異ナリ右ニ述ヘタル五箇ノ事項ヲ悉ク定メザルモ全然無效ト爲ラス財團法人ノ設立者カ其名稱事務所又ハ理事任免ノ方法ヲ定メスシテ死亡シタルトキハ裁判所ハ利害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ之ヲ補充スルコ

トヲ得(第四〇條非訟事件手續法第三四條是レ此ノ如キ場合ニ於テ寄附行爲ヲ全ク無效トセハ財團法人ヲ設立セントスル者ノ公共心ヲ害シ加之社會上有益ナル事業ノ發達ヲ妨グルノ恐アルヲ以テナリ然レトモ寄附行爲ヲ以テ定ムル事項中法人ノ目的及ヒ資産ニ關スル規定ハ法人ノ基礎ヲ定ムル重大ナル事所ト雖モ自ラ法人ノ設立者カ此二事項ヲ定メスシテ死亡セルトキハ裁判所ニ述ヘタルカ如ク寄附行爲ハ或目的ノ爲メニ自己ノ財産ヲ分割シテ其財産ヲ基礎トシテ法人ヲ設立セントスル單獨行爲ナリ故ニ通俗ニ謂フ寄附トハ其意義ヲ異ニス諸君カ知ラルル如ク通俗ニ寄附トハ既ニ存立セル或人格者ニ對シ慈善其他ノ目的ヲ以テ財産ヲ贈與スルカ又ハ遺贈ヲ爲スモノヲ謂フ然ルニ此寄附行爲ノ場合ニ於テハ全ク之ト異ナリ所謂生前處分ヲ以テ之ヲ爲スト遺言ヲ以テ之ヲ爲ストヲ間ハス寄附行爲ヲ爲ス當時ニ於テハ其寄附財産ヲ受クノキ人格者未タ存立セザルモノナリ然レトモ或目的ノ爲メニ自己ノ財産ヲ分割シテ之ヲ其目的ニ供スル點ニ付テハ通俗ニ所謂寄附ト稍々類似スル所アル

民法論 本論 私權ノ主體 法人

ヲ以テ生前處分ヲ以テ寄附行爲ヲ爲ストキハ贈與ニ關スル規定ヲ準用シ遺言  
 ヲ以テ寄附行爲ヲ爲ストキハ遺贈ニ關スル規定ヲ準用スヘキモノナリ(第四  
 條) 寄附財產ハ何時ヨリ法人ニ屬スルカ此點ニ付テハ寄附行爲ヲ爲スニ付キ生前  
 處分ヲ以テ爲ス場合ト遺言ヲ以テ爲ス場合トヲ區別セサルヘカラス茲ニ所謂  
 生前處分トハ寄附行爲者ノ生前中ニ行爲ノ效力ヲ生スルモノヲ謂フ遺言トハ  
 其死亡ニ因リテ行爲ノ效力ヲ生スルモノヲ謂フ而シテ其生前處分ヲ以テ寄附  
 行爲ヲ爲セハ寄附財產ハ法人設立ノ許可アリタル時ヨリ法人ノ財產ヲ組成ス  
 ルモノナリ之ニ反シ遺言ヲ以テ寄附行爲ヲ爲シタル場合ハ寄附財產ハ其遺言  
 カ效力ヲ生シタル時ヨリ法人ニ歸屬スルモノナリ(第四二條)此ノ如ク民法カ二  
 者ノ場合ヲ區別シタル理由ハ生前處分ノ場合ニ於テハ寄附行爲者ハ通常法人  
 設立許可ノ場合ニ生存セルモノナルヲ以テ其許可アリタル時ヨリ寄附財產カ  
 法人ノ財產ヲ組成スルモノトスルモ別ニ不都合ナキモ遺言ノ場合ニ於テハ寄  
 附行爲者ハ既ニ死亡シタル後ナルヲ以テ若シ寄附財產カ法人設立ノ許可アリ

タル時ヨリ法人ニ歸屬スルモノトセシ寄附行爲者ノ死亡ノ時ヨリ法人設立ノ  
 許可アルマテハ其財產ハ相續人ノ有ト爲ル其結果相續人ハ其財產ヲ使用收益  
 スルコトト爲リ寄附行爲者ノ素志ニ背シコトアルヲ以テナリ

(ロ) 主務官廳ノ許可 既ニ述ヘタルカ如ク法人ノ設立ニ關シテハ種種ノ立法  
 主義アリ而シテ我國法上營利法人ニ付テハ準則主義ヲ採用スルモ公益法人ニ  
 付テハ準則主義ト特許主義トヲ折衷シタル主義ヲ採ルカ如シ故ニ我民法上祭  
 祀宗教慈善學術技藝其他公益ニ關スル社團又ハ財團法人ニシテ營利ノ目的ト  
 セサルモノヲ設立セントスル者ハ前ニ述ヘタルカ如ク法律ノ規定ニ從ヒテ定  
 款ヲ作り又寄附行爲ヲ爲ス外ニ尙ホ主務官廳ノ許可ヲ受ケサルヘカラス(第三  
 四條)而シテ茲ニ主務官廳トハ其設立セントスル法人ノ目的タル事業ヲ主管ス  
 ル官廳ヲ謂フ例ヘハ現行官制ニ依レハ祭祀宗教ノ目的トスル法人ヲ設立スル  
 ニハ内務大臣ノ許可ヲ經サルヘカラス又學術ノ目的トスル法人ヲ設立スルニ  
 ハ文部大臣ノ許可ヲ受ケサルヘカラスカ如シ而シテ此ノ如ク主務官廳ノ許  
 可ヲ得タルトキハ法人成立スルマデハ其ノ成立ノ要件ニ關シテ人得テ附屬スル

右ノ如ク法人ハ主務官廳ノ許可アリタルトキニ始テ成立シ人格ヲ付與セラ  
 ルルモノナリ故ニ其許可以前ニ於テハ法人存立セザルハ勿論ナリ隨テ法人ノ  
 基礎タル社團財團アルモノ例ノ人格トシテ權利ヲ義務ヲ負擔スルコト能ハ  
 ナルキ明瞭ナリ然ルニ茲ニ問題アリ自然人ハ原則ニ出生ノ時ヨリ人格  
 者タルニ拘ハラズ例外トシテ其出生スル前ニ胎兒トシテ人格者トシテ認めラ  
 ルル場合アリ法人ニ付テモ亦此ノ如キ例外ナキカ前ニモ述べタルカ如ク第四  
 十二條第二項ニ依レハ遺言ヲ以テ寄附行爲ヲ爲セハ寄附財產ノ遺言カ效力ヲ  
 生シタル時ヨリ法人ニ歸屬シタルモノト看做ストモ此場合ニ於テ遺言ノ效  
 力ヲ生シタルトキニ法人未タ成立シ居ラサルハ無論ナリ然ラハ胎兒カ相續其  
 他ノ場合ニ於テ既ニ生シタルモノト看做サルルカ如ク法人ハ遺言ニ依ル寄附  
 行爲ノ場合ニ於テ既ニ成立シタルモノト看做サルルモノナルカ是レ一問題  
 ナリ寄附行爲者ハ既ニ死セルヲ以テ最早財產ノ主格タルコト能ハス然ラハ其  
 相続人カ其財產ノ主格ナルカ或ハ又所謂無主格ノ權利アルモノナルキ第四十  
 二條第二項ハ胎兒ニ關スル規定ト其趣旨ヲ異ニセルカ如ク即チ胎兒ノ場合ニ

於テハ未タ生シタル前ニ相續其他ノ事項ニ關シテハ法律ノ假定ニ依リテ既ニ  
 生シタルモノト看做シ以テ權利ノ主格タルコトヲ得セシムルモ民法第四十二  
 條第二項ノ場合ハ之ト異ナルカ如ク即チ同條ノ規定ハ僉ノ假定ナルカ法人  
 未タ成立セザルニ既ニ成立セルモノト假定スルニ非スシテ後日ニ至リ法人カ  
 主務官廳ノ許可ヲ得テ設立セラレタルトキニ當リ法人ハ僉モ遺言カ效力ヲ生  
 シタル時ニ設立セラレタルカ如ク看做サレ其時ヨリ寄附財產ハ法人ノ所有ニ  
 歸スルカ如ク看做スル趣旨ナルカ如ク故ニ寄附行爲者ノ死後法人ノ成立前  
 於テハ法人カ其財產ノ主格ナリト謂フコト能ハス又所謂無主格ノ權利ナルカ  
 ノハ僉言ヘルカ如ク理論上必スシモ言ヒ得サルニ非サルモ本問題ニ於テ無主  
 格ノ權利存立ストスルハ適當ナラズト信ス然ラハ本問題ノ場合ニ於テハ唯寄  
 附行爲者ノ相続人ヲ以テ財產ノ主格ト爲ス一ノ途アルモノナリ然レモ後日  
 法人設立セラレハ遺言カ效力ヲ生シタル時ニ寄附財產カ法人ニ歸屬スルモ  
 ノト看做サルルカ故ニ寄附行爲者ノ相続人カ寄附財產ノ主格ト爲ルハ單ニ解  
 除條件附テ以テ其財產ヲ所有スルニ過キス

(ハ) 登記ノ前ニ述タルカ如ク主務官廳ノ許可ヲ得レハ法人ハ之ニ因リテ成立スルヲ以テ單純ナル理論ヨリモハ法人カ既ニ主務官廳ノ許可ヲ得テ以テ他人カ法人ニ對シ其存立ヲ主張スルコトヲ得ルハ其法ハ亦他人ニ對シテ其存立ヲ對抗スルコトヲ得ル開タルヘカラス然レドモ元來法人ハ無形ノモノナルヲ以テ其設立ヲ公示セザレバ他人ハ容易ニ其存立ヲ知ルコト能ハサルヲ以テ我民法ニ於テハ法人カ主務官廳ノ許可ヲ受テタルト雖モ他人ヨリ法人ニ對シ其存立ヲ主張スルコトヲ得ルモ法人ハ方面ヨリハ其主たる所在地ノ事務所ニ於テ登記ヲ爲サザレハ其存立ヲ他人ニ對抗スルコト能ハス第四五條第二項) (イ) 法人ハ其存立及ヒ組織ヲ世人ニ公示セシムル爲メニ其設立ノ日ヨリ二週間内ニ各事務所所在地ニ於テ登記ヲ爲スコトヲ要ス又法人ノ設立ノ後新ニ事務所ヲ設ケタルトキハ一週間内ニ登記セザルヘカラス(第四五條第一項第三項) (ロ) 其登記ヲ爲スヘキ事項ハ左ノ如シ(第四六條第一項) (ニ) 目的

- 二 名稱
  - 三 事務所
  - 四 設立許可ノ年月日
  - 五 存立時期ヲ定メタルトキハ其時期
  - 六 資産ノ總額
  - 七 出資ノ方法ヲ定メタルトキハ其方法
  - 八 理事ノ氏名住所
- 右ノ八事項ヲ一旦登記スルモ後日ニ至リテ登記事項中ニ變更ヲ生シタルトキハ一週間内ニ其變更登記ヲ爲サザルヘカラス而シテ登記前ニ在リテ其變更ヲ以テ他人ニ對抗スルコト能ハス(第四六條第二項) 尙ホ此登記期間ニ付キ登記スヘキ事項ニシテ官廳ノ許可ヲ要スヘキモノ例ヘバ定款ノ變更ノ如キハ其許可書ノ到達シタル時ヨリ登記ノ期間ヲ起算スヘキモノナリ(第四七條)
- 法人カ其事務所ヲ移轉シタルトキハ舊所在地ニ於テ一週間内ニ移轉ノ登記ヲ爲シ新所在地ニ於テ同一ノ期間内ニ於テ前ニ述ヘタル第四十六條第一項



ニ定メタル八事項ヲ登記ヲ爲ササルヘカラス又法人カ其事務所ヲ移轉スル者  
 同一登記所ノ管轄區域内ニ於テ之ヲ爲シタルトシテ單ニ其移轉トシテ登記ヲ  
 爲セハ足ル(第四八條) 然レトモ、  
 右ニ述ヘタル所ハ專ラ内國法人ノ登記ニ關スルモノナリ予ハ是ヨリ外國法人  
 ノ登記ニ付キ説述スヘシ 蓋シテ、  
 外國法人モ内國法人ト同シク其設立ヲ登記セザレハ之ヲ以テ他人ニ對抗スル  
 コトヲ得サルモノナルヤ否ヤ既ニ述ヘタルカ如ク内國法人ニ關スル理論ヨリ  
 セハ外國法人ト雖モ登記ヲ爲サザレハ其存立ヲ他人ニ對抗スルコト能ハスト  
 謂ハサルヘカラス然レトモ實際ノ事情ヲ見レハ外國法人ニシテ日本ニ事務所  
 ヲ有セザル場合ニ於テハ若シ他人ニ對シテ其存立ヲ對抗スルニ付キ登記ヲ爲  
 ササルヘカラストセハ何レノ地ヲ以テ登記ノ管轄區域ト定ムヘキカ頗ル困難  
 ナリ加之實際ノ便宜ヨリ見ルモ日本ニ事務所ヲ有セザル外國法人ハ日本ニ於  
 テ取引スルコト極メテ稀ナルヲ以テ登記ヲ待タズ法人ノ存立ヲ他人ニ對抗ス  
 ルコトヲ得ルモノトスルモ格別ノ弊害ナカルヘシ故ニ我民法上外國法人カ日

本ニ事務所ヲ有セザル場合ニ於テハ登記ヲ要セスシテ他人ニ對シテ其存立ヲ  
 對抗スルコトヲ得ルモノナリ然レトモ外國法人カ始メテ日本ニ事務所ヲ設ケ  
 タルトキハ其事務所所在地ニ於テ登記ヲ爲スマテハ他人ハ其法人ノ成立ヲ否  
 認スルコトヲ得第四九條第二項)而シテ其登記ヲ要スル事項等ハ内國法人ニ付  
 テ述ヘタルト同一ナリ但外國ニ於テ生シタル事項ニ付テハ其通知ノ到達シタ  
 ル時ヨリ登記ノ期間ヲ起算スヘキナリ(第四九條第一項) 然レトモ、  
 以上ノ法人ノ登記ハ前ニ述ヘタルカ如ク法人ノ存立及ヒ組織ヲ世人ニ公示セ  
 シムル爲メニ法律カ之ヲ必要トスルモノナレハ此定期内ニ其登記ヲ爲スコト  
 ヲ怠リタルトキハ法人ノ理事ハ五圓以上二百圓以下ノ過料ニ處セラルヘキモ  
 ノナリ(第八四條第一號)尙ホ此登記ノ手續ニ關スル詳細ハ非訟事件手續法第百  
 十七條以下ヲ參照スヘシ 蓋シテ、  
 第三五法人ノ住所 蓋シテ、  
 法人ハ又自然人ト同シク住所ヲ有ス而シテ自然人ハ生活ノ本據ヲ以テ其住所  
 ト爲スモ法人ノ住所ハ其主タル事務所ノ所在地ニ在ルモノナリ(第五〇條)

### 第四 財産目錄

財産ハ法人ノ活動ノ基礎ナレハ其財産ヲ保全シ之カ蓋用ヲ防テ爲マシニ先ツ法人設立ノ時ニ其財産目錄ヲ作り常ニ之ヲ事務所ニ備ヘ置クトヲ要ス其他法人ノ財産ノ状況ハ時時變更アルモノナルヲ以テ毎年年初ノ三箇月内ニ財産目錄ヲ作ラサルヘカラス但特ニ事業年度ヲ設ケタルモノハ其年度ノ終ニ於テ之ヲ作ルヘキモノナリ(第五一條第一項)而シテ此財産目錄ヲ調製シ社員官廳及ヒ世人一般ヲシテ法人ノ財産ノ状況ヲ知ラシムルカ爲メニ法律カ之ヲ命ジタルモノナルヲ以テ若シ財産目錄ヲ調製セサルカ又ハ其財産目錄ニ不正ノ記載ヲ爲シタルトキハ法人ノ理事ハ五箇以上二百圓以下ノ過料ニ處セラレヘキナリ(第八四條第二號) 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

### 第四款 法人ノ能力

第一 主 法人ノ權利能力ニ付テハ日本ニ設テタル同種ノ機關ニ對シテハ其權利能力ニ於テハ法律カ之ヲ命ジタルモノナルヲ以テ若シ法人ノ權利能力ニ不正ノ記載ヲ爲シタルトキハ法人ノ理事ハ五箇以上二百圓以下ノ過料ニ處セラレヘキナリ(第八四條第二號) 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

場合同シク五箇以上二百圓以下ノ過料ニ處セラレ(第八四條第二號) 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

第一 主 法人ノ權利能力ニ付テハ日本ニ設テタル同種ノ機關ニ對シテハ其權利能力ニ於テハ法律カ之ヲ命ジタルモノナルヲ以テ若シ法人ノ權利能力ニ不正ノ記載ヲ爲シタルトキハ法人ノ理事ハ五箇以上二百圓以下ノ過料ニ處セラレヘキナリ(第八四條第二號) 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

(4) 人格權 法人ハ自然人ノ如ク身體又ハ生命權身體權自由權ヲ有セザルコト明カナリ然レトモ人格權中彼ノ名譽權ハ法人ト雖モ之ヲ有スルモノトシテ信ス然レトモ此點ニ付キ反對ノ學說アルコトニ注意スベシハ對味直氏ノ管見

(ロ) 親族權 法人ハ其性質上親權夫權又ハ戸主權ノ如キ所謂親族權ヲ有スルコト能ハサルハ明カナリ而シテ或學者例ヘ「レ」トダラスベシトダスル等ハ法人ト雖モ後見人トシテ親族法上ノ權利ヲ有スルコトヲ得ト主張スルモ我民法ノ解釋トシテハ法人ハ後見人ト爲ルコト能ハスト信ス

(ハ) 財產權 法人ノ權利能力ヲ有スル範圍ハ主トシテ財產權ノ部分ニ存ス而シテ法人ハ此財產權中管ニ物權債權ノミナラス版權特許權意匠權商標權等ノ如キモノモ總テ之ヲ有スルコトヲ得

右ハ主トシテ内國法人ニ付テ說述シタリ外國法人ハ日本ニ成立セル同種類ノモノト同一ノ權利能力ヲ有ス但外國人カ享有スルコト能ハサル權利ハ外國法人ト雖モ之ヲ享有スルコト能ハス尙ホ法律又ハ條約中ニ特別ノ規定アルモノハ其規定ニ從ハサルヘカラサルハ當然ナリ(第三六條第二項)

ナリ此同盟ハ巴里ニ於テ結ビレタルモノニシテ爾後瑞西ノ「ベルン」ニ中央事務所ヲ置キ一人ノ局長及ヒ六人ノ補助トシテ以テ組成セラレ郵便同盟ニ關スル事務ヲ掌リ又同盟國間ニ郵便ニ關スル爭起リタル下キハ其間ニ立テテ仲裁裁判ヲ爲シ而シテ此事務所ヨリ英佛獨三箇國ノ語ヲ以テ記載セル郵便同盟ト稱スル月報ヲ發行シテ同盟國ニ分テ送給スルモノ也

第五 電信ニ關スル行政權ニ制限スルハセズ

電信ニ關スル萬國條約ハ千八百八十五年巴里ニ於テ結ハレタル一般電信同盟ナリ電信同盟ノ中央事務所ハ等シク瑞西ニ在リ佛文ヲ以テ電信雜誌ヲ發行シ而シテ之ヲ同盟國ニ配送ス電信同盟ニ關シテ未タ郵便同盟ノ如ク進歩セザルハ料金ノ一致セザル點ニ存シ海底電線ニ付テハ千八百八十四年ニ巴里ニ於テ海底電線保護ニ關スル條約ヲ締結シタリ其後千八百八十八年ニ於テ更ニ詳シキコトヲ約定シタリ其約定ノ最モ必要ナル點ヲ舉ゲレハ左ノ如ク「海底電線ヲ破壞シタル者ハ賠償ノ責任アリ又故意ヲ以テ破壞シタルトキハ之ヲ處罰ス」

「海底電線ヲ破壞スル船舶又ハ破壞セシムル船舶アルトキハ船隻

國ノ軍艦ハ此等船舶ヲ抑留シ反抗船舶ノ本國ヲシテ之ヲ處罰セシムルノ權利ヲ有スト此條約ニ於ケル缺點ハ戰時ニ於テ海底電線ヲ破壞スルモノトテ得ルヤ否ヤヲ決セテリシ點ニ在リ故ニ從來ニ於テハ交戰國ニ荷シ戰爭ノ目的成爲ルニスル以上ハ公海ニ於ケル海底電線ヲ其領海ニ於ケルモノトシテ又交戰國雙方ヲ結付タル海底電線タルト交戰國中立法國ヲ結付タルモノトシテ中立國ヲ聯結スルモノタルトヲ問ハス悉ク之ヲ破壞スルモノトテ得シト爲シタリ然ルニ昨年九月白耳義ノブルニ於テ開キタル國際法協會ハ海底電線ニ關シテ左ノ如キ議決ヲ爲シタル十五項中第一條ニ於テ

第一 中立國間ノ海底電線ハ之ヲ切斷スヘカラス

第二 交戰國ヲ聯結スル海底電線ハ之ヲ切斷スルコトヲ得ヘシ但中立國領海内ヲ通過スル處ニ於テ之ヲ切斷スヘカラス

第三 中立國ト交戰國トノ間ヲ結付タル海底電線ハ中立國ノ領海ニ於テ切斷スヘカラス又有效ナル封港ノ場合ヲ除キ公海ニ於テ之ヲ切斷スヘカラス

戰爭終リタルトキハ再々其接續ヲ全クスル義務アリト雖モ交戰國ノ領

海内ニ於テハ何レノ處ニ於テ之ヲ切斷スルコトヲ得ヘシ

第四 中立國ト交戰國ト助ケル目的ヲ以テ自ラ海底電線ヲ使用スヘカラス

又他國カ斯ル目的ヲ以テ海底電線ヲ使用スルコトヲ許可スヘカラス

第五 以上ノ原則ハ海底電線カ政府ノ所有タルト簡人ノ所有タルト又中立國ノ所有タルト或ハ又交戰國ノ所有タルトヲ問ハス同ニ適用スヘキモノナリ

第六 衛生ニ關スル行政權ノ制限ハ若シテ國家ハ其國ノ領海内ニ於テ

凡テ國家ハ衛生行政權ヲ有スルカ故ニ原則トシテ制限ヲ受ケタラヘキモノナリト雖モ條約又ハ同盟ニ因リテ制限セラルルモノ極メテ多シ殊ニ土地ヲ以テ境界ヲ接スル國ニ於テハ他國ノ醫師產婆等ヲ内國ニ於テ用フルコト、隣國カ相互ニ病院ヲ利用スルコト、精神病者ヲ其本國ニ送還スルコト、傳染病者ノ保護等即チ是ナリ各國ニ於テ同盟條約ヲ結ヒタルモノハコレヲニ關スルモノトベシトニ關スルモノト二者ナリ千八百五十年那波翁第三世ノ會議ニ因リテ巴里ニ於テ國際衛生會議ヲ開キタレトモ遂ニ各國ノ批准ヲ見ルニ至ラナリ今日

國際公法(中絶) 本論 國際法ノ主權 國家ノ權利

ニ於テ確定シタル同盟條約ハ千八百九十三年ノ「ベヌエラ」ノ協商及「千八百九十四年ノ巴里會議」ノ決議ニ依リテ「ベヌエラ」ニ關セテハ明治三十年英艦獨伊艦自澳和及「瑞西」ルタセンブルヒ「モンテネグロ」ノ間ニ條約ヲ締結シタリ此條約中最モ著シキモノヲ舉グレハ左ノ如シキ其本國ノ領土ニ對シテ「荷蘭」ノ領土ニ對シテ「荷蘭」同盟國中ノ一國ニ於テ「ベヌエラ」ト發生シタルトキハ直チニ之ヲ同盟他國兩營タリシ病地ヨリ來ル所ノ荷物ハ輸入ヲ禁ス病地ヨリ出帆シタル船舶ニ對シテ出帆ニ衛生上ノ監督ヲ嚴ニスヘシ船舶ハ健康船病船嫌疑船ノ三種ニ分テ各之ヲ取扱フ異ニスヘシ船舶ニ對シテ傳染病ノ傳染ヲ防カンカ爲メニ國際法ノ命スル所ハ各國ヲシテ檢疫ヲ爲サシメ病船及ヒ嫌疑船ニ對シテハ黃旗ヲ翻サシメ之ヲ陸地及ヒ他ノ船舶ヨリ隔離セシムルコト是ナリ此方法ハ第十四世紀以來各國ニ行ハルル所ナリ我國ニ於ケル國法トシテハ明治三十二年二月法律第十九號海港檢疫法アリ泰照スヘシ「荷蘭」ノ領土ニ對シテ「荷蘭」ノ領土ニ對シテ「荷蘭」第七 動植物ノ保護ニ關スル行政權ノ制限 自由貿易ニ對シテ「荷蘭」ノ領土ニ對シテ「荷蘭」此事ニ付テモ亦各國ハ條約又ハ同盟ヲ以テ幾多ノ制限ヲ附セリ例ヘハ千八百

七十八年ノ歐羅巴大陸各國間ニ締結シタル「荷蘭」被害虫退治條約ノ如シ又例ヘハ歐洲ノ北海ニ於ケル漁業ニ關スル條約ノ如キモ然リ

第八 人身ノ自由ニ關スル行政權ノ制限

例ヘハ「奴隸」ノ賣買ニ關スル條約ノ如キハ其重ナルモノナリ「奴隸」ヲ廢止スヘシトノ條約ハ千八百十五年始メテ「ツキヤ」會議ニ於テ議定セラレタル所ナリ其決議ノ重ナル事項ハ左ノ如シ

- 第一 條約締結國ハ自國人民ニシテ「奴隸」賣買ヲ爲ス者ヲ處罰スヘシ
- 第二 締盟國ノ軍艦ハ「奴隸」賣買船ニ對シテ搜查權ヲ有ス
- 第三 「奴隸」賣買ニ對スル裁判權ハ右船舶ヲ捕獲シタル本國ノ裁判所ニ歸屬ス

然ルニ此條約ハ實際ニ行ハレザリシヲ以テ其後千八百四十一年ノ倫敦條約ニ依リテ之ヲ實行スルコトヲ定メタリ千八百八十九年ニ至リテハ「白耳」義ノ「ブル」ヲセルニ會議ヲ開キ翌年ニ至リ同盟條約ヲ締結シタリ「ブル」ニ對シテ「白耳」義ノ「ブル」第九 度量衡ニ關スル行政權ノ制限 自由貿易ニ對シテ「荷蘭」ノ領土ニ對シテ「荷蘭」

度量衡ニ付テハ千八百七十五年巴里ニ於テ會議ノ結果度量衡同盟ナルモノヲ  
 作リ各國ノ元器ニ比較シテ「メートル」キログラムニ本位トスルコトヲ定メタリ  
 我國ハ明治十九年四月十六日此同盟ニ加入シテ「メートル」キログラムニ本位トスルコトヲ定メタリ  
 第十 貨紙幣ニ關スル行政權ノ制限、（其對於八百四十一号ノ貨紙幣ニ關スルニハ、前條ノ規定ニ依リテ、貨紙幣ニ關スル行政權ハ又各國ノ自由ナリト雖モ一國ノ貨幣ハ他國ニ通用セザルヲ原則トスルカ故ニ今日ノ如ク交通ノ頻繁ナル時代ニ在リテハ多クノ不便ヲ免ルルコト能ハス然レトモ國家カ外國ヲ信用セザルノ結果トシテ此同盟ヲ作ルコトハ極メテ困難ナリ隨テ世界各國間ニ貨幣同盟ノ成立スルモノ唯二箇アルノミ一ヲ羅甸同盟ト稱シ佛伊、白希及ヒ瑞典間ニ締結セラレタルモノナリ他ヲスカンヤナビヤ貨幣同盟ト稱シ諸丁及ヒ瑞典ノ三國之ニ加ハルノモノナリ以上ヲ以テ行政權ニ關スル制限ノ大體ヲ説明シタリ

### 第二款 形式的權利

國家ノ形式的權利トハ國家ノ外部ニ對スル表彰ノ權利ヲ謂フ而シテ國家カ此

權利ヲ外部ニ對シテ表彰スルニハ一定ノ徽號又ハ一定ノ名稱ヲ用ヒザルヘカ  
 ラス國家ノ名稱ニ關スル權利ハ外國ノ名稱ヲ僭テオアル限度ニ於テ如何ナル名  
 稱ヲ用フルモ自由ナリトス又國家ノ元首ハ一定ノ尊稱ヲ享タルノ權利ヲ有ス  
 國家ノ尊稱ハ自ら隨意ニ之ヲ變更スルコトヲ得ヘシト雖モ外國ハ必スシモ之  
 ヲ承認スルノ義務ナシ國家ヲ外部ニ表彰スル徽號ハ國家ノ榮譽及ヒ尊嚴ヲ示  
 シタルモノナルカ故ニ侮辱若クハ損害ヲ加フルコトヲ許サス若シ之ヲ僭シタ  
 ルトキハ國家ニ對シテ其實ヲ負ハサルヘカラス而シテ尊稱ハ君主國ニ限り雖  
 下ヲ用ヒ共和国ハ陛下ヲ用フルコトヲ得ス

國家ハ其領地ノ廣狹兵力ノ多少ヲ論セス又貧富ノ如何政體若クハ名稱ノ如何  
 ヲ問ハス悉ク同等ナリトス是ニ於テ列國會議ノ場合ニ於テ其何レノ國家ノ代  
 表者カ上席ヲ占ムヘキヤ又條約締結ノ場合ニ於テ何レノ國家カ第一ニ署名ス  
 ヘキヤ或ハ又各國公使カ駐在國元首ニ拜謁スル場合ニ於テ孰レカ先ニ之ヲ爲  
 スヤ等ノ問題ヲ生ス古代ニ於テハ列國會議ノ場合ノ如キハ各國代表者カ順次  
 其席ヲ交換シタルコトアリ又元首ノ年齢ニ因リ席順ヲ定メタルコトアリ或ハ

又元首ノ即位ヲ先後ニ因リテ席順ヲ決シタルコトヲ又或ハ公使ノ任命シ先  
後若クハ抽籤ヲ以テ之ヲ定メタルコトヲ又或ハ今日ニ於テハ各國家ノ若稱  
ヲ呼ブニ佛蘭西語ヲ以テシテ「プレジデント」ニ依リテ其席順ヲ定ムルコトトモ  
同ノ頭字ヲ有スル國家間ニ在リテハ其次に來ルハ「キ文字」アルハ「プレジ  
デント」ニ依リテ決ス。又或ハ「プレジデント」ニ依リテ其席順ヲ定ムルコトトモ  
條約ニ在リテハ二箇國條約ハ各自國ニ取ル所ノ條約書ニ自國ノ名稱ヲ前ニシ  
萬國條約ニ於テハ等シク國名ヲアルハ「プレジデント」ニ依リテ之ヲ署ス

條約ノ文字ハ數國條約ニ於テハ條約締約國ノ意思ニ從ヒ萬國條約ニ於テハ佛  
蘭西語ヲ用テ而シテ公使ノ席順及ヒ公使署名ノ順序ハ先ツ第一ニ公使ノ階級  
ニ從ヒ若シ同一階級ノ者アルトキハ信認狀捧呈ノ最早カリシ者ヲ先位トス  
國家ヲ分チテ王の榮譽ヲ有スル國ト然ラサル國トニ爲スコトヲ得ルシ所謂王  
的榮譽ヲ有スル由ハ帝國、王國及ヒ大共和國等ノ謂ナリ此王の榮譽ヲ有スル國  
家ハ全權大使ヲ派遣スル權利ヲ有シ其他ノ國家ハ全權大使ヲ派遣スル權利ヲ  
有セス但大共和國ト云如何ナル程度ノ國家ヲ指稱スルヤハ甚々疑ハシ公使ノ

接受ニ關シ一國ノ公使カ外國ニ駐劄スルニ當リテハ國際法上一定ノ禮儀ヲ爲  
スヲ通例トス其禮儀ハ總テ駐在スル國家ノ禮儀ニ從フ例ハ支那ノ公使カ  
日本ニ來リシトキハ日本ノ禮儀ニ從フカ如シ、又前節ノ事ヲ本國ハ引取ル

### 第十節 國家ノ義務

國家ノ權利ニ對スルモノハ國家ノ義務ナリ唯時トシテ權利ニ對シテ義務ナキ  
モノアルコトヲ忘ルヘカラス故ニ義務ニ關スル問題ハ深ク說明スルヲ要セス  
茲ニハ國家ハ何人ノ如何ナル行爲ニ對シ責任ヲ負ハサルベカラザルヤ及ヒ如  
何ニシテ責任ヲ解除スルコトヲ得ルヤノ二問題ヲ說明スルニ止ムヘシ

第一 國家ハ何人ノ行爲ニ對シ責任ヲ負フベキヤ  
第二 國家ハ何人ノ行爲ニ對シ責任ヲ負ハサルベカラス然レトモ國家ハ  
自ラ行爲ヲ爲スモノニ非サルカ故ニ所謂國家ノ行爲ト以テ即代表者ノ行爲ト  
リ而シテ其行爲ハ外國ニ對シテ爲タルモノトシテ外國人ニ對シテ爲タルモノト  
或特別ノ場合ニハ內國人ニ對シテ爲タルモノト問ハサルナキニ視テ置カレ

(二) 國家ハ其臣民ノ行爲ニ關シテ責任ヲ負ハナルヘカラス。茲ニ所謂臣民ノ行爲トハ臣民カ國家ヲ代表セスシテ爲シタル場合ノミヲ稱ス。而シテ其責任ノ限度ハ人民ノ行爲ニ關シテ國家カ監督ヲ怠リタル場合ニ於テ間接ニ責任ヲ負フニ過キス。

(三) 國家ハ外國人カ內國ニ於テ爲シタル行爲ニ付キ責任ヲ負ハナルヘカラス。

第二 國家ハ如何ニシテ責任ヲ解除スルコトヲ得ルヤ。

(一) 廢狀ノ回復 (二) 將來ニ責任解除ノ方法トシテ今日一般ニ行ハル所ノモノハ (三) 廢狀ノ回復 (四) 將來ニ安全ニスルノ保證 (五) 單ニ責任ヲ重シテ人民又ハ代表者ヲ處罰スルコト (六) 謝罪 (五) 賠償 (六) 土地ノ割讓等即チ是ナリ。

### 第十一節 外交機關

外交機關トハ外國ニ在リテ內國ト外國トノ間ノ政治的事件ヲ本國ヲ代表シテ處理スル機關ヲ謂フ。君主ノ如キ外務大臣其他ノ國務大臣ノ如キ亦常ニ外國ニ在ルモノニ非サルカ故ニ茲ニ所謂外交機關之中ニ包含セラルルコトヲシ其他

外國ニ在リテ本國ト外國トノ間ノ政治上以外ノ交渉ヲ爲ス者ノ如キモ亦外交官ニ非ス。例ヘハ領事貿易事務官ノ如シ萬國郵便會議ノ爲メニ派遣セラレタル者公債募集ノ爲メニ外國ニ派遣セラレタル者ノ如キモ亦外交官ニ非ス。其他本國ノ公ノ信認ヲ得テ外國ニ赴ク者ト雖モ該外國ヨリ本國代表者タルノ公ノ接待ヲ受クナル者ハ外交官ニ非ス。又本國ヨリ外國ニ派遣セラレタル者ナリト雖モ本國人ノ外國ニ在ル者ノ舉動ヲ偵察セシカ爲メニ赴ケル者ノ如キモ等シク外交官ニ非ス。

或國ニ駐在スル外交官ノ總體ヲ名ケテ外交團ト謂フ。而シテ之ノ首領ヲ外交團長(ドアイヤン)ト稱ス。外交團長ハ駐在國ニ於テ外交團ニ屬スル總テ之ノ國家ニ形式上ノ要務ノ爲メニ力ヲ盡スニ過キス。シテ外交團ニ屬スル國家ノ實質上ノ權利義務ヲ代表スルモノニ非ス。外交團長ト爲ル者ハ公使ノ最高級ノ者ナリ。若シ最上階級ノ者在ラザルトキハ其次位ノ者ヲシテ之ニ當ラシム。同階級ノ者數人アルトキハ最モ長ク其國ニ駐在スル公使詳言スルハ最モ早ク信認狀ヲ捧呈シタル者ヲ以テ外交團長トス。但カトリック教國ニ於テハ羅馬法王ヨリ派遣スル大



使ヲ以テ外交團長ト爲ス。使トシテハ各國ニ於テハ總領事トシテ駐在スルモノハ大使ノ起源ニ付テハ學者ノ見解各異ナレリト雖モ、クラウスケ、ワグネル、依レハ千四百五十五年伊太利ノ「ミラノ」國條約ニ於テハ共和國ニ公使ヲ派遣シタルヲ以テ其權限ト爲スモノノ如シ爾來第十七世紀ニ至リテ公使ヲ派遣一般ニ流行シ千六百四十八年ノ「ウニエトワ」條約ノ如キハ公使ニ關スル議決ヲ爲シタルコトアリ今日ニ於テハ殆ト總テ各國家ハ互ニ公使ヲ授受又爲キ又古代ニ於テハ公使派遣ノ目的ハ外國ヲ探偵シ又ハ外國ヲ欺罔スルニ在リタリ。今日ニ於ケル常駐公使派遣ノ目的ハ本國ト駐在國ト間ノ交際ヲ親密ニシ平和ヲ維持シ及ヒ條約ノ實施ヲ確ムル等ニ在リテ存ス。蓋シテ公使ハ外交ノ中心トシテ昔時ニ在リテハ公使ハ階級ハ常駐公使及ヒ臨時公使ト二者アリシニ過キナリシカ千八百十五年ニ至リ始メテ公使ノ階級ヲ三箇ニ分テ第一全權大使第二特命全權公使第三代理公使ト爲シタル然レニ千八百十八年「ウニエトワ」條約ノ所謂今日ノ「アーヘン」會議ニ於テ特命全權公使ト代理公使ト間ニ辦理公使ト

ル一階級ヲ加ヘタリ此四種ノ區別ハ即チ今日ニ行ハルル所ナリ。第一全權大使 耶蘇教國ニ於テハ普通全權大使ニ外テハ「ポポ」及ヒ羅馬法王ヨリ派遣スル所ハ大使ナル者ヲ認ム之ヲ稱シテ「ノンス」ト謂フ此二種ノ大使ハ等シク同一ノ性質及ヒ同一ノ權利ヲ有ス大使ハ本國ノ元首ヲ任命セラルルモノニシテ本國即チ派遣國ノ元首ノ一身ヲ代表スルモノナリ是レ以下ニ述フル所ノ三階級ノ公使ト異ナル所ナリ大使ハ駐在國ノ元首ヨリ直接モ信認セララルルモノニシテ外務省ヨリ信認セララルルモノニ非ス此點ハ唯代理公使ト異ナルノミ。第二全權大使ハ本國ノ元首ヲ代表スルモノナリ故ニ左ニ掲タル種種ノ特權ヲ有ス。第三代理公使ハ本國ノ元首ト直接ニ駐在國ノ元首ト直接ニ駐在國ノ元首及ヒ配偶者ニ始メテ拜謁ヲ爲ストキ一定ノ儀式ヲ受クル

(四) 權利國ノ元首或ハ頭目等ニ就キモ其國ニ爲スル一家ノ代表ト受ケル

(五) 駐在國ノ外交團交團員ヨリ訪問ヲ受クルノ權利

(六) 自己ノ應接室ニ皇帝ノ座アル椅子ヲ備スル得ルノ權利

(七) 六頭曳ノ馬車ヲ駕シ且馬頭ヲ赤キ絹布ニ覆テ其ノ權利ニシテ

以上ノ外大使ノ配偶者ハ大使ノ階級及ヒ地位ニ浴スルモノトス大使ノ配偶者ハ大使夫人閣下ナル尊稱ヲ受ケ又始メテ拜謁ヲ爲スニ當リ特別ノ儀式ヲ受ケルノ權利ハ大使ニ同シ宮廷ニ於テ夫ノ次ニ位シ他ノ公使ニ先スルノ權利ヲ有セ又テ「レ」ノ特權ヲ有ス

第二 特命全權公使(アシボアイエ)ト云フ夫等ハ本國ノ元首ニシテ代表トシテニ在リ隨テニ身上ノ代表權ヨリ生ズル所ノ特權中第三ノ權利ヲ除ク外之ヲ享有スルコトヲ得タルナリ

第三 辦理公使(ミニストル)トシタシテ辦理公使全ク特命全權公使ト同クナリ

第四 代理公使(シヤルシエ)トシテ代理公使ハ本國ノ外務省ヨリ信認狀ヲ受ケテ駐在國ノ外務省ヨリ信認セラルルモノナリ又代理公使ハ閣下ナル尊稱ヲ受ケルコトヲ得ス其他探ルニキ職務ハ他ノ公使ト異ナリ所ナシ代理公使ハ時トシテ總領事ヲ兼スルコトアリ其他ハ公使ハ領事ヲ兼スルコトナシ代理公使ト臨時代理公使(シヤルシエ)トシテ之ヲ區別セラルカ

以上四階級中高階級ノ者ハ低階級ノ者ノ上ニ在リ同一階級者間ニ在リタム信認狀ヲ早ク捧呈シタル者上位ヲ占ム

公使ノ授受並ニ公使ノ拒絕ニ付テ述ベシニ凡ソ國家ハ外國ニ公使ヲ派遣セザルヘカラザルヲ義務ナシ然レトモ外國ヨリ自國ニ公使ヲ派遣シタルトキハ之ヲ受ケザルヘカラズ若シ國家カ外國ヨリ何人ヲモ公使トシテ受ケルコトヲ肯セストモハ是レ國際法上ノ交際ヲ爲サザルコトト爲ルモノナリ故ニ東洋ノ諸國カ條約ヲ以テ公使ノ授受ヲ約定スルヲ如キハ事ト例外ニ屬ス此ノ如ク國家ハ外國ノ公使ヲ拒絕スルノ權利ナシト雖モ或人ヲ限リテ之ヲ受ケルコトヲ拒

絶スルコトヲ得ヘシ故ニ各國ハ他國ニ駐シ公使ヲ派遣スルニ先テ駐在國ニ對シテ問合ヲ爲スノ慣例ヲ生シタリ之ヲ名テ公使ノアグレシメントト謂フ如何ナル階級ノ公使ヲ派遣スルヤハ相互主義ニ依ルヲ例トス然レトモ必ズシテ相互主義ニ依ラザルヘカヲテハ義務アリテ非ズ例ニ依リ佛蘭西カ瑞西ニ對シテ大使ヲ派遣セルニ拘ハラヌ瑞西カ佛蘭西ニ對シテ公使ヲ派遣スルカ如シ又英露白等カ瑞西ニ對シテ特命全權公使ヲ派遣スルニ拘ハラヌ瑞西カ此等ノ國ニ對シ總領事ヲ派遣スルニ過キサルカ如シ

公使ノ任命及ヒ駐在ニ關スル事項モ公使ノ職務ヲ行ハニ付テ重要ナルモノナリ公使ノ國法上ノ地位ハ其任命ニ因リテ始マリ公使ノ其本國ニ對シテ權利義務ノ範圍ハ總テ本國ノ法律ニ因リテ定マルモノナリ外國ニ駐在セルカ爲メニ本國ヨリ受タル書面ニ信認狀全權狀訓令書ノ三種トテ信認狀トハ本國ノ元首ヨリ駐在國ノ元首ニ宛テタル書面ニシテ公使ノ之ヲ駐在國ノ元首ニ交付スルモノナリ但代理公使ノ場合ハ此限ニ在ラヌ全權狀トハ特別ノ使命ヲ帶テテ外國ニ赴ク所ノ使節ヲ携帶スル書面ニシテ如何ナル權限ヲ帶テタルカ記載シタルモノ

ノナリ故ニ普通ノ場合ニ於テハ全權狀ヲ携帶スルコトヲ要セズシテ單ニ信認狀ノミヲ以テ足レリトス之ニ反シテ特別ノ使命ヲ帶テテ公使ノ職務ヲ受ケタルトキハ特ニ信認狀ヲ受ケルモノニ非ズ訓令書トハ公使ノ職務ニ關スル事項ヲ詳細ニ記載シタルモノナリ訓令書トハ駐在國ニ秘密ニスルモノナリ又ハ之ヲ公ニスルモノアリ使節カ全權狀ニ違反シタルトキ又ハ訓令書ニ違反シタルトキハ本國ハ其行爲ニ拘束セラルモノニ非ズ公使カ駐在國ニ到達シタルトキハ未ダ信認狀ヲ捧呈セザルニ先テ直チニ公使タル特權ヲ享有スルモノトス固ヨリ此權利ハ駐在國ニ於テノミ有スルニ過キサルカ故ニ第三國ニ在ル場合ニ於テハ何等ノ權利ヲモ有スルモノニ非ズ然レトモ公使ノ職務ヲ行フハ信認狀ノ捧呈ヲ待テテ始マルモノニ非ズ公使ハ公使タル權利ヲ得シカ爲メ駐在國ノ首府ニ到着スルト同時ニ書面ヲ以テ若クハ書記官ヲ派遣シテ信認狀ヲ贈本ヲ外務省ニ提出スルモノナリ駐在國ノ元首ハ公使ニ拜謁ヲ許シ場合ニ於テハ特別ノ儀式ヲ履スモノトス而シテ其儀式ハ總テ駐在國ノ定メ所ニ依ルハ公使ノ職務ハ儀式上ノ公使ト職務上ノ公使トニ由リ異ナリ儀式上ノ公使ハ

儀式ヲ行ヒ又ハ儀式ニ列スルノミヲ以テ足ル例ハ外國皇帝ノ戴冠式ニ臨ムカ如ク或ハ葬儀ニ臨ムカ如ク之ニ反シテ職務上ノ公使ハ其一時の使節タルト繼續的使節タルトヲ問ハス常ニ實質上ノ職務ヲ有ス所謂出時の使節タルト全權ニ因リテ與ヘラレタル權限ノ範圍内ニ於テ職務ヲ行フモ之ヲ開キ繼續的使節ハ本國ト駐在國トノ間ノ平和關係ヲ維持スルニ駐在國ノ狀況ヲ觀察スルコト條約ヲ履行ノ不履行ヲ調査スルコト及ヒ本國人ノ駐在國内ニ在リテ保護スルコト等ヲ以テ其職務トシテ領事ハ其職務ニ從テ之ヲ行フニ當リ三國ニ由ラ公使ノ特權ハ之ヲ分チテ不可侵權治外法權自ラ裁判ヲ爲ス權及ヒ信教ノ自由權ノ四種トシテ以上ノ特權中最モ著シキモノヲ治外法權トシテ治外法權關シテハ既ニ之ヲ説明シタルヲ以テ省略ス不可侵權ノ性質ニ付テハ學者間ニ未ダ一定ノ見解ハ或ハ不可侵權ハ治外法權ニ一部分チテ討論シ或ハ又治外法權ハ不可侵權ノ一部分チテ主張シ又多數ヲ英美學者ハ治外法權ニ即チ不可侵權ノ異名チリト論スルモノヲ如シ自ラ裁判ヲ爲ス權權利ハ給ヒ兼裁判事ノ有スル裁判權ヲ如キ條約ニ絶キハ而シテ種々權利ハ一般ノ者ニ及フベシ

非シテ公使ノ家族公使館員從者等ニ及ヌニ過ルル其然而シテ民事上ノ裁判權ハ之ヲ有セス唯非訟事件ニ付テ其取扱ヲ爲スコトヲ得ルニ過キス固ヨリ公使ハ裁判領事ノ如ク本國ト駐在國ト人條約ヲ以テ特ニ裁判權ヲ得タル場合ハ此限ニ在リテ信教ノ自由權ニ唯信教ノ自由ヲ認メサル國家ニ於テ然ルノミ

第十一節 領事

領事ハ本國經濟上ノ利益ヲ計ラシカ爲メニ外國ニ駐在スル官吏ナリ而シテ領事ノ管轄區域ハ派遣國カ駐在國ト同意ヲ得テ定ムル所ニ依リ領事ノ公使ト異ナル所ハ政治上ノ代表者ニ非テ之ニ對シテ他國ノ對シテ多數ノ員數ヲ派遣シ得ルコト及ビ領事ハ條約ノ約定ニ因リテ始メテ派遣セラルルモノナルコト是ナリ

領事ヲ分チテ任命領事職務領事トモ謂フ及ヒ名譽領事ト二種トシ任命領事ハ常ニ本國ノ人民ニシテ且官吏タリ之ニ反シテ名譽領事ハ領事ヲ派遣スル本國ノ人民ニ非ス故ニ本國ノ官吏ニ非ス唯一定ノ手當ヲ受ケテ領事ノ職務ヲ行フ

ニ過ニス隨テ任命領事ト異ニシテ領事タル職務ノ外如何ナル業務ニ從事スルコトヲ得任命領事ニ本國ト駐在國トノ條約ニ因リテ裁判權ヲ有スル者ヲ男之ヲ名ケテ裁判領事ト謂フ裁判權ヲ有セザル領事ヲ商業領事ト稱ス此外領事ハ階級ニ關スル國際法上特別ノ意義ヲ有スルモノニ非ス

(一) 本國ノ通商航海ニ關スル利益ヲ計ルコトニ關シテ領事ハ保護ヲ行フ事ニ關シテ本國ト駐在國トノ間ノ交通ニ關スル條約殊ニ通商航海條約ノ事實上屬領事ヲ行ハル所ニシテ觀察スルコトニ當リ

(二) 駐在國ニ在ル自國人民ヲ保護スルコト 駐在國ニ在ル第三國ノ人民ヲ保護スルコトアレトモ是レ寧ロ例外ニ屬スルモノナリ

(一) 領事ノ管轄區域内ニ在ル自國人ヲ爲スル旅行勞務件及口検査スル事ハ本國ト駐在國トノ條約ニ依リテ其項下ニ當リ

(二) 駐在國ニ在ル自國人民ノ健康證書又與テ船長ノ請求ヲ受ケテ駐在國ノ行政官ニ對シテ離陸ノ引渡ヲ求ムルコト唯リ普通ノ船舶ノミナラス軍艦ニ對シテ亦補助又與テ船長ノ死亡又ハ故障スル場合ニ新船長ヲ補スル事

(三) 本國ノ戶籍吏其他登記官吏ノ爲スル職務ヲ行フコト

(四) 自國人民ノ死亡シタルトキ死者ノ遺產ヲ封印シ細目録ヲ作リ保管スル事

領事ノ任命ハ本國ニ於テ之ヲ爲ス故キ名譽領事ヲ除外領事ノ有スル權利義務ハ總テ派遣國ノ法律ニ因リテ定マレドモ然レドモ領事ヲ受ケヘキヤ否ヤハ總テ條約ニ因リテ定マレドモ

可狀ヲ受ケテ始メテ領事タル職務ヲ行フコトヲ得ルモノトス認可狀ヲ與フコト否トハ駐在國ノ任意ナリ例ハ領事ノ職務カ駐在國ノ法令ト抵觸スルカ如キ場合ニハ駐在國ハ之ニ認可狀ヲ與フルコトヲ拒ムコトヲ得ルカ如シ若シ駐在國カ認可狀ヲ與ヘザルトキハ領事ノ職務ヲ行フコト不能トス何トスレ

ハ本國ヨリ觀察スルトキハ官吏ヲ事下雖モ國際法上ヨリ觀察スルトキハ一ノ機關ニ過キザレバナシトシテ國内ノ機關ニ與テハイコトナクハ成ルベシ也

領事ハ國家ノ外交上ハ代表機關ニ非サルカ故ニ駐在國ニ於テ外交官ノ受クニキ特權ヲ有スルモノニ非ス然レドモ歐羅巴大陸ノ學者ハ條約ヲ以テ領事ニ特權ヲ與フヘシト主張シ之ニ反シテ英米ノ學者ハ領事ニハ何等ノ特權ヲモ與フヘカラスト主張セリ然レドモ今日ノ實際ニ於テ多數ノ國家ハ國內ノ法律ニ於テ領事ニ特權ヲ與フルコトヲ規定セルガミナラズ外國ノ條約ニ於テ相互的ニ或種ノ特權ヲ約定セリ今其特權ヲ列舉スレハ左ノ如シ

- (一) 本國ノ徽章ヲ用フル權利 領事ハ其事務所又ハ住所等ニ本國ノ國旗ヲ掲テ徽章ヲ附スル權利ヲ有ス然レドモ本國ノ國旗徽章ヲ掲タルコトハ決シテ治外法權ヲ有スルコトヲ意味スルモノニ非ス又之ニ因リテ犯罪人ノ庇護ヲ爲スノ權利ヲ生スルモノニモ非ス單ニ徽章ヲ附スルノ形式ノ權利ナルルニモ(日獨領事職務條約第五條參照) 水ニテハ船ノ普照ノ權限ハ三ノニテ限リテ之ヲ
- (二) 書類ノ不可侵權 領事ノ記錄文書ハ不可侵ニシテ駐在國ノ官廳ニ之ヲ

- 搜索シ又ハ差押アルコトヲ得ス但領事カ同時ニ商業ヲ營ムカ如キ場合ニハ其私書ハ此限ニ在ラス(日獨領事職務條約第三條參照) 駐在國中日本ノ領事ハ其
- (三) 領事カ駐在國ニ於テ或犯罪ニ付キ其主權ニ服從セザルノ權ヲ任命領事ニシテ駐在國ニ於テ犯罪ヲ爲スモ其犯罪カ駐在國ノ秩序ヲ紊亂スルコト大ナルニ非サレハ駐在國ニ之ヲ處罰スルコトナシ(日獨領事職務條約第三條參照)
  - (四) 或種ノ租稅ヲ免ルルノ權 任命領事ハ一般ニ國家及ビ市町村ニ於テ直接稅並ニ公共ノ負擔ヲ免除セラル(日獨領事職務條約第三條參照) 又コト内政事務領事ノ終了原因ヲ舉クレハ左ノ如シ
- (一) 領事ノ派遣國又ハ駐在國カ滅亡シタルトキ
  - (二) 領事カ本國ノ國法ニ於テ領事タル官職ヲ失セタルトキ
  - (三) 領事カ駐在國ニ於テ認可狀ヲ取消セラレタルトキ
  - (四) 領事ノ駐在國ト本國トノ間ニ於テ戰爭カ開始シタルトキ
  - (五) 領事カ死亡シタルトキ

## 第二章 條約

### 第一節 條約ノ沿革

我國カ外國トノ間ニ始メテ締結シタル條約ハ嘉永七年即チ千八百五十四年ノ「ペルリ條約」ナリ該條約ハ其性質良好條約ニ屬ス其後安政五年ニ至リ英米蘭佛露諸國トノ間ニ通商航海條約ヲ締結シタリ此條約ハ明治三十二年七月ニ至ルマテ行ハレタルモノナリ此所謂五箇國條約ニ於テ最モ著シキ事項ハ日本ニ於ケル外國ノ領事ニ裁判權ヲ認メタルコト居留地ノ制度ヲ設ケタルコト内地雜居ヲ禁シタルコト及ヒ條約ニ附屬セル運上目録ナルモノニ因リ外國ヨリ日本ニ輸入スル貨物ニ賦課スル稅ヲ協定シタルコト等是ナリ其後慶應二年ニ至リ從來ノ輸入稅ヲ輕減シテ平均五分下シタルカ如キハ最モ著シキ現象ナリトス維新後外國トノ間ニ結ビタル條約ニシテ最モ注目スヘキハ明治二年ニ締結セラレタル日英條約是ナリ即チ同條約ニ依リ從來ノ裁判權中日本ニ屬スルカ外國ニ屬スルカ不明ナリシモノヲ外國ニ屬セシムルコトヲ約定シタリ明治四年

當時ノ右大臣岩倉具視ヲ特命全權大使ト爲シ參議木戶孝允大藏卿大久保利通工部大輔伊藤博文等ヲ副使ト爲シ歐米各國ニ派遣シテ條約改正ノ談判ヲ爲シシメタリ其改正案ノ大要ヲ示セハ次ノ如シ即チ三府五港ニ限リ外國人以外内地雜居ヲ許スコト領事裁判權ヲ撤去スルコト三府五港ノ官廳ニ外國人ヲ使用スルコト三府五港以外ニ外國人ノ旅行ヲ許スコト外國人ヲ日本裁判官ト爲スコト外國人ト日本人トヲ合セテ民法刑法ヲ編纂ヲ爲シムルコト等是ナリ然レトモ諸外國中孰レモ此改正ニ應ズルモノナカリレバ以テ明治六年ニ至リ大使一行ハ空シテ歸朝セリ其後佐賀ノ亂臺灣ノ征討西南戰爭等アリタルヲ以テ條約改正ニ關スル事項其結ニ就カザリシカ明治十一年當時ノ外務卿寺島宗則ハ駐米特命全權公使吉田清成ヲシテ日米新條約ヲ締結セシメタリ此條約ノ大要ハ日本カ米國ニ對シ絕對無限ニ海關稅ヲ徵收スルヲ權利ヲ得タルコト日本ノ沿岸貿易ヲ米國ニ許サザルコト領事裁判權ハ從來ノ儘ニ保存スルコト等是ナリ然ルニ同條約第十條ニ此ノ條約ノ約定ハ日本ト他ノ締盟各國トノ間ニ此約定ト等シキ約定又ハ重條ヲ取結セ該約定ノ現行ノトモ臣ヲ實施スルコトアリ

ヲ諸外國ハ從來ノ條約ヲ改正スルコトヲ肯セザリシヲ以テ日米條約ハ遂ニ實施セラレルコトナクシテ止ミタリ明治十三年井上馨外務卿ト爲リテ以來四度案ヲ更ヘテ條約改正ニ著手シ或ハ法權ノ一部ヲ回復セントシ或ハ稅權ノ一部ヲ回復セントシ或ハ又法權ノ一部ト稅權ノ一部トヲ回復セント試メタレトモ遂ニ其效ヲ奏セザリキ

明治二十二年ニ至リ當時ノ外務大臣大隈重信ハ墨西哥合衆國ト通商航海條約ヲ締結シタリ此條約ハ殆ト全ク對等ノ條約ニシテ日本ト外國トノ間ニ存スル從來ノ條約中曾テ見サル所ナリ然ルニ諸外國ハ日本トノ間ニ此ノ如キ對等條約ヲ締結スルヲ肯セズ是ニ於テ日本ハ歐米諸國ニ對シ大體左ノ如キ條約ヲ締結セント欲シタリ即チ領事裁判權ヲ撤去スルコト、領事裁判權撤去後五箇年間ハ外國人ノ被告ト爲リタル訴訟ヲ審理スル爲メ我國大審院ニ外國人裁判官四名ヲ置クコト、新法典ハ領事裁判權撤去以前ニ之ヲ公布且實施スルコト、内地雜居ヲ許可スルコト、土地所有權ヲ外國人ニ與フルコト等は皆此ノ如キ條件ヲ以テ北米合衆國、獨逸、露西亞三國トノ間ニ獨印ヲ終リ正ニ全局ヲ改正ノ見ント

ズルニ際シ蹙蹙シテ止ミタリ夫ハ外務大臣ト爲リテ青木周藏ノ案ハ大要左ノ如シ稅率ヲ凡ソ一割一分トスルコト、此狀態ヲ十二年間繼續シタル後全ク稅權ヲ回復スルコト、居留地ヲ五箇年以内ニ廢止スルコト、居留地廢止後ハ領事裁判權ヲ撤去シ内地雜居ヲ許スコト、沿岸貿易ヲ外國人ニ與ヘサルコト等是ナリ然レドモ此案モ亦同氏大津事件ノ爲メ擱置ヲ辭シタルト共ニ不成立ト爲レリ

其後榎本武揚ノ外務大臣タリシトキ當時ノ樞密院議長樞密顧問官、外務大臣澁信大臣及ヒ内務大臣ヲ條約改正案調査委員ト爲シ立案セシメタルモノアリ其大要ヲ列舉スレハ左ノ如シ領事裁判權撤去ニ先ツコト一箇年前ニ新法典ヲ實施スルコト、居留地ハ五箇年後ニ廢止スルコト、居留地ヲ廢止シタル後ニ於テ從來ノ居留地ニハ外國人ニ永代借地權ヲ與サルコト、居留地ヲ廢止ト共ニ支那人ヲ除ク外内地雜居ヲ許可スルコト、關稅ハ平均一割二分トスルコト等是ナリ然レトモ此案モ亦政治上ノ變動ト共ニ效ヲ奏セズシテ止ミタリ明治二十七年八月ニ至リ外務大臣陸奥宗光ハ英國トノ間ニ始メテ通商航海條約ヲ締結シ次テ北米合衆國其他ノ諸國トノ間ニ悉ク條約ヲ改正スルニ至リタリ此條約ハ改正





條約ノ形式ハ必ス之ヲ書面ニ認メサルハ其力ヲ失フコトハ是ナリ固ヨリ書面ニ認メテ其國家間ノ約束ト雖モ其國家ヲ拘束スルコト勿論ナリト雖モ是ハ所謂條約ニ非ス條約ニハ普通前文ト稱スルモノアリテ先ツ如何ナル目的ニ因リテ其條約ヲ結ビタルヤヲ記載シテ各條ヲ入り終ニ時日ヲ記載シ又原本兼通ヲ作リタルヤヲ示シ最後モ全權大臣ノ記名調印ヲ爲スヘキモノトス條約ノ文字ハ萬國條約ニ於テハ佛語ヲ用ヒ各國條約ニ於テハ通常締約國雙方ノ語ヲ用フ但單ニ第三者タル國家ノ語ヲ用ヒ或ハ之ヲ併用スルコトヲ妨ケズ例ヘハ露清間ノ滿州撤兵條約ノ如キハ露文及ヒ支那文外ニ佛文ヲ用ヒ條約ニ爭アルトキハ佛文ニ從ヒテ解釋スヘシト爲セリ

### 第三節 條約ノ要素

條約ノ要素ヲ分テテ主體ニ關スル要素客體ニ關スル要素及ヒ目的ニ關スル要素ノ三トス

更ニ之ヲ細別シテ(一)意思(二)主權(三)代表權限四批准トス

(一) 意思 條約ヲ締結スルニ當リテハ國家間ニ意思アルコトヲ要ス且其意思ハ合致セサルヘカラス然レトモ國內法上ニ於ケル契約ト異ナル所ハ強迫又ハ詐欺ヲ加ヘタル條約カ無効又ハ取消シ得ヘキモノトナラヌニテ當然有效ナルコト是ナリ此ノ如ク強迫等ヲ加ヘタル條約カ有效ナルノ理由ニ付テハ種種ノ學說アリ今其二三ヲ左ニ示ス

第一說 國家ハ如何ニ強迫ヲ加ヘタルモ之カ爲メ意思ノ自由ヲ失フモノニ非ス自ラ滅亡スルカ又ハ其強迫ニ從テカ二者擇ニ權利アリト云フニ在リ

第二說 國家其モノハ決シテ性質上強迫ヲ受クルモノニ非ス國家カ全權大臣ニ對シテハ強迫ヲ加フルコトヲ得レトモ國家其モノニ對シテハ強迫ヲ加フルコトヲ得スト云フニ在リ

第三說 強迫ヲ加ヘテ締結シタル條約カ無効ナリ固シテ總テハ條約カ悉ク無効ト爲ルヘク殊ニ戰後ノ條約カ強迫ヲ加ヘテ締結セタルカ故ニ戰爭ニテ開始スルコトキハ遠征平和ニ歸スルコトヲ能ハサルベシ是ヲ以テ便宜上強迫ヲ

受テ締結シタル條約モ亦之ヲ有效ト爲サザルベカラズト云フ在リ然レモ

(二) 主權條約ヲ締結スル國家ハ完全ナル主權ヲ有セズルベカラズ主權ナキモノハ國家ニ非ス國家ニ非サルモノハ國際法ノ主體ト爲ルコト能ハサルヤ言フ埃タス隨テ國際法ノ主體ニ非サルモノノ爲シタル合意ハ之ヲ條約ト稱スルコトヲ得サルヤ亦明カナル所ナリ故ニ羅馬法王ト國家トノ間ノ合意ハ條約ニ非ス又一箇人ト國家トノ間ノ合意モ等シク條約ニ非サルナリ國家間ノ合意ト雖モ悉ク之ヲ條約ト稱スルコトヲ得ストノ說アリ即チ單ニ私法上ノ内容ノミヲ有スル契約ハ經合國家間ニ締結セラレルモノト雖モ條約ト稱スルコトヲ得ストノ說是ナリ其二三々々ニ示スルヤ

(三) 代表權限 國家カ條約ヲ締結スルニハ國家ヲ代表スル者ノ行爲ヲ必要トス加之其代表者ハ代表權限ヲ有スル者ナラサルベカラス代表權限ヲ有セザル者ノ爲シタル行爲ハ國家ヲ拘束スルモノニ非ス何人ヲ代表者ト爲スヤ如何ナル權限ヲ與フルヤハ國內法ノ問題ニシテ國際法ノ問題ニ非ス元首自ラ條約ヲ締結スル場合ニ於テハ即チ元首カ國家ノ代表者ト爲リタルモノナリ此ノ如ク

於テモ其艦員カ拿捕物ノ分配ヲ受クルカ故ニ義勇艦隊ニ於テ賞與金ヲ受クルノ事實ヲ以テ直チニ私利ヲ目的トシ國家ノ利益ヲ後ニスルモノト論斷スルコト能ハス要スルニ巴里宣言ニ於テ私掠船ヲ廢止シタルハ之ニ對スル國家ノ監督カ不十分ナルニ基因スルニ外ナラサルヲ以テ國家カ其監督ヲ確實ニ行ヒ得ルニ於テハ猶ホ陸戰ニ於テ民兵義勇兵ヲ以テ戰鬥員ヲ補充シ得ルト同シク義勇艦ヲ使用シ得ヘキヲ以テナリ然レトモ理論上ニ於テ義勇艦隊カ巴里宣言ノ違反ナリヤ否ヤハ姑ク措キ英國カ普國ノ同艦隊ヲ同宣言ノ違反ニ非スト認メ他國モ之ヲ批難シタルモノナキカ故ニ若シ之ヲ使用シテ咎ムルモノトセハ斷國モ爭フテ斯ル艦船ヲ用ヒテ其戰鬥力ヲ補足セント力ムルハ自然ノ勢ニシテ千八百七十七年英露兩國間ニ戰爭ノ起ラントシタルニ當リ露國人民ハ義捐金ヲ以テ船舶ヲ購入シ義勇艦隊ヲ組織シ其戰爭ニ至ルニ於テハ海軍士官ノ指揮ノ下ニ置キテ巡洋セシメントシタリシカ其葛藤ハ伯林會議ニ於テ無事ニ結局シ當時ノ組織ニ係ル義勇艦隊ハ今日仍ホ存在シ露國政府ハ其船舶ノ種類ニ應シ年年補助金ヲ與ヘ船長及ヒ少クモ他ノ船員一名ハ政府ヨリ任命シ平時ハ商

船旗ヲ掲ケテ黑海及ヒ浦鹽斯德港間ノ航海ヲ爲シ兵士及ヒ罪人ヲ政府ヲ爲メ  
 ニ運搬スルノ外商業ニ從事シ戰時ニ於テハ巡洋其他戰争用ノ船舶ト爲サザル  
 事ヲ其他千八百八十七年以來英國モ太平洋及ヒ太平洋ヲ航海スル郵船會社ト  
 特約シ之ニ一定ノ補助金ヲ與ヘ政府ノ通知アルヲ否ヤ何時ニテモ其船舶ヲ政  
 府ニ賣却又ハ貸與スルコトトシ船舶ノ構造ニ付テモ戰時ニ於テ武裝ノ必要上  
 豫メ海軍省ノ指揮ヲ受ケシメ其特約アル船舶ノ船員半數ハ海軍ノ豫備士官ヲ  
 以テシ米國モ千八百九十二年以來同國商船會社ト同一ナル契約ヲ締結シ米西  
 戰爭ニ於テハ其會社ノ迅速ナル船舶ヲ徵用シテ運送船及ヒ斥候船ニ用ヒ佛國  
 及ヒ獨逸モ各自國郵船會社ト斯ル特約ヲ爲シ居レリ

第三節 海上捕獲

交戰國カ戰國巡洋ノ艦船ヲ以テ公海及ヒ交戰國雙方ノ領海ニ於テ捕獲沒收シ  
 得ヘキモノハ敵國ノ船舶及ヒ載貨ニ止マラス一定ノ場合ニハ中立國ニ屬スル  
 財產ヲモ捕獲シ得ヘキモノナレドモ中立國ノ財產ニ關スルモノハ局外中立ノ

法則ニ於テ說明シ本節ニ於テハ海上捕獲ノ法則中敵國財產ニ關スルモノニ止  
 ム(ト)中世ニ行ハレタルコンソラトール、マール法典ノ規定ニ於テハ船舶ト  
 載貨トヲ問ハス敵國政府若クハ其人民ノ所有ニ係ルモノハ悉ク捕獲シ得ルコ  
 トトシ其結果トシテ敵國ノ艦船ハ悉ク捕獲セラレ得ク載貨ニ付テハ敵國內  
 ニ在ル場合ハ勿論中立國船舶軍艦其他ノ官船ハ例外内ニ在ル場合ト雖モ之ヲ  
 捕獲シ之ニ反シ中立國ノ船舶ハ捕獲セラレコトナク又中立國ノ載貨ナル以  
 上ハ中立國船内ニ在ルトキハ勿論敵船内ニ在ル場合ト雖モ捕獲セラレナリシ  
 カ第十六七世紀ニ於ケル商業ノ發達ニ伴ヒ戰爭中ハ成ルヘク第三國ノ商業モ  
 損害ヲ與フルコトヲ避クルノ趣旨ヨリシテ各交戰國ニ捕獲審檢所ヲ設テシ海  
 上ノ拿捕物ハ拿捕者ニ於テ必ス同法廷ニ引致シ其審判ニ由リ沒收ト否トヲ決  
 スルコトト爲リ又同一ノ趣旨ヨリシテ和蘭國ノ主唱ニ基キ千六百五十年間西  
 兩國ノ通商條約ヲ以テ自由船自由物及ヒ敵船敵物ノ二主義ヲ包含スル法則ヲ  
 約定シ此法則ニテハ載貨ノ沒收ト否トヲ決スル標準ニ付テ其物品所有者如何  
 ニ拘ハラズ之ヲ搭載スル船舶ノ國性如何ニ因ルコトト爲シテ以テ所有者

國際公法(戰時) 交戰國間ノ法則 海戰ニ於テノ戰國財產ニ關スル權利 海上捕獲 一五五

ノ敵人ト否トヲ問ハス敵船中ニ在ル物品ヲ總テ敵物トシ中立國船内ニ在ル物  
 自由物即チ捕獲スヘカラサルコトト爲シ苟モ船舶カ敵國ニ所屬スルモ其  
 載貨ト共ニ之ヲ沒收シ中立國商船ナルトキハ載貨ト共ニ捕獲セザルコトト爲  
 シタルモノトス然レトモ斯ル條約ハ第十八世紀ニ亘リ多數ノ國家間ニ締結セ  
 ラレ學者中之ヲ當時ノ國際公法ト爲リタルモノト説述シタルモノナラザルニ  
 拘ハラズ實際ニ於テハ一般法則ト爲ルニ至リタルニ非ズ單ニ條約上ノ義務ト  
 シテ行ハレ又時トシテハ自由船自由物ノ主義ヲ斥ケテ單ニ敵船敵物ノ主義ヲ  
 採リタルモノアリ英國ノ如キハ中世以來ノ法則ヲ墨守シタルカ故ニ此點ニ付  
 キ諸國ノ行爲ハ久シク一致ヲ缺キタリシカ千八百五十六年巴里宣言ニ於テ之  
 ノ一定シ同宣言第二條ニ據テ英國英國ノ官艦ハ中立國内ニ非ズ聯合ニ據テ之  
 局外中立國ノ旗章ヲ掲ケル船舶ニ搭載スル敵國ノ貨物ハ戰時禁制品ヲ除キ  
 其ノ外之ヲ拿捕スヘカラサルコトト爲ルニ決シタルモノトシテ其ノ條約ニ據テ之  
 又第三條ニ據テ之ヲ決シタルモノト爲ルニ決シタルモノトシテ其ノ條約ニ據テ之

ト規定シ前者ニ於テハ自由船自由物ノ主義ヲ採リタルト同時ニ後者ニ於テハ  
 敵船敵物ノ主義ヲ採ラスシテ中世以來ノ法則即チ物品ノ所有者如何ニ依リ捕  
 獲スルト否トヲ決スル主義ヲ採リタルモノトス此故ニ現行法ニ於テハ敵國船  
 舶ハ官船ト私船トヲ問ハス悉ク捕獲ノ目的物ト爲リ敵國ノ載貨ニ付テハ中立  
 國ノ船舶内ニ在ルトキハ之ヲ沒收セス單ニ其物品カ敵國船舶内ニ在ル場合ニ  
 於テノミ捕獲沒收セザルルニ過キス尙ホ海上捕獲ノ目的物及ヒ捕獲審檢所ニ  
 關スル法則ヲ審ニスルカ爲メ左ニ分説セン

第一款 捕獲免除ノ船舶

交戰國カ海上ニ於テ捕獲シタル船舶又ハ載貨ヲ拿捕物ト稱シ拿捕ヲ行ヒ得  
 キ海上ハ中立國領海以外ニ限リ交戰國軍艦カ敵國艦船ヲ公海ヨリ追躰シタ  
 場合ニ於テモ其艦船カ中立國領海ニ入ルトキハ之ヲ攻撃若クハ拿捕シ能ハサ  
 ルノミナラス臨檢搜索ヲモ行フコト能ハスシテ斯ル行爲ヲ同領海ニ於テ爲ス

ハ中立國主權ノ侵害ニシテ本國ハ同中立國ニ對シ其責任ヲ負フ事ヲ欲ス而シテ  
 ナ捕獲ノ目的物タル敵國財產中其船舶ハ軍艦其他ノ官船ナルト私船ナラバ  
 同ハス之ヲ捕獲シ得ヘシト雖モ文明諸國ノ慣習上八類ノ一般ノ幸福ニ基キ一  
 ノ船舶ハ官船ト私船ト別ナク捕獲スヘカラスルコトトシ我海軍捕獲規定第  
 三條ニ於テモ

左記ノ船舶ハ拿捕スヘカラス

- 一 沿海漁船
- 二 學術慈善教法ヲ爲ス航行スル船舶
- 三 病者負傷者ヲ輸送スル船舶
- 四 燈臺用船
- 五 規定セリ就中漁業船ハ私有船舶ニ限リ其他ハ官船並ニ私船ヲ包含スル
- 六 現行法上捕獲免除ノ敵船ヲ列擧セバ限リ
- 七 探檢其他學術上ノ發見ヲ目的トスル船舶
- 八 探檢其他英國探檢船二艘カ土地探檢ノ爲メ船長ヲクテ率フル所ト爲リ亞米

利加洲ニ向テ出發シタル佛國ニ其海軍及殖民地ニ訓令シ同船ノ航海ヲ妨  
 グス之ヲ友誼國船舶ト同ニ待遇スル事ヲ其後文明諸國ハ之ニ倣ヒ第  
 十八世紀ニ入リテモ斯ル實例多ク千八百五十九年伊奧戰爭中英國官艦ニ  
 號カ伊國ノ妨害ヲ受ケヌシテ又シテ海峽其他同國沿海ニ於テ學術上ノ探檢ヲ  
 爲シタルハ其一例ナリ

第二ノ病者負傷者ヲ救護スル船舶ニ付テハ千八百六十八年赤十字條約追加條  
 款ニ於テ其規定ヲ爲シ同條約ハ批准ニ至ラザリシカ普佛戰爭中ニテ實行シ  
 後ノ戰爭ニ於テモ諸國ハ之ニ準據シ更ニ平和會議ハ條約中赤十字條約ノ原則  
 ナ海戰ニ應用スル條約ニテ確定スルニ至リタルモノニシテ交戰國政府ノ軍用  
 病院船簡人若クハ救恤協會ノ病院船又ハ中立國ノ病院船ヲ捕獲スヘカラス  
 ノ外中立國ノ商船遊船又ハ艦舟ニシテ交戰國ノ病者傷者若クハ難船者ヲ搭載  
 シ又ハ收容スルモノ其輸送ノ爲メ捕獲セラルルコトナシト規定シ就中軍用  
 病院船ハ官船ナレドモ交戰國雙方ノ病者傷者ヲ等シテ救護スルノ義務アリテ  
 局外者ノ地位ニ在ルカ故ニ同條約ノ規定ニ依リ交戰國雙方ハ他ノ船舶ト同シ

ク之ニ臨檢シ其行動ヲ監督シ得ルキモノトモテ其交際關係ハ前ハ海關不同ノ  
 第三 燈臺用船ハ官船ニ場合ニ於テモ一般航海者ノ安全ヲ圖ルニ必要ナルカ  
 故ニ軍事上ノ目的ニ使用セラレザル限ハ捕獲セラルルコトナク其船中軍員  
 第四 俘虜交換船軍使ヲ運搬スル船舶ノ如キ戰爭ノ法則上不可侵ノ待遇ヲ有  
 スル船舶ハ捕獲ヲ免レ就中俘虜交換船ハ交戰者間ノ約定ニ係ル交換ハ俘虜又  
 運搬ノ爲メ使用セラレ普通敵國政府ヨリモ通航券ヲ受ケルモノナク其船中軍員  
 有セザル場合ニ於テモ其任務ハ明白ナルモノナク捕獲セザルモノナク其船中  
 第五 沿海漁船ヲ捕獲シ其船中軍員ハ古來佛國ノ主唱ニ係リ第十六世紀ニ於テ外國  
 法令ヲ以テ捕獲ヲ免除シ千六百八十一年ノ有名大航海勅令ニ於テ外國  
 漁業船ニ此特權ヲ認メザリシカ是レ全ク英國ニ於テ佛國ノ漁船ヲ捕獲シタ  
 ルニ基キ其後米國獨立戰爭マテハ英佛兩國共ニ其捕獲ヲ行ヒタリシカ千七百  
 七十九年佛國王ルイ十六世ノ勅令ヲ以テ再ヒ其免除ヲ規定シ英國ト交涉ノ末  
 英國モ亦之ニ同意シ米國獨立戰爭及ヒ佛國革命戰爭中ニ於テ兩國共ニ其捕獲  
 ヲ免除セリ然レトモ英國ノ見解ニ於テハ漁船ノ免除ヲ國家ノ好意ニ基ク處置

ト爲シ佛國ハ之ヲ國際公法上國家ノ絕對的義務ト爲シタルコトナレトモ畢竟  
 スルニ沿海漁業ヲシテ戰爭中其職業ニ從事セシムルハ該細民ハ戰爭ニ關係ナ  
 キ糧食即チ魚類ヲ交戰國人民ニ供給スルニ止マリ且海上ノ危險ヲ冒シテ小ナ  
 ル生計ヲ營ムモノナルニ拘ハラズ戰爭ニ依リ其無害ナル職業ニ妨害ヲ與ヘ船  
 舶及ヒ漁具ヲ沒收スルハ戰爭ノ目的ニ影響ナクシテ甚シキ困難ヲ其生活ニ與  
 フルモノナルカ故ニ人情之ヲ爲スニ忍ビサルニ出テタルニ過キス此故ニ英米  
 兩國ニ於テハ條約上ノ義務ナルカ又ハ交戰國ノ好意ニ出ツルモノト看做ス所  
 以ナリ殊ニ鯨漁、鰵魚、如キ大洋ノ漁業ニ從事スル船舶ハ此特點ヲ有セザル  
 コト一部少數ノ學者ヲ除クノ外一般ニ異論ナク我捕獲規定ニ於テモ捕獲ノ免  
 除ヲ沿海漁船ニ限リタル所以ナリ、不<sub>レ</sub>五<sub>ノ</sub>捕獲ノ規定ニ於テハ  
 第六 官船ト私船トヲ問ハズ難破ヲ避ケ若クハ糧食缺乏等航海ニ堪ヘザル必  
 要ニ迫リ又ハ戰爭ノ事實ヲ知ラスシテ敵國ニ入リタル船舶ハ時トシテ捕獲ヲ  
 免除セラレタルコトアリ千七百四十六年英國軍艦ニリゾベス號之ハバナ港ニ  
 入リタルニ西國ハ之ヲ修繕セシメ保護ノ免狀ヲ與ヘテ退去ヲ命シ千七百八十

年英國商船「ホシ」ヲ入リタルニ佛國ノ同船カ開戦ノ事實ヲ知ラズシヨリ糧食ヲ與ヘテ退去ヲ許シ千七百九十九年普國艦「ヤ」ヲ「ダン」カニ入リタルニ佛國ノ之ヲ退去セシメタルカ如キ是ヲ然レトモ英國ノ古來斯ル場合ニ於テ敵船ヲ沒收シ此點ニ付テハ實例及ヒ學說ニ定セズ正義人情ノ點ヨリ其不幸ニ乘シテ利ヲ貪ルノ不正ヲ説ク者アレトモ敵國軍艦ノ如キハ其捕獲ト否トハ戰爭ニ大關係アルカ故ニ無條件ニテ退去セシムルヲ交戰國ノ義務ト爲スコト能ハス

第七 郵便船モ亦官船ト私船トノ別ナク時トシテ捕獲セラレザリシコトアリ千七百九十三年英佛兩國ハ郵便局ニ使用シタル郵船ヲ戰爭中互ニ捕獲セズ千八百四十三年及ヒ千八百五十六年英佛條約ニ於テモ戰爭中互ニ之ヲ捕獲セザルコトトシ近年郵便船ニ關シテハ一般ニ寬大ナル待遇ヲ爲スニ至リタレトモ條約ヲ以テスルニ非ザレハ其免除ヲ國家ノ義務トスルコト能ハス

### 第一款 私有船舶及ヒ戰貨

敵國ノ私有船舶及ヒ戰貨ノ捕獲ハ中世以來爭フヘカラザル法則ナルニ拘ハラズ近世之ニ反對ノ議論盛シク其理由トスル所ハ第一戰争ハ國家間ノ争鬪ニシテ國際公法上私有財産ヲ不可侵トスル原則ニ適合セズ第二戰争ニ於テ敵國ノ戰鬪力ヲ奪フヘ行爲ハ正當ナレトモ私人ノ船舶戰貨ヲ掠奪スルハ戰鬪力ヲ減スルモノニ非ス隨テ私有財産ノ海上捕獲ハ戰爭ノ目的ヲ達スルニ必要且直接ニ非ス(第三)陸上ニ於テ私有財産ノ尊重ヲ原則トシ海上ニ於テモ同一ナルヘキニ拘ハララス海上捕獲ニ於テ此原則ヲ認めザルハ不當ナリ(第四)陸上ニ於ケル徵發取立金ハ一定ノ方法ヲ以テ占領地ニ一般ヨリ公平ニ徵收スルニ反シ海上捕獲ハ物品所有者タル商人ニ悲惨ノ損害ヲ生シ掠奪ト同一ナリ(第五)徵發取立金ハ軍隊ニ直接且必要ノ物品ヲ徵用スルニ拘ハララス海上捕獲ハ戰鬪員ノ日常品ヲ取得スルニ非ス其物品ノ種類及ヒ程度ニ制限ナシ(第六)近世開戦ニ當リ交戰國ノ港内ニ在ル敵國船舶ニ退去ヲ許シ又商業社會ノ交通敏活ト爲リタルカ爲メ海上ノ危險ヲ冒シテ航海スル者ノ數ヲ減シ隨テ海上捕獲ノ實用ハ減縮シ來リタルカ故ニ之ヲ存積スルニ交戰國ノ不利益ニテ中立國ヲ利益スルモノトス



何トナレハ敵國商人ノ中立國船舶ニ貨物ヲ運搬シ又ハ中立國ニ船舶ヲ移シテ捕獲ヲ免ルヘキヲ以テナリ(第七)英佛米獨ノ如キ商業ノ大部分ハ海上ニ依ルカ故ニ捕獲ヲ廢止スルハ其各國ノ利益ナリ何トナレハ海軍艦隊又ハ多數ノ商船ヲ防禦スルノ困難ナルニ反シ巡洋艦一艘ハ多數ノ商船ヲ攻撃シ得ルカ故ニ捕獲ヲ廢止スルトキハ商船防禦ノ必要ナク海軍ノ全力ヲ以テ戰鬪又ハ封鎖ノ用ニ供シ得ヘシトセリ

海軍ノ捕獲ニ關スル權利ハ第一戰争ハ國家間ノ公争ナレトモ私人ニ關係ナシトスルハ法理ニ背キ事實ニ反ス私利有財產ハ敵國ノ戰鬪力ヲ助タルノミナラス海上ノ商業ハ敵國ニ取リ最モ大ナル財源ナルカ故ニ之ヲ攻撃シテ其財源ヲ涸竭スルハ速ニ戰争ノ目的ヲ達スルノ有力ナル手段ナリ又私人ノ利益ヲ害スルノ故ヲ以テ此重要ノ權利ヲ行フヘカラストスルハ私人ノ利益ノ爲メ國家ノ利益ヲ犧牲ニ供スルモノトス(第二)商船ハ運送船其他戰争ニ缺クヘカラサル使用ニ供セラレルカ故ニ之ヲ押收スルハ不法ニ非ス(第三)海上捕獲ハ徵發取立金ト同一ナルノミナラス陸上ニ於ケル私利有財產ノ尊重ハ事實上占領者ノ

利益ニ基キ軍隊成功ノ利害關係上其必要アリト雖モ海上ニ於ケル至多之ニ反シ敵國戰鬪ノ資料及ヒ財源ヲ涸竭シテ戰争ノ目的ヲ達スルハ自己ノ利益ナリ(第四)陸上ノ私利有財產不可侵ト雖モ事實上其實行ノ範圍明確ナラス軍隊カ苛酷ノ徵發取立金ヲ命スルトキハ多數ノ商人ニ對スル掠奪ト其結果ヲ同一ニス(第五)海上捕獲ハ陸上ノ如ク之ヲ爲メ直接ニ商人ノ生活及ヒ家族ノ平穩ヲ紊ルコトナク其生命身體ニ危害ヲ及ホサス單ニ捕獲ヲ知リナカラ其危險ヲ冒シテ航海スル者ノ財産ヲ押收スルニ過キサルノミナラス近世海上保險ノ發達ニ依リ其損害ハ必スシモ所有者一人ニテ全額ノ負擔ニ終ラサルモアリ(第六)國家ニ依リテハ多クノ海軍ヲ有シナカラ陸軍ノ大ナルモノアリテ大ナル海軍ヲ有スルノ必要ナクシテ優勢ナル陸軍ヲ有スルモノアリ此等兩國間ニ戰争アルニ際シ捕獲ヲ廢止シ海軍國ノ不利益ニシテ陸軍國ハ自由ニ徵發取立金ヲ占領地ニ行ヒ得ヘシ加之海上捕獲ノ爲メ敵國ノ船舶カ海上ニ出シルコト能ハス中立國ニ船舶ヲ移スカ又ハ商品ノ運搬ヲ中立國船舶ニ依頼スルノ不利益ハ其商業ニ對スル打擊ナルノミナラス實際敵國ニ於テ其商業ノ材料アル間ハ商品ヲ悉ク中

國際公法論叢(續) 交戰國ノ法則 海軍ニ於ケル敵國財産ニ關スル權利 海上捕獲

立國船舶ニ依頼シ得ヘキモノニ非ス又船籍ヲ中立國ニ移スモ必スシモ捕獲ヲ免ルヘキモノニ非ス(第七海上捕獲ノ存在ハ戰爭ヲシテ私人ノ利害ニ直接關係ヲ有セシメ之カ爲メ一般ニ戰爭ヲ不人望ト爲シ之ヲ未萌ニ防クノ利アルカ故ニ政策上ニ於テモ之ヲ廢止スヘカラストセリ自由ニ立國ニ對シテ陸軍ハ敵地ヲ侵略シ得ヘク其侵略及ヒ占領ハ戰爭ノ目的ヲ達スルノ捷徑ナルニ反シ海軍ニ於テハ敵國軍艦其他ノ敵船ヲ攻撃シ及ヒ敵國ノ商業ヲ零落スルノ外其使用ノ途ナキノミナラス敵國ニ取リ大ナル財源タル商業ヲ攻撃ハ戰爭ノ目的ヲ達スルニ付キ最モ大ナル效力ヲ有スルカ故ニ私有財產ノ海上捕獲ハ今日ニ至ルマテ主トシテ英佛兩國ノ反對ニ依リ廢止ニ至ラザル所以ナリ

### 第一項 拿捕ノ方法及ヒ船舶載貨ノ國性

交戰國軍艦ハ中立國ノ軍艦其他ノ官船ヲ除キ海上ニ於テ遭遇スル一切ノ船舶ニ實彈ヲ込メヌシテ發スル空砲又ハ彈丸ヲ入ルルモ其的ヲ外ヌシテ發射スル

虛砲ヲ以テ其進行ノ停止ヲ命スルノ權利アリテ之ヲ停航權ト稱ス停航ヲ命セラレタル船舶ニシテ尙ホ進航ヲ繼續スルトキハ之ヲ窮追シ兵力ヲ以テ停止シ得ヘク軍艦ヨリ士官一名ニ相當ノ水兵ヲ端舟ニテ停航船舶ニ派遣シ其士官ノ外二名又ハ三名ノ水兵ヲ其船舶ニ乗移ラシメ船籍證明書乗組員名簿通航券航海口誌船積證書送狀積荷目錄等船舶備付ノ書類ヲ船長ヨリ提出セシメ之ニ依リ其船舶ノ國籍航海ノ目的積荷ノ種類及ヒ到達地等ヲ調査シ尙ホ其點ニ疑アルトキハ訊問シテ之ヲ憶ムルヲ臨檢權ト稱シ其結果ニシテ拿捕スヘキ船舶又ハ載貨ニ非ラルトキハ臨檢員ハ其旨ヲ航海口誌ニ記載シテ同船ヲシテ進航ヲ繼續セシメ之ニ反シ臨檢ニ際シ書類ノ整頓ヲ缺キ又ハ不明ノ點アルカ若クハ偽造變造又ハ秘密ノ書類アルトキ若クハ其他ニ付キ拿捕スヘキ嫌疑アルトキハ臨檢員ハ船長又ハ其代理者ヲ立會テ以テ船内ヲ點檢シ其閉鎖ノ場所若クハ貨物ヲ開被セシメテ検査シ得ヘク此權利ヲ搜索權ト稱ス而シテ臨檢搜索ヲ行便シタル結果ニシテ疑ナキモノハ直チニ放免シ若シ捕獲スルキモノナルカ又ハ其嫌疑アルモノハ軍艦ニ於テ之ヲ自國ノ捕獲審檢所ニ送送シ其裁判ニ依リ

ヲ沒收ト否トヲ決スルモノトスニモ自國ノ利益ニ對シテ其船中ニ於テ其載貨ノ敵物ナルモノハ船中ト共ニ之ヲ沒收スルモノナラズ故ニ果シテ如何ナルモノカ敵船ニシテ如何ナル載貨ヲ敵物ト爲スヤ明カニモサルヘカラス此點ニ付キ佛國ト英國トハ其見解ヲ異ニシ佛國主義ニ依ルトキハ船中ト載貨トヲ問ハス其所有者ノ國籍如何ニ依リテ敵物ト否トヲ決シ若シ船中ト載貨トニ關シテ其所有者カ敵國人民ナルトキハ之ヲ敵船トシ戰爭中敵國ニ船籍ヲ有スルカ又ハ其所有者カ敵國人民ナルトキハ之ヲ敵船トシ戰爭中敵國人民ヨリ中立國人民ニ船中ト讓渡又ハ開戰前戰爭ヲ豫期シテ捕獲ヲ免レントスル讓渡ヲ無効トス之ニ反シテ英米主義ニテハ船中ト載貨トヲ問ハス其國性如何ヲ決スルニ付キ所有者ノ國籍ニ依ラスシテ其船中ト載貨トヲ問ハス理由トスル所ハ船中ト載貨ト何レノ國民力カ之ヲ所有スルニ拘ハラズ苟モ所有者カ敵國ニ定住スルトキハ其物品ハ敵國ノ財源ト爲リ敵國政府ノ保護若クハ管轄ノ下ニ立テ同國收入ノ一部トシテ戰爭ノ資料ト爲リ必要ノ場合ニハ之ヲ戰爭ニ徵用シ得ヘキヲ以テ自ラ敵物ト爲スニ在リ加之戰爭中ニ於テモ敵國

人民カ船中ト中立國人民ニ賣却スルヲ認メタリト雖モ其賣却ハ最モ嚴格ニ審查セラレ善意ニ且完全ニ所有ヲ移轉アリタルニ必要トシ所有者ニ於テ其事實ヲ證明スヘク若シ賣主ニ於テ其利益ノ一部ヲ保留スル契約條件等ノ存在スルトキハ賣却ヲ無効トシ戰爭後買戻ノ條件アルカ又ハ代金ノ全部若クハ一部ノ支拂ニ關シテ權利ヲ保留スルトキハ之ヲ敵船トス但敵國ニ船籍ヲ有シ其商業ノ免許若クハ通航券ニ依リテ航海スル者ハ其佛兩國ニ於テ等シク敵船トシ敵國船ノ嫌疑アルモノハ其所有者又ハ船長ニ於テ敵船トシテ立證スヘク敵船中ノ載貨ハ總テ敵物ト推測スルカ故ニ其反證ハ所有者ニ於テ立證スヘキコトモ兩國主義ニ於テ同一トシ我捕獲規定第七條第五號ニ於テモ嫌疑アリトシテ拿捕セラレ該嫌疑ヲ終ニ證明シ得サル船舶ヲ適法ノ捕獲ト規定セリ

敵船中ノ載貨ニ付キ佛國主義ニ於テハ所有者ノ國籍ニ依リ敵物ト否トヲ決シ航海中ノ載貨ハ其移轉ヲ認メズ又商業上海上ノ貨物ハ一般ノ慣例止其受取人ニ於テ航海ノ危險ヲ負擔スルカ故ニ之ヲ受取人ノ物品ト看做スト雖モ當事者

間ノ契約又ハ諸國ノ慣例ニ依リ特別ノ約定若クハ慣例アルトキハ佛國ニ於テハ之ヲ尊重シ捕獲ヲ避ケルカ爲メ詐僞ニ出テタル場合ノ外ハ其反對ノ沒收ヲ爲サズト雖モ英米主義ニ於テハ贓貨ニ付テモ定住地ニ依ルカ故ニ否トハ第一ノ所有者ノ定住地ヲ敵國ニ有スル者ハ自國人又ハ中立國人ト雖モ其財產ハ敵物ト看做シ定住地ノ意義ハ本人ニ於テ其地ニ永住ノ意思(Animus Vagandi)及ヒ其地ニ在テ年月ニ依リ各場合ニ就キ本人カ同所ヲ住所ト爲シタルト否トニ依リ之ヲ決スルカ加之定住地ハ事實上ノ住所ヲ意味シ法律上ノ住所ニ非ス又永久的ノ住所ヲ定メタルトキハ一時其地ヲ去リタル爲メ財產ノ國性ニ影響ナシト雖モ居住ニ依リテ國性ヲ取得シタルモノハ本人カ其永住ヲ抛テ歸來ノ意思ナク(Giue Animus Revertendi)其地ヲ退去スルト同時ニ終了シ又交戦國人民ハ戰爭中他國ニ移住シテ定住地ノ變更ヲ認メス

第二 交戦國ニ商店ヲ有スル者ハ其商店ニ直接附屬ノ財產ヲ敵物トシ敵人ニシテ中立國ニ商店ヲ有スル場合ニハ其商店ニ附屬ノ財產モ亦敵物トス

第三 敵國ノ領土若クハ其占領地ノ產物又ハ製造品ニシテ土地又ハ製造所所

有者ノ手ニ在ル間ハ所有者ノ國性如何ニ拘ハラヌ之ヲ敵物トス

第四 拿捕物ノ國性ハ其拿捕當時ノ國性ニ依ルヘク其後所有者カ國性ヲ變更スルモ捕獲ト否トニ關係ナシ

第五 航海中ナル貨物ハ佛國ノ如ク其移轉ノ例外ヲ認メス中立國人民ヨリ敵國人民ニ運搬中ノ物品ハ絕對的ニ買主ノ財產トシ敵國人民ヨリ中立國人民ニ宛テタル物品ハ其賣買ノ善意ニシテ且完了シタル場合ニ限り之ヲ買主ノ物品トス

我國捕獲規程ニ於テハ贓貨ノ敵性ニ付キ孰レノ主義ヲ採リタルヤ其明文ナシト雖モ船舶ハ敵船トシテ拿捕スルコトヲ得

- 一 運送船トシテ敵國政府ノ備入レタル船舶其ノ備入ハ敵國政府ノ脅迫ニ依レル時亦同シ
- 二 敵國ノ旗章及通航券ヲ有スル船舶 同輩國者ハ中立國ノ旗章ヲ有スル船舶ニ異ナシ
- 三 敵國政府ノ免狀ニ依リ航海スル船舶 同輩國者ハ中立國ノ免狀ニ依リ航海スル船舶ニ異ナシ

四 何レノ國籍ニ屬スルヲ問ハズ敵國軍艦ノ保護ノ下ニ航海スル船舶

五 假令船舶書類面ハ帝國臣民若クハ同盟國若クハ中立國ノ船舶ナルモ一

部若クハ全部敵ノ所有ニ係ル船舶

六 外見ハ帝國同盟國若クハ中立國ニ住所ヲ有スル人ノ所有船舶ナルモ

其ノ船舶ハ出港後ニ敵ヨリ買受ケタルモノニシテ尙ホ進航中ニアリテ

未タ其人ノ所有ニ歸セザルモノ

七 外見ハ帝國同盟國若クハ中立國ニ住所ヲ有スル人ノ所有船舶ナルモ

若シ其ノ所有者開戦後若クハ開戦前豫メ開戦ヲ慮リテ該船舶ノ所有權

ヲ敵ヨリ得タルモノナルトキハ取引ノ善意ニシテ且ツ既ニ完了セル證

明充分ナラザルモノハ其ノ所有權ハ中立國ノ人ニ歸スルモノトシテ

規定シ就中第一號ハ官船ニシテ第二號乃至第四號ハ英佛兩國主義ニ於テ

敵國トシ第五號ノ規定中帝國臣民ナル用語ヨリセハ佛國主義ニ依リタルヤノ

疑アレトモ第六號乃至第七號ニ於テハ敵船トシテ捕獲スル船舶ハ悉ク定住地

主義ニ依リ佛國ノ如ク國籍ニ依ラザルコト明シナリ加之第七號ニ於テ開戦後

ニ於ケル船舶所有權ノ移轉ハ佛國主義ニ於テ全然認メザルニ拘ハラス此規定  
ニ依レハ取引ノ善意ニシテ完了ノ場合ヲ認メタルハ英國主義ニ依リタリモノ  
トス

第二項 拿捕物ノ處分竝ニ共同拿捕及ヒ再拿

捕

拿捕シタル船舶ハ本國ニ於ケル捕獲審檢所ノ所在地若クハ其最近港ニ引致ス  
ヘキモノトス然レトモ軍艦ヲ拿捕シテ船數ヲ増スニ從ヒ軍艦自ラ之ヲ本國ニ引  
致スルコト能ハサルコトアリ斯ル場合ニハ士官及ヒ水兵ヲ乘組マシメ廻送ス  
ルヲ常トスト雖モ時トシテ其人員ニ缺乏シ或ハ又被捕船ノ速力其他載貨ノ事  
情若クハ天候風浪乃至戰闘ノ情況ニ依リ其廻送ヲ爲ス能ハサルコトアリ昔時  
ニ於テハ屢々中立國港内ニ捕獲審檢所ヲ開キテ審判シタレトモ現今ニ於テ斯ル  
行爲ハ中立國主權ノ侵害ヲミカラス中立國モ屢々交戰國軍艦ニ對シ拿捕物ヲ率  
ヒテ入港スルコトヲ禁スルカ故ニ斯ル事情ニ於テハ拿捕者ハ其船舶及ヒ載貨

ニ付キ非常處分ヲ爲シ捕獲審檢所ニ提出スルニ先チ載貨ヲ消費シ船舶ト共ニ之ヲ賣却破壞シ若クハ古來ノ慣例上船舶所有者ニ賠償セシメテ解放シ得ヘク我捕獲規程第二十條ニ「敵國海軍ノ船舶ヲ捕獲シテ賣却シ得ルモノハ其價金ニ依リて破損ヲ拿捕船舶若シ船體ニ破損等アリテ第十八條ノ港捕獲審檢所所在地又ハ其最近港マテ進行ニ堪ヘサルトキ若クハ艦長該船舶ヲ進行セシムルニ充分ナル下士卒ヲ乗込マシメ能ハサルトキ若クハ其積荷カ第十八條ノ港ニ到達スル前腐敗等ノ虞アルトキハ艦長ハ該船舶ヲ最近ノ港ニ引致シ適宜ノ處分ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テ艦長ハ軍艦乘組員ノ中ヨリ最先適任ナル鑑定員ヲ選ミ事實ヲ鑑定セシメ圖書ヲ製シ並ニ一切ノ手續ヲ詳記シ之ヲ捕獲審檢所ニ提起スヘシ」

前項ノ場合ニ於テ艦長ハ該船舶ノ敵ニ屬セサルコト明瞭ナルトキハ戰時禁制品沒收ノ後之ヲ放免スヘシ

又第二十二條ニ「敵國海軍ノ船舶ハ其積荷ヲ移シタル後該船舶ヲ破壞スヘシ但水夫書類及ヒ積荷ハ第十八條ノ港ニ廻送スヘキモノトスルニ限リテモ」

敵國政府ノ船舶ニシテ第十八條ノ港ニ引致スルコト能ハサル事由アルトキハ艦長ハ水夫書類及若シ得ヘクシハ積荷ヲ移シタル後該船舶ヲ破壞スヘシ但水夫書類及ヒ積荷ハ第十八條ノ港ニ廻送スヘキモノトスルニ限リテモ規定シ敵國政府ニ屬セサル船舶ニ付テハ破壞シ得ヘキ規定ナシト雖モ敵國私有船舶ト雖モ「敵國海軍ノ船舶ニシテ第十八條ノ港ニ引致スルコト能ハサル事由アルトキハ艦長ハ該船舶ヲ破壞シ得ヘキ規定ナシト雖モ敵國」

- 一 三 其船體ノ破損海上ノ風浪又ハ速力ノ遲緩等ノ爲メ捕獲審檢所所在地ノ港又ハ其最近港ニ廻送シ能ハサルトキ
  - 二 作戰上其廻送ヲ爲スノ暇ナキトキ
  - 三 優勢ナル敵國海軍ノ襲來ニ因リ取戻サルル恐アルトキ
  - 四 一 本國ノ諸港敵軍ノ爲メ封鎖セラレ廻送スルコト能ハサルトキ
  - 五 其載貨ニ危險ノ虞アルカ如キトキ
- ニ於テハ他國ノ港内ニ引致シ適宜ノ處分ヲ爲スヘシト雖モ其引致スル爲スコト能ハサルトキハ拿捕者ハ船舶若クハ載貨ヲ破壞シ得ヘク國際法協會ノ捕獲規程第五十條ニ於テ「敵國海軍ノ船舶ヲ捕獲シテ賣却シ得ルモノハ其價金ニ依リて破損ヲ拿捕船舶若シ船體ニ破損等アリテ第十八條ノ港捕獲審檢所所在地又ハ其最近港マテ進行ニ堪ヘサルトキ若クハ艦長該船舶ヲ進行セシムルニ充分ナル下士卒ヲ乗込マシメ能ハサルトキ若クハ其積荷カ第十八條ノ港ニ到達スル前腐敗等ノ虞アルトキハ艦長ハ該船舶ヲ最近ノ港ニ引致シ適宜ノ處分ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テ艦長ハ軍艦乘組員ノ中ヨリ最先適任ナル鑑定員ヲ選ミ事實ヲ鑑定セシメ圖書ヲ製シ並ニ一切ノ手續ヲ詳記シ之ヲ捕獲審檢所ニ提起スヘシ」

左ノ場合ニ於テ拿捕者ハ拿捕ノ船舶ヲ破壞シ又ハ沈没セシムルコトヲ得但  
 其前ニ船内ノ人員ヲ軍艦ニ乗移ラシメ載貨ヲ成ルヘク充分ニ荷卸シ且拿捕  
 ヲ行ヒタル指揮官ニ於テ船舶書類並ニ審判ノ爲メ要スル物件ヲ保存スヘキ  
 モノトス

四 一本船舶ノ状態不良ニシテ海上ノ險惡ナルカ爲メ同船ヲ航海セシメ能ハ  
 ズルトキ

五 二 船舶ノ速力遲緩ニシテ軍艦ニ陪伴スルコト能ハス且容易ニ敵ノ回復  
 又スル恐アルトキ

三 其優勢ナル敵國兵力ノ襲來シ拿捕ノ船舶ノ取戻サレル恐アルトキ

四 軍艦ニ於テ拿捕シタル船舶ニ充分ノ海員ヲ乘込マシメントスルトキ

五 拿捕シタル船舶ヲ廻送セシムルコトヲ得ヘキ港ヲ越隔シタルトキ

ト規定セリ此故ニ拿捕者ハ捕獲審檢所ニ引致シ能ハサル事情アルトキハ拿捕  
 物ヲ賣却、破壊又ハ燒却シ得ヘク又ハ被補船舶ノ船長ヨリ一定ノ金銀貨支拂ハシ

ノ河海即チ道路ト爲リ駱駝ノ背奴隸又肩又ハ凹形ノ木材即チ運送具ト爲リ河  
 海ノ潮流畜類ノ體力即チ運轉力ト爲ルナリ次ヲ多少ノ人力ヲ施シタル道路生シ  
 テ車輪等用ヒラレ水上ニハ橈舟ヲ見ルニ至ル更ニ進ミテハ橋梁陸ニ架セラレ  
 帆船海ニ浮ヒ遠ニ汽船ヲ走セ鐵道ヲ布設スルニ至ルモノトス此ノ如ク運輸機  
 關ハ次第ニ進歩セルモノナレトモ全ク他ヲ排シテ一種ノ運輸機關ノミ運輸ヲ  
 獨占スルモノニ非ス水路陸路鐵道ハ各々之ニ陪伴スル車馬船舶汽車ヲ利用シテ  
 互ニ相助ケルモノトス

五 二 相助ケルモノトス

六 鐵道ニ比シテ其運輸力小ナリトス其原因ハ運送具ヲ用  
 フルニ當リ摩擦ヨリ生スル抵抗力ノ大ナルト強キ運輸力ヲ用ヒテ大ナル運送  
 具ヲ用フルコト能ハサルトニ在リ是ヲ以テ通常ノ陸路ハ規則正シク迅速ニ一  
 時ニ多量ニ隨テ廉價ニ運輸スルコト能ハサルナリ然レトモ通常ノ陸路ハ何レ  
 ノ時代ヲ問ハス必要ナルモノトス

七 水路トハ大海ヲ始トシテ總テ舟楫ヲ通スヘキ水流ヲ謂ヒ其大部分ハ自然ノ狀  
 態ニ於テ使用シ得ヘキモノナルカ故ニ古來水路ハ交通運輸ニ用ヒラレ現今ヲ

如ク鐵道ノ敷設盛ナルニ當リテハ水路ハ内地運輸ノ爲メニ不用ナルカ如シト雖モ決シテ然ラサルナリ蓋シ水路ハ陸路及ヒ鐵道ニ比シ之ニ勝ルノ點アリ第一抵抗力少キコト第二大ナル運輸具ヲ用フルニ適スルコト是ナリ是ヲ以テ水路ハ非常ニ重量アル物ヲ一時ニ運輸スルコトヲ得ルモノニシテ隨テ水路ハ甚タ廉價ナル運輸ヲ爲シ得ルナリ内地ノ水路ニシテ既ニ右ニ述ベタルカ如シ海路ノ運輸カ至大ノ便益ヲ與フルハ言フヲ俟タズ而シテ海路ノ運輸ハ蒸氣船ノ發明以來長足ノ進歩ヲ爲セリ其甚盛ナルトキハ英國ノ發見其出鐵道ハ近世ノ經濟社會ニ至大ノ影響ヲ及ホセルモノニシテ或人曰ク英國近代ニ於ケル貿易ノ發達ハ之ヲ自由貿易ニ歸センヨリ寧ロ鐵道ノ效ト爲サザルヘカラスト蓋シ鐵道ハ千八百三十年始メテ英國ニ布設セラレ爾來諸國ニ傳播シテ陸上ニ於ケル最モ重要ナル運輸機關ト爲レリ鐵道ノ長所ハ左ノ如シ

第一 運輸速力ノ大ナルコト

第二 規則正シク運輸ヲ爲スコト

第三 多量ノ運輸ヲ爲スル水路ニ劣レトモ通常ノ陸路ニ優リ隨テ廉價ノ運

據ヲ爲シ得ルコト

第四 鐵道ノ運輸ハ安全ナルコト

此等ノ運輸機關ニ對シテ國家ハ如何ナル態度ヲ採ルヘキカヲ一言セント欲ス

第一 通常ノ道路ハ前述シタル如ク今日ト雖モ必要ナルモノナルカ故ニ本道ハ國家専ラ之カ築造及ヒ維持ヲ負擔シ他ノ支道ニ至リテハ府縣郡若クハ町村ヲシテ築造修繕ノ任ニ當ラシメ而シテ道路ノ使用ハ何人ニ對シテモ無料タルヲ要スルナリ

第二 水路ニ付テ之ヲ見ルニ必要ナル場合ニハ運河ヲ開キ築港ヲ爲シ燈臺ヲ設ケル等國家自ラ之ヲ爲ササルヘカラス而シテ水路ニ使用スル船舶ハ私人ヲシテ隨意ニ製造シテ自由ニ航行セシムルヲ以テ通則ト爲スト雖モ必要ナル場合ニ於テハ保護獎勵ヲ加フルヲ要スルナリ例ヘハ航海獎勵法造船獎勵法ノ如キ是ナリ

第三 鐵道ニ至リテハ諸國其制度ヲ異ニシ全國ノ鐵道ヲ私人ノ敷設經營ニ放任スルモノアリ國家自ラ敷設シテ之ヲ經營スルモノアリ半ハ國有ニ屬シ半ハ



私設ニ係ルモノアリ或ハ國有ニシテ之ヲ私人ノ經營ニ委スルモノト私人ノ有ニシテ國家之ヲ經營スルモノトアリ此ノ如ク種種ナル制度ノ行ハルルハ各國ニ於ケル歴史上ノ原因國民ノ性質等ニ基クモノニシテ一概ニ之カ利害ヲ斷言スルコトヲ得スト雖モ鐵道ナルモノハ全ク之ヲ私人ノ利己心ニシテ放任スルキニ非ス少クトモ國家ノ監督ヲ要スルモノトス抑モ鐵道ハ敷設ハ土地ノ收用ヲ要スルモノナルカ故ニ土地ノ所有權ヲ侵スコトヲ免レズ又鐵道ハ實際自由競爭ヲ許ササルモノニシテ所謂自然的獨占ノ性質ヲ有スルモノナリ例ヘハ甲乙二郡ノ間ニ二會社ヲシテ鐵道ヲ併行セシメシニハ即チ二倍ノ資本ヲ要シ一國ノ資本ヲ浪費スル所以ナリ而シテ此ノ如ク二會社間ニ於テハ他ノ事業ニ於ケルカ如ク適度ノ競爭ヲ爲スコトヲ得ス其競爭タルヤ一方全ク倒レテ而シテ始メテ止ムニ非サレハ中途ニシテ二會社合併スルニ至ル是レ米國等ノ實例ニ徴シテ明カナリ

第一 鐵道ハ自然的獨占ノ性質ヲ具フルモノナルカ故ニ初ヨリ國家之ヲ獨占

スヘキナリ

第二 鐵道ノ敷設ヲ全然私人ノ企業ニ放任スルトキハ乘客荷物ノ多キ地ニハ早ク之カ敷設ヲ見ルモ其少キ地ハ棄テテ顧ミサルナリ然ルニ國家自ラ鐵道ヲ敷設スルニ於テハ此ノ如キ不權衡ヲ來スコト少シトス

第三 國有ノ鐵道ハ社會ノ公益ヲ主眼トシテ必スシモ收益ノ多キヲ欲セザルカ故ニ賃金モ自ラ低廉ナルヲ得ヘシ

第四 鐵道ノ敷設ヲ私人ノ企業ニ委スルトキハ其敷設ニ緩急アルコトヲ免レズ即チ金利低落シテ企業熱ノ盛ナル時ニ當リテハ鐵道ハ大ニ延長スルモ世上ノ景氣不良ナルニ當リテハ鐵道中絶スルカ如キコトアルハ諸國ノ例ニ徴シテ明カナリ

國有論者ノ曰フ所以上ノ如シト雖モ其豫期スル利益ヲ得ント欲セハ

第一 忠實ニシテ有爲ナル多數ノ官吏ヲ要シ殊ニ長ク其職ニ止マリ十分經驗ヲ積メル人ナカルヘカラス

第二 政府ノ財政鞏固ナルコトヲ要ス鐵道ヲ國有ト爲スモ社會ノ公益ヲ犧牲

トシテ財政補足ノ用ニ供セラルルニ至リテハ却テ害アルモノト謂ハサルヘカ  
ラス  
第三 政府鞏固ニシテ議會ノ爲メニ容易ニ動かサルルコトナキヲ要ス何トナ  
レハ種種ノ利益ヲ代表スル議員ヲ爲メニ左右セラルルカ如キコトアランニハ  
統一的ノ計畫ヲ行フコト能ハサレハナリ

若シ夫レ此等ノ條件ヲ具備セサルニ於テハ鐵道ノ國有モ果シテ其利益ヲ收ム  
ルキ否ヤ疑ナキ能ハス且私設鐵道ト雖モ政府ノ監督十分ニ行ハレ許可スヘキ  
線路ヲ豫定シテ以テ競争ヲ豫防シ賃金ノ如キモ政府ヲ認可ヲ要スルモノト爲  
シテ之ヲ制限シ又初ヨリ收益ノ多キ地ト其少キ地トヲ連結シテ以テ敷設ヲ許  
可セハ鐵道ノ一地方ニノミ偏スルノ弊ハ自ラ減スヘキナリ  
第二節 通信機關  
通信機關トハ通信ヲ傳達スル設備ニシテ其重ナルモノハ郵便電信電話是ナリ  
第一 郵便ニ就テ之ヲ見ルニ往時ニ在リテハ何レノ國ヲ問ハス驛傳ノ制度ア

リタルモ主トシテ政府ノ爲メニ書信ヲ傳達スルニ止マレリ次テ官用ノ傍ラ私  
人ノ信書ヲモ取扱フニ至リ更ニ進ミテ社會公衆ノ信書傳達ヲ以テ郵便ノ本務  
ト爲スニ至レリ而シテ郵便ナルモノハ今日孰レノ國ニ於テモ政府ノ經營スル  
所ニ係リ英米ノ如ク諸種ノ事業カ私人ノ企業ニ放任セラルル國ニ於テモ郵便  
ハ實ニ政府ノ管掌スル所タリ若シ郵便ヲ以テ私人ノ事業ト爲サンカ鐵道ト同  
シク有利ナル地ニハ十分ナル設置ヲ爲スモ人口稀薄交通不便ノ地ハ棄テテ顧  
ミラレサルコトアルヘシ又數多ノ私人ヲシテ競争セシメントスルモ其結果ハ  
必スヤ合併ニ終リテ自然ノ獨占ノ事業ト爲ルナリ然ルニ國家之ヲ行フニ於テ  
ハ統一セル制度ヲ設ケ遠近ノ區別オク全國同一ノ郵便稅ヲ以テ信書ヲ傳達ス  
ルカ如キ便利ヲ生スルナリ又信書ノ秘密ハ之ヲ政府ニ委任スルヲ以テ一層安  
全ナリト爲ヌナリ又郵便事業ハ其組織甚タ單簡ニシテ單純畫一ノ方法ヲ以テ  
之ヲ經營スルコトヲ得ルカ故ニ敢テ私人ニ委スルノ必要ナキナリ此等ノ理由  
ニ依リ郵便事業ハ何レノ國ニ於テモ政府之ヲ行フモノトス

經營シテ始メテ能ク公衆ノ要求ニ應ジ私設會社獨占ノ弊ヲ避ケ自由競争ノ短  
 ヲ免ルルコトヲ得ヘシ且電信事務ハ郵便事務ト結合スルコト容易ニシテ既ニ  
 郵便ヲ以テ官業ト爲スニ於テハ電信ヲ之ニ附屬セシムルノ甚タ便利ナルヲ見  
 ルナリ是ヲ以テ電信モ亦諸國殆ト皆政府ノ事業ト爲スナリ即チ英國ノ如キ初  
 ヲ私立會社ニ許可セシモ後之ヲ政府ニ買上ケテ郵便事業ニ合併セリ唯リ米國  
 ニ於テハ私設ノ制度行ハルルモ實際上一大會社ノ獨占ニ歸シ之ニ對スル批難  
 少カラサレトモ之ヲ矯正スルコトヲ得サルナリ

第三、電話ハ近來ノ發明ニ係レトモ今ヤ諸國ニ行ハレ重要ナル一ノ通信機關  
 ト爲リ殊ニ遠距離ノ電話行ハルルニ及ヒ電信ト競争スルニ至レリ而シテ此事  
 業モ亦獨占ノ性質ヲ有スルモノナルカ故ニ電信ト同シク國家ノ經營ニ委ス  
 ルヲ以テ適當ト爲スナリ

### 第四編 財貨ノ分配

## 第一章 分配ノ意義及ヒ所得ノ種類

### 第一節 分配ノ意義

財貨ノ分配トハ生産セラレタル財貨ヲ生産ニ關係セバ人人ニ分配スルノ謂カ  
 リ經濟事情ノ極メテ幼稚ナル時代ニ於テハ財貨ノ交易ノ行ハルルモト稀カク  
 カ如ク財貨ノ分配モ亦之ヲ行フ場合少シトス何レハ生産ハ多クハ一人又  
 ハ一家ノ手ニ由リテ行ハルルカ故ニ生産物ヲ他人ニ分與スルノ必要ヲ見サレ  
 ハナリ然レトモ進歩セル社會ニ於テハ單獨ノ經濟ヲ行フ者極メテ少ク勞動分  
 配ノ行ハルルニ隨ヒテ物ヲ徵ト雖モ其原料ヲ獲得スルニ以テ全ク生産ノ結了  
 告タルニ至ル間數多ノ人之ニ關係シ或ハ土地又ハ資本ヲ以テ或ハ勞動  
 ヲ以テ生産ノ進歩ノ助ケルカ故ニ此等ノ土地資本又ハ勞動ニ對スル報酬ハ  
 結局生産ノ結果ヨリ之ヲ得タルヘカラズ是ハ即チ財貨ノ分配ノ起ル所以カ  
 然レトモ多クハ場合ニ於テ其生産物ヲ直接ニ分配スルニ非ス例ヘハ企業者カ  
 勞動者ニ與スル賃銀ハ生産ノ半途ニ於テシテ而モ多クハ賃銀ヲ以テ支拂スモ  
 ナレトモ是ハ企業者及ヒ時立替又爲スニ外ナラス企業者ハ生産ノ結了ヲ待テ

ヲ其立替ハ返償ヲ受タルモノト稱ス。然レテ大ニ金貨等ハ其類ノ一トシテ  
 財貨ノ分配ハ社會上極大ノ重要ナル事項ニシテ財貨ノ分配宜キヲ得タルニ於  
 テハ種種ナル弊害ヲ起ルヲ免ヒテ其大ニ然ラズ。財貨ハ如何ニ分配セラルルヤ  
 テ以テ最モ一國ノ進歩ニ適スルモノト爲スヤ即チ財貨分配ノ結果トシテ人人  
 ノ間ニ生ズル貧富ノ差ハ如何ナル程度ヲ以テ最モ可ナリト爲スヤヲ觀ルニ各  
 人ノ所得及ヒ財產ノ全ク相平均スルニ其懸隔ノ甚ク大ナルトハ其ニ有害ニシ  
 テ中産者ノ數多キヲ以テ最モ宜シトス。中産者ノ數多少ハ資產ヲ有スレドモ勞  
 働ニ從事スルニ非ザレハ相當ノ生活ヲ爲スニト能ハス。而シテ勤勉業ヲ行ハ  
 益其境遇ヲ改良シ得ル者ヲ謂フナリ。是實ニ勤人ニ長クスハハ、其類ニ屬セ  
 各人ノ所得財產全ク相平均スルニ甚ク可ナル如シト雖モ是レ決シテ一國ノ  
 進歩ヲ速ナラシムル所以ニ非ザルナリ。之ヲ從來ノ經驗ト現時ノ狀態トニ徴ス  
 ルニ一國ノ文化ハ少數者カ他ニ先シテ進ミ衆人漸次其後ニ從フニ依リテ進  
 歩スルモノトス。若シ各人ノ地位全ク同等ニシテ毫モ頭角ヲ顯ス者ナキニ於テ  
 ハ社會ハ必ス沈滞ノ狀態ニ陥ルヘク近時社會ノ進歩ハ才能人ニ秀テ資產衆ニ

披スル少數者ノ力ニ負フ所大ナリ。然レトモ所得及ヒ財產ハ全ク少數者ノ掌裡  
 ニ集中シテ國民ノ多數ハ極メテ貧困ナル境遇ニ在ルハ又決シテ喜フヘキ現象  
 ニ非ス。何トナレハ少數ノ富豪ハ必ス嬌奢懶惰ニ流レ財貨ヲ浪費スルニ至リ多  
 數ノ人民ハ日日ノ糊口ニ汲汲トシテ毫モ其境遇ヲ進ムルノ餘裕ナケレハナリ  
 現今ノ社會ニ於テ財貨ノ分配ハ決シテ理想的ニ行ハレサルハ明カナリト雖モ  
 社會主義ノ論者ノ唱フルカ如ク國家權力ヲ以テ非常ノ制限ヲ加ヘテ之カ平均  
 ヲ圖ラントスルハ蓋シ不可能ノ事タリトス。故ニ財貨ノ分配ハ財貨ノ交易ノ場  
 合ト同シク主トシテ之ヲ自由競争ニ放任シ唯間接ナル方法ヲ以テ彙ニ述ヘタ  
 ルカ如ク中産者ノ増加ヲ促スヘキナリ。而シテ其方法ハ相續法ノ制定、租稅ノ賦  
 課法、勞動者保護法、勞動者保險制度等是ナリ。之ヲ要スルニ勞動者ハ必ス之  
 ニ對シテ十分ナル報酬ヲ受ケ勤勉ト堪忍トニ由リ其地位ヲ進ムルコト容易ナ  
 ルハ最モ希望スヘキ狀態ニシテ米國ノ如キ新開國ハ此點ニ於テ歐洲ノ舊國ニ  
 勝ルモノトス。

### 第二節 所得ノ種類

前節ニ述ヘタルカ如ク生産セラレタル財貨ハ結局其生産ニ必要ナル供シタル土地ノ所有者勞動者資本主及ヒ三要素ヲ結合シテ生産シテ實行スル企業者ノ間に分配セララルモノニシテ土地ノ所有者ノ所得ヲ地代勞動者ノ所得ヲ賃銀資本主ノ所得ヲ利息企業者ノ所得ヲ利潤ト稱スルナリ而シテ實際ニ於テハ其間ノ分界必スシモ判然ナラス且一人ニシテ數種ノ所得ヲ收ムル者アリト雖モ右ニ列舉セル四種ノ所得ハ其性質相同シカラサルカ故ニ次ヲ追ヒテ之ヲ説明セシ

### 第二章 地代

#### 第一節 地代ノ意義及ヒ其原理

地代トハ土地天賦ノ性質ヲ使用スルヨリ生ズル所得ナリ天賦ノ性質トハ即チ植物ヲ生育スルコト礦物等ヲ含著スルコト物體ヲ載スルコトニシテ人力ヲ毫ニ關係スル所ナク全ク原始的ノ性質ヲ謂フナリ此ノ如ク地代ハ土地天賦ノ性

質ニ基クモノナルカ故ニ地代ノ有無高低ハ土地カ此等ノ性質ヲ具備スルノ多少及ヒ之ヲ利用スルノ便不便ニ依リテ定マルモノトス先ツ農業ニ使用スル土地ノ地代ニ付テ之ヲ述ヘンニ例ヘハ一隊ノ人民未開ノ地ニ移住シタル場合ニ於テハ最モ豊饒ニシテ且最モ便利ノ土地第一ニ耕作セララルヘン而シテ此ノ如キ第一等ノ土地十分ニ存在スルトキハ一ノ土地ト他ノ土地トノ間ニ差異ナキヲ以テ地代ハ成立セザルナリ然レトモ人口繁殖シ第一等ノ土地ノ收穫クモヲ以テ其欲望ヲ満足スルコト能ハス隨テ穀物ノ代價騰貴スルニ於テハ第二等ノ土地モ亦用ヒラルルニ至ラン何トナレハ第二等地ハ第一等地ニ比シテ收穫少キモ穀物ノ代價ノ騰貴ニ因リ其收穫ハ以テ其生産費ヲ償フニ至レハナリ而シテ第一等地ハ一反歩ヨリ米二石ヲ産シ第二等地ハ一石五斗ヲ産スルモノト假定セハ其差五斗ハ即チ第一等地ノ地代ナリトス此時ニ當リ新ニ移住シ來レル者アリトセンニ此等ノ移住民ハ第二等地ヲ使用シテ收穫イ全部ヲ得ルモ第一等地ヲ借受クテ五斗ノ地代ヲ拂フモ其得ル所ハ同一即チ一石五斗ナリトス人口尙ホ増加シテ米ノ供給不足ヲ告クレハ米ノ代價ハ益騰貴シ一反歩ヨリ一石

ヲ產出スル第三等地ヲ耕スモ亦其生産費ヲ價ヲ至レハ第一等地ノ地代ハ一石ト爲リ第二等地モ亦五斗ノ地代ヲ生スルニ至ルナリ。一江正キヤイヌハ地代ノ成立スルハ右ニ述ヘタルカ如シ而シテ此成立セル地代ハ何人ノ所得ニ歸スヘキヤ自由競争行ハルルニ於テハ土地ノ所有者ヲ得ルモノトス即チ所有者自ラ其土地ヲ使用スルニ於テハ地代ハ他ノ所得ト共ニ當然所有者ニ歸シ之ヲ他人ニ貸與シタル場合ニ於テモ亦然リトス何トナレハ借受人ハ己カ下シタル勞動資本ニ對シテ相當ノ報酬ヲ得レハ損失ヲ被ラサルカ故ニ借受人ハ地代ノ全部ヲ所有者ニ拂フニ至ルヘキナリ。

地代ナルモノハ人口ノ繁殖ト共ニ次第ニ増加スルノ傾向アルモノトス即チ農產物ヲ要スルコト益多キニ及ヒテハ遠隔ノ土地又ハ劣等ノ土地ヲ用フルノ必要ヲ生シ隨テ近傍ノ土地又ハ豊饒ナル土地ノ地代ハ益騰貴スヘキモノトス地代騰貴スルトキハ農產物ノ代價モ隨テ騰貴スヘキカ如シト雖モ是レ原因ト結果トヲ顛倒スルモノニシテ地代ハ農產物ノ代價ノ一部ヲ成ササルモノトス何トナレハ曩ニ論シタルカ如ク農產物ノ代價ハ最モ不利益ナル條件ヲ下ニ生産

セラレタル部分ノ生産費ニ依ルモノナレハナリ即チ地代ハ農產物ノ代價ノ騰貴ニ依リテ始メテ成立シ又ハ増加スルモノニシテ地代成立シ若クハ増加シタルカ故ニ農產物ノ代價ヲ騰貴セシムルモノニ非サルナリ故ニ土地ノ所有者カ借地人ヲシテ地代ヲ支拂ハシメザルモ農產物ノ代價ハ低落スルコトナク唯借地人ヲシテ利益ヲ得セシムルニ過キサルナリ即チ地代ナルモノハ土地ノ所有者カ實際之ヲ獲得スルト否トニ拘ハラス社會ノ需要ニ應ジテ使用セル土地ニ肥瘠遠近ノ差異アルニ於テハ決シテ消滅セザルモノトス。

鐵山ノ地代モ其原理ニ於テハ農業地ノ地代ニ同シテ各鐵山カ其生産費ヲ異ニスルニ基クモノトス即チ其含蓄スル鐵物ノ多少其品質ノ善惡之ヲ採掘スルノ難易市場ヨリノ距離等ニ依リテ地代ヲ有無高低ヲ生スルナリ又家屋ノ敷地等ニ供スル土地ノ地代ハ主トシテ其位置ニ依リテ定マリ此種ノ地代ハ特ニ都會ニ於テ著シトス。

第二節 地代ノ原理ニ關スル反對ノ學說及ヒ事實

經濟學 財貨ノ分配 地代ノ原理ニ關スル反對ノ學說及ヒ事實

前節ニ述ヘタルカ如ク地代ノ成立シ地代カ土地ノ所有者ニ歸シ地代カ次第ニ昇騰シ而シテ地代カ生産物ノ代價ノ一部ヲ構成セザル所以ノ原理ヲ一括シテ「リカルド」ノ地代説ト名ク蓋シリカルドニ先テ既ニ地代ヲ論シタル者アリタレトモ最モ明白ニ之ヲ説明シタル者リカルドニテリトモ此「リカルド」ノ學說ニ關シテハ反對論ナキニ非ス又實際上其原理十分ニ行ハレタル場合アルヲ以テ少シク之ヲ述ヘンニ其合當スル點ヲ考ヘ其品質ノ高下ヲ比較スルニ米國ノ經濟學者「ケレ」ノ如キニ地代ヲ以テ土地天賦ノ性質ニ歸セス土地使用ノ準備ノ爲メニ投下セル資本及ヒ勞動ニ對スル報償ニ過キストセリ實際土地ヲ使用スルニハ多少ノ資本勞動ヲ要スルモノニシテ土地ノ賣買貸借セラザルニ其代價又ハ借地料ハ人力ヲ以テ土地ニ施シタル改良ノ報償ヲ合著スルモノトス然レトモ土地天賦ノ性質ニ差異アリテ地代カ此原因ニ基ク所以ハ前節ニ述ヘタルカ如シ地主カ毫モ資本勞動ヲ加ヘザルモノ拘ヤラス都會ニ於ケル地代ノ急激ニ上騰スルカ如キ事實ハ明カニ「ケレ」ノ説ノ誤レルヲ證スルモノナリ「ケレ」ハ又米國ノ如キ新興國ノ實際ニ徴シテ曰ク人ノ始メテ耕作ヲ爲スニ

「リカルド」ノ言ヘルカ如ク最モ豊饒ノ土地ヲ選スモノニ非スト夫レ或ハ然ラシテ然レトモ資本未タ豊富ナラス人力尙ホ缺乏セル當時ニ於テ生産費ヲ要スルコト比較ノ少クシテ收益比較ノ多キ土地ヲ耕作スルハ明白ニシテ「リカルド」ノ最モ豊饒ナル土地ト云フハ此意ニ外ナラスト解釋セハ地代成立ノ原理ハ毫モ變更スル所ナキナリト「ケレ」ノ説ニ對シテ「ケレ」ノ説ニ對シテ「ケレ」ノ説ニ對シテ社會主義ノ論者ハ曰ク地代ノ成立シ且其上騰スルハ土地所有者ノ功ニ非ス全ク外國ノ狀況ノ變移ニ依ルモノナレハ土地所有者カ唯リ之ヲ取得スルハ不當ナリ故ニ土地ハ之ヲ社會ノ共有ト爲サザルヘカラスト此説タルヤ多少ノ真理ヲ含蓄スルモノナレトモ土地共有ノ制度ハ今日之ヲ行フヲ得ス課稅等ノ方法ニ依リ此所謂不當所得ヲ政府ニ上納セシメントスルモ之カ見積極メテ困難ナリトス且土地ノ所有者ハ屢變更スルモノナルカ故ニ其利益ハ必スシモ一人ニ歸スルモノニ非ス又或場合ニハ地代減少ヲ爲メニ地主ハ損失ヲ被ルコトアリトス「ケレ」ノ説ニ對シテ「ケレ」ノ説ニ對シテ「ケレ」ノ説ニ對シテ前節ニ述ヘタルカ如ク地代ハ漸次ニ上騰スル傾向ヲ有スルモノナレトモ地代

購買ヲ制限スル原因モ亦存在スルナリ例ヘテ農業ノ進歩ニ因リ收穫増加  
 ルトキハ劣等又ハ遠方ノ土地ヲ用フルノ必要減スルナリ又運輸機關發達シテ  
 運搬費減少スルトキハ遠方ノ土地ヲシテ近傍ノ土地ト競争スルコトヲ得セシ  
 ヲ隨テ近傍ノ土地ノ有スル便益ヲ減少スルカ故ニ其地代ハ下落スヘキナリ近  
 年歐洲ニ於テ耕作地ノ地代下落ノ傾向アルハ米國等ヨリ廉價ノ穀物輸入モラ  
 ルルニ因ルモノトス又實際借地人カ地主ニ支拂フ地代ナルモノハ古來ノ習慣  
 等ニ依リテ定メラルル場合多キカ故ニ理論上地主ニ歸スヘキ利益モ借地人ノ  
 所得ト爲ルコト少カラシ其實例ハ英國又ハ歐洲大陸ニ於テ之ヲ見ルナリ之ニ  
 反シテ愛蘭ニ於テハ地主ノ收歛甚シク借地人間ノ競争激烈ナルカ故ニ借地人  
 ノ支拂フヘキ地代ハ往往一年ノ全收穫ヲ超ユルコトアリト云フ

### 第三章 賃銀

#### 第一節 賃銀ノ意義

人ハ其有スル勞動力ヲ發揮スルニ當リ或ハ企業者トシテ自ラ之ヲ用ヒ或ハ之

ヲ他人ノ使用ニ供スルコトアリ第一ノ場合ニ於テハ勞働ニ對スル報償ハ他人ノ  
 所得ト混同スト雖モ第二ノ場合ニ於テハ其勞働ニ對シテ特定ノ報償ヲ  
 得ルモノトス是レ即チ賃銀ナリ  
 今日ノ社會ニ於テハ他人ノ爲メニ勞働スル者少カラズ官吏ノ如キモ其ノ列外  
 然レトモ官吏ノ俸給ハ自由競争ノ爲メニ總ニス變動スルモノニ非ス又醫師辯  
 護士等モ亦他人ノ依頼ニ應ジテ勤勞ヲ供シ其收受スル報酬ハ一種ノ賃銀ニ外  
 ナラズト雖モ此等ノ職業ハ多クハ獨占的ノ性質ヲ有シ且風習慣行ニ制セラレ  
 經濟上ノ原則ノミニ依リテ定マルモノニ非ス之ニ反シテ狹義ノ賃銀即チ所謂  
 勞働者ノ取得スル賃銀ハ其高低スル所以主トシテ經濟上ノ原則ニ基キ而シテ  
 一國ノ經濟上ヨリ之ヲ見ルニ殊ニ重要ナルモノトス何トナレハ此賃銀ナルモ  
 ノハ多數人民ノ唯一ノ所得ナレハナリ之ヲ換言スレバ社會ニ於ケル多數人  
 民ハ此賃銀ニ依リテ衣食スルモノナレハナリ  
 現今ノ經濟社會殊ニ歐米諸國ニ於テ製造其他ノ産業ニ從事スル勞働者ハ其生  
 産ニ使用スル原料器具機械等ヲ自ラ所有スルモノニ非ス此等ハ皆雇主ニ屬ス



ルモ少トス故ニ勞動者ハ單ニ勞動ヲ供スルニ止マリ勞動ノ結果於所生産物ニ對シテハ直接ノ利害關係ヲ有セサルナリ然レトモ今日ノ勞動者ハ往時ノ奴隸ノ如ク外部ノ強制ニ因リテ勞動スルニ非ス全ク自己ノ自由意思ニ依リテ勞動スルモノトス故ニ之ヲ營フレハ勞動者ノ勞動ハ一種ノ商品ニシテ實銀ハ其代價ニ外ナラサルナリ然レトモ勞動ハ勞動者ノ身體ト分離スヘカラサルカ故ニ此勞動ノ賣買ハ普通ノ商品ノ如ク全ク雙方ノ利己心ニノミ放任スルコトヲ得サルナリ

**第二節 實銀ノ分類**

第一ノ實銀ニ實物ヲ以テ支拂フモノト貨幣ヲ以テ支拂フモノトアリ前者ハ飲食住居衣服等ヲ以テ勞動ノ報酬ニ充ツルモノニシテ經濟事情ノ幼稚ナル時代ニ於テハ此種ノ實銀支拂法大ニ行ハレ而シテ授受者雙方ニ便利ナリシナリ然レトモ貨幣ノ使用行ハレ交通ノ便開ケ而シテ勞動者ノ欲望増加シ其獨立心盛ナルニ及ビテハ貨幣ノ支拂法ニ依ラサルヲ得ス而シテ實銀ヲ以テ實銀ヲ受取

ルニキル甚タ便利ナリト雖モ物價ノ變動ヨリ生スル影響ハ全ク之ヲ負擔セザルヲ得ス而シテ雇主ト勞動者トノ關係ハ實銀支拂ヲ以テ一旦終了シ隨テ相互ノ感情ハ自ラ冷淡ナルヲ免レテ彼等ノ實物支拂ハ實銀亦全ク其跡ヲ絶タスト雖モ現今ニ於テハ貨幣支拂ノ實銀主トシテ行ハレ彼等ノトラジシスニテハ弊害ヲ豫防スルカ爲メニ實銀ハ貨幣ヲ以テ支拂フヘキ業トシテ規定スル邦國少シクラナルナリ

第二ノ實銀ハ時間ニ應ジテ支拂セザル仕事高ニ應ジテ支拂フモノトアリ前者ニ於テハ契約ノ條件單純ナルカ故ニ雇主ト勞動者トノ間ニ誤解ヲ生スルコト少ク勞動者ハ豫メ其所得ヲ計算スルコトヲ得ルナリ然レトモ勞動者ハ成ルベク少ク勞動ヲ爲サント欲シ雇主ハ成ルベク多ク勞動ヲ爲サントスルニ傾向ヲ有シ利害相反スルモノトシ仕事高ニ應ジテ實銀ヲ支拂フ場合ニハ雇主ハ生産物ノ多クヲ欲シ勞動者ハ所得ノ多クヲ望ミ雙方ノ意思調和スルモノナリ且實銀ハ勞動者ノ勤惰ニ應ジテ増減スルモノナリ故ニ公平ト謂之ヘキナリ然レトモ此支拂法ハ之ヲ應用スル範圍ニ自ラ限アリ即チ生産物ノ數量明カ

ニ計算シ得ヘク其品質容易ニ識別シ得ヘキモノナラサルヘカラス又労働者ハ過度ノ労働ヲ爲スノ傾向ヲ有シテ一人ノ労働従前ヨリモ多額ノ生産ヲ爲シ得ルカ故ニ労働者ノ數ノ増加シタルト同一ノ結果ヲ生シ爲スニ賃銀ノ低落ヲ來スノ恐ナキニ非タルナリ

第三ノ普通ノ賃銀ノ以外ニ賞與金ヲ與ヘ又ハ利潤ノ一部ヲ分配スル方法アリ前者ニ於テハ或ハ労働者ノ精勤又ハ生産物品質ノ優等又ハ原料品ノ節約ヲ獎勵スル爲メ一定ノ法則ニ依リ普通賃銀以外ニ賞與ヲ與フルナリ後者ニ於テハ企業ヨリ生スル利潤ノ一部ヲ労働者ニ分與スルモノニシテ此方法タルヤ常ニ札幌反目ノ傾向ヲ有スル雇主ト労働者トノ關係ヲ調和スルノ效能アルカ如シト雖モ實際其功ヲ收ムルコト難シトス何トナレハ企業ヨリ生スル利潤ハ労働者ノ勤勞如何ニ基クヨリモ事口世上ノ景氣又ハ之ヲ利用スル企業計畫者ノ手腕ニ依ルコト多ク労働者非常ニ勤勉ナルモノニ應シテ所得必スシモ増加スルモノニ非ス隨テ此方法ハ好結果ヲ收メタル實例ナキニ非サルモ之ヲ應用スル範圍ハ廣カラサルナリ

第四ノ賃銀ヲ支拂フニ滑準法ナルモノヲ用フルモノアリ即チ雇主ト労働者トノ合意ヲ以テ生産物ノ標準價ト標準賃銀トヲ定メ生産物ノ代價カ標準價ヨリ上レハ賃銀モ亦之ニ應シテ標準賃銀ヨリ上リ之ニ反シテ生産物ノ代價標準價ヨリ下レハ賃銀モ亦低落スルモノトス此方法ハ専ラ英米ノ製鐵所石炭坑等ニ用ヒラルルモノニシテ他ノ事業ニハ未タ之カ應用ヲ見サルナリ

### 第三節 賃銀ノ高低スル理由

曩ニ述ヘタルカ如ク賃銀ハ労働ノ代價ニ外ナラサルヲ以テ其高低ハ需要供給ノ關係ニ依リテ定マルモノトス而シテ需要者タル雇主ハ成ルヘク賃銀ノ低カラシコトヲ欲シ供給者タル労働者ハ成ルヘク其高カラシコトヲ望ムハ當然ノ理ニシテ労働者ト雇主ト對立スルノミナラス雇主及ヒ労働者各自ノ間ニ於テモ競争行ハルルナリ然レトモ賃銀ノ高低ニハ自ラ一定ノ制限アリテ其最低度ヲ定ムル原因ハ労働者ニ在リテ最高度ヲ定ムル原因ハ雇主ニアリトス

賃銀ノ最低度ヲ定ムル原因ハ労働者ノ生活ノ程度是ナリ文明ノ程度氣候ノ寒

曉生活上ノ習慣教育ノ高低職業ノ種類等ニ依リテ同一ナラスト雖モ一國人勞働者ニシテ同一ノ階級ニ屬シ同一ノ勞働ニ従事スル者ハ自ラ生活ノ程度ヲ等シウスルモノトス而シテ賃銀下落シ從來ノ生活程度ヲ維持スルコト能ハズトシトスルトキハ勞働者ハ全力ヲ盡シテ之ニ抵抗シ以テ其低落ヲ防クナリ又生活ノ程度ナルモノハ固ヨリ一定不動ノモノニ非ス能フ限リ抵抗ヲ試ムルモ尙モ賃銀下落スルトキハ最下等ノ程度ニ下ルコトアルモ賃銀上騰スルトキハ生活ノ程度モ亦上ルモノトス然レトモ一定ノ時一定ノ地ニ於テハ同種類ノ勞働者間ニ於テハ自ラ生活程度ノ最低限アルヲ見ルナリ

「リカルド」ハ勞働者ノ生活程度ト賃銀ノ關係トニ付キ極端ナル學說ヲ唱ヘタリ曰ク勞働ノ自然代價ハ勞働者カ生活シ且其繼續者ヲ生出シ以テ其數ヲ増減セザルカ爲メニ必要ナル費用ニ等シトス而シテ實際市場ノ賃銀ニシテ此自然代價ヲ超ユルトキハ勞働者ハ幸福ノ境遇ニ在ルモノニシテ十分ニ其欲望ヲ満たシ得ヘシ然レトモ其結果タルニ必ズ人口ノ増殖ヲ來シ隨テ勞働者ノ數増加スルカ故ニ需要供給ノ關係ニ因リ賃銀ハ再ヒ自然代價又ハ其以下ニ低落セン

是ニ於テ勞働者ハ生活ニ必要ナル欲望ヲ滿足セシムルコト能ハザルモノニテ生シテ死亡ノ割合増加シ隨テ勞働者ノ數減少スルカ故ニ賃銀上騰シテ自然代價ニ達スヘシ此ノ如ク賃銀ハ高低スルモノナレトモ常ニ自然代價ヲ中心トシテ之ニ近ク傾向ヲ有スルモノナリトス而シテ社會主義論者ハ「リカルド」ノ賃銀說ヲ賃銀ノ鐵則ト名ケ之ヲ前提トシテ推論シテ曰ク賃銀ハ高低スル所以ハ「リカルド」ノ言ヘルカ如クナルトキハ勞働者ハ始終社會ノ下層ニ在リテ尙モ其境遇ヲ改良スルコトヲ得ス是レ實ニ殘酷ナル經濟上ノ原則ニシテ其然ル所以ハ現今ノ社會組織宜シカラナレハナリト然レトモ「リカルド」ノ說ハ極端ニ馳スルモノト謂フヘシ何トナレハ賃銀上騰スルモ勞働者ハ必ズシモ漫ニ結婚シテ人口ノ増殖ヲ來スモノニ非ス專ラ其生活ノ程度ヲ高ルル方針ヲ探ルモノ亦尠カラズ殊ニ將來ヲ慮ルノ念ハ餘裕アル者ニ多クシテ下等ノ人種ニ少キカ故ニ賃銀減少スルモ結婚ノ數減スルカ如キコト必ズシモ之ヲ望ムヲ得ザルナリ之ヲ要スルニ勞働者ハ自己ノ意思ニ依リ其生活程度ヲ高メ以テ賃銀ハ上騰ヲ維持スルコトヲ得ルナリ又ハ其高價ヲ望ムルモノハ其高價ヲ得ルモノニ非ス

雇主ノ方面ニ在テハ實銀ノ最高限ヲ定ムルモノハ勞動ヨリ生スル利益是ナリ  
抑モ雇主カ勞動者ヲ使用スルハ之ニ因リテ利益ヲ得ルカ爲メニシテ其利益大  
ナラシムニハ進ミテ多額ノ實銀ヲ支拂フヘク其利益小ナラシムニハ實銀ヲ額モ亦  
小ナラサルヲ得ス例ヘハ從來十人ノ勞動者ヲ使用セル企業者カ更ニ一人ノ勞  
働者ヲ雇入ルルハ此勞動者ヲ使用スルヨリ生スル利益此勞動者ニ支拂フ實銀  
ヨリモ大ナレハナリ故ニ勞動者ノ受タル實銀ハ雇主カ其勞動ヨリ得ル利益ヲ  
超ユルヲ得サルナリ

實銀ヲ定ムル原則トシテ實銀基金說ナルモノ永ク英國經濟學者ノ唱フル所ナ  
リキ其說ニ曰ク一定ノ時ニ當リ一國ニハ實銀ヲ支拂ハンカ爲メニ準備セラ  
ル一定額ノ資本存在スルモノトス是レ即チ實銀基金ナリ此實銀基金ナルモノ  
ハ經濟上ノ狀況ニ因リ増減スルモノナレトモ一定ノ時ニ於テハ其額ハ確定ス  
ルモノナリ而シテ此實銀基金ハ自由競争ニ依リテ勞動者間ニ分配セラルルカ  
故ニ勞動者ノ數多ケレハ各勞動者ノ受クヘキ金額少ナリ勞動者減少スレハ各  
勞動者ノ受タル所多シトス又一部ノ勞動者多額ノ實銀ヲ得レハ他ノ勞動者ノ

實銀ハ之ニ應ジテ減少スヘキナリト此說ニ依ルトキハ實銀ハ既ニ存在セル實  
本ヨリ支出セラルルモノト爲スナリ通常雇主カ勞動者ニ實銀ヲ支拂フハ生産  
ノ未タ結了セザルトキニ於テセルモノナルカ故ニ外觀ニ於テハ既存ノ資本ヲ  
以テ支拂フカ如シ然レトモ實銀ナルモノハ生産上勞動ニ對スル報酬ニシテ結  
局生産ノ一部ヲ以テ支拂フヘキモノタリ即チ企業者カ勞動者ヲ雇入レテ生産  
ヲ爲スハ生産ノ成功ヲ豫期シ其勞動者ニ支拂フ實銀ハ生産結了ノ日ニ於テ生  
産物ヲ賣却シ自ラ償フモノトス故ニ既存ノ資本ハ一時流用セララルルニ過キテ  
ルナリ例ヘハ物價騰貴ノ見込アル場合ニハ企業者ハ實銀ヲ高メテ以テ勞動者  
ヲ雇入ルルカ故ニ實銀ニ用フル資本増加スヘク物價下落ノ兆候アルトキハ雇  
主ハ生産ヲ縮小シ隨テ實銀ニ用フル資本も減少スルナリ是ヲ以テ實銀支拂ノ  
爲メニ特ニ準備セル一定不動ノ資本カ一國ニ存在スルコトハ之ヲ想像スルヲ  
得ス若シ果シテ實銀基金ナルモノ成立ストハハ勞動者ハ企業者ニ對抗シテ實  
銀ヲ高ムカコト能ハズ資本ノ増殖若シハ勞動者ノ數減少スルヲ待テニ非サレ  
ハ實銀ハ一般ニ騰貴セザル所以ニシテ是レ理論並ニ實際ニ反スルモノト謂フ

へキテラ一類ニ属スルモノハ退屈ニシテ最モ無益ニ置ラレバ以テ其ノ  
 以上述ヘタル上下ノ界限内ニ於テ賃銀ハ需要供給ノ關係ニ依リ高低スルモノ  
 トス即チ一ノ市場ニ於テ若干ノ企業者ハ労働ヲ買ハントシ若干ノ労働者ハ勞  
 働ヲ賣ラントス此需要供給ニ超スルハ賃銀上リ供給多キトキハ賃銀下ルモノ  
 トス而シテ需要者下供給者ト同等ノ地位ニ立テ其勢力ニ差等ナキカ如シト  
 雖モ實際ニ於テハ然ラサルナリ蓋シ労働ハ一種ノ商品ニ如シト雖モ労働者ハ  
 身體ヨリ之ヲ分離スルヲ得ズ而シテ又労働者ハ多クハ貧困ノ境遇ニ在ル故  
 ニ其労働ヲ賣ラントスル念慮ハ企業者カ労働者ヲ買ハントスル念慮ヨリ多ク  
 隨テ雇主少提出スル條件意ニ充タサルトキト雖モ労働者ハ之ニ從ハサルヲ得  
 サルナリ而シテ労働者簡簡ノ力ハ以テ企業者ニ對抗シテ其利益ヲ保護進歩ス  
 ルコトヲ得ス是レ即チ種種ナル公私ノ制度設備ヲ要スル所以ナリ例ヘハ職工  
 組合ノ如キハ其重要ナルモノニシテ微力ナル労働者ト雖モ多數團結スルトキ  
 ハ其間ニ出種ノ勢力ヲ生シ以テ企業者ニ對抗スルコトヲ得ルナリ職工組合ハ  
 職業ヲ同シラスル労働者ノ團體ニシテ其主義ル目的ハ企業者ニ對シテ同等ノ

也

地位ヲ占メ以テ賃銀労働時間等ニ關スル利益ヲ保護進歩スルニ在リトス而シ  
 テ之カ手段トシテハ同盟罷工ヲ爲スコトアリト雖モ英國ハ職工組合ハ近來此  
 非常手段ヲ避ケ寧ロ仲裁等ニ依リテ賃銀其他ニ關スル爭議ヲ決定セントスル  
 ノ傾向アリトス又英國ハ職工組合ハ各地ニ於ケル労働ノ需要供給ノ狀況ヲ視  
 察シ組合ノ費用ヲ以テ労働者ノ移轉ヲ促シ以テ労働ノ過不足ヲ平均セシメ又  
 多クハ疾病負傷老衰失業ニ對シ相互保險ノ制度ヲ設ケルモノトスニ於テモ異  
 職工組合ハ労働者カ獨立自助ノ方法ニシテ英國ニ於ケルカ如ク盛大ナルニ於  
 テハ其功績少カラスト雖モ國家ノ干渉モ亦必要ナラストセサルカ即チ國家  
 ハ法律ヲ以テ或ハ労働者ノ最低年齢ヲ定メ青年労働者婦女労働者ニ對シテ特  
 別ノ保護ヲ與ヘ一般労働者ノ定期休業ヲ勵行スルカ如キ方法ヲ採ラザルヘカ  
 ラサルナリ而シテ此等ノ規定ハ必ス一般労働者ノ賃銀ニ影響ヲ與フルモノト  
 ス何トナレハ労働ノ供給ヲ制限スレハナリ然レトモ一步ヲ進メテ賃銀ノ最少  
 額ヲ定ムルカ如キハ國家ノ干渉其度ヲ過クルモノニシテ到底行フヘキモノニ  
 非ナルナリ

### 第四節 職業ノ種類ニ依リ賃銀ニ差異アル所以

所謂労働者ノ從事スル職業ニモ數多ノ種類アリテ其労働ニ對スル報酬即チ賃銀ニモ差異アルヲ見ルナリ今其原因ノ重ナルモノヲ擧クレバ

第一 習練ノ難易 習練ノ難易ハ主トシテ習練ニ必要ナル時間ト費用トニ因ルモノトス此時間ト費用トノ最モ少キハ普通ノ體格ト智能トヲ有スレバ何人ニモ容易ニ爲シ得ヘキ労働ニシテ此ノ如キ労働者ノ賃銀ハ最低カラサルヲ得ヌ之ニ反シテ多年ノ習練ヲ要スル職業ニ至リテハ其賃銀モ亦自ラ高シトス

第二 職業ノ適意又ハ不適意 職業ノ意ニ適スルヤ否ヤハ多少人ニ依リテ異ナルト雖モ通常人ノ好ムモノト好マサルモノトアリ而シテ其然ル所以ハ労働ノ發達隸屬ノ程度身體生命ニ對スル危險ノ多少等ニ依ルモノニシテ通常人ノ好マサル職業ノ賃銀ハ自ラ高カラサルヲ得サルナリ

第三 職業ノ永續不永續 職業ノ種類ニ依リテ屢労働ノ中絶ヲ來スモノト然ラサルモノトアリ前者ニ於テハ一時ニ領收スル賃銀自ラ高シトス

### 第五節 賃銀ト労働費トノ差異

労働ノ廉不廉ハ賃銀ヲミテ以テ之ヲ判断スルモノトヲ得ス労働ノ成蹟ニ比較シテ始メテ之ヲ知ルヘキナリ例ヘハ一日賃銀五十錢ヲ要求スル職工三人ノ成蹟ニシテ七十錢ヲ要求スル職工二人ノ成蹟ニ等シキトキハ前者ハ賃銀低キモ其労働ニ却テ不廉ナリト謂ハサルヘカラス之ヲ英國ノ紡績業ニ徴スルニ職工ノ賃銀ハ次第ニ上レルニ拘ハラス綿糸ノ生産費中ニ包含スル労働費ハ却テ減少セルヲ見ルナリ又英國ノ労働者ハ歐洲大陸ノ労働者ニ對シテ多額ノ賃銀ヲ領收スレトモ其労働ハ決して不廉ト謂フヲ得サルナリ

### 第四章 利息

#### 第一節 利息ノ意義

資本ノ所有者ハ其資本ヲ自ラ用ヒ或ハ之ヲ他人ニ貸與スルモノニシテ後ノ場合ニ於テ之ニ對シテ報酬ヲ受タルモノトス是レ即チ利息ニシテ利息ハ資本

使用ノ代價ニ外ナラザルナリ而シテ資本ニハ數多ク種類アリ家屋機械等モ亦資本ニシテ此等ノ資本ニ使用ニ對スル報酬ハ家賃損料等ノ名稱ヲ有スルトモ亦一種ノ利息ナリトス然レトモ單ニ利息ト稱スルトキハ多クハ貨幣ノ使用ニ對スル報酬ヲ謂フナリ

資本所有者ノ徵收スル報酬ハ單ニ資本ノ使用ニ對スル報酬ノミナラス他ノ原素ヲモ含ムモノトス例ヘハ家賃ハ家屋修繕費ヲ合著シ器具等ノ借用料ヲ俗ニ損料ト稱スルハ使用ノ際其物貸ヲ多少損傷スルヲ以テナリ而シテ殊ニ重要ナルハ保險料ナリ此保險料ハ資本ノ貸借ニ伴フ危險ノ大小ニ從ヒテ差異アルモノニシテ例ヘハ對人信用ニ於テハ借主ノ性質能力境遇等ニ依リテ同シカラストス此ノ如ク種種ナル原素ヲ包含スルモノハ之ヲ總利息ト稱シ全ク之ヲ除却シテ資本ノ使用ニ對スル報酬ノミヲ純利息ト名ク而シテ機械力使用ノ爲メニ損傷スルトキハ之ニ對シ相當ノ賠償ヲ得ルハ論ヲ俟タズト雖モ純利息即チ資本使用ニ對スル報酬ヲ資本ノ所有者カ請求スルハ果シテ正當ナルヤ否ヤ古代ニ於テハ利息ヲ以テ不當ナルモノト爲シアリストールノ如キハ貨幣ハ不胎

雜 談

○債權ノ讓渡ト確定日附證書 債權ヲ讓受ケタル者カ之ヲ以テ債務者以外ノ第三者ニ對抗スルニハ確定日附アル讓渡人ノ通知書又ハ債務者ノ承諾書アルコトヲ要スルコトハ民法第四百六十七條第二項ニ據リテ明瞭ナリト雖モ債務者ヨリ讓受人以外ノ者ニ對抗スルニハ確定日附アル證書ニ依ルコトヲ要セタルカハ稍ヤ疑ナキニ非スト雖モ立法者ハ債務者ヨリ讓渡ヲ對抗スルコトハ別ニ弊害ナシト認メ確定日附アル證書ノ有無ヲ問ハスシテ讓受人以外ノ者ニ對シテ排濟ヲ拒ムコトヲ得セシメタルコトハ大審院ノ認ムル所ナリ其判決理由ニ曰ク民法第四百六十七條ハ指名債權ノ讓渡ニ關スル對抗條件ノ規定ニシテ公示方法ト云フコトヲ得ザレトモ同法第七十七條及ヒ第七十八條ノ規定ト同一ノ主義ニ出テタルコトハ固ヨリ言ヲ待タズ抑對抗トハ讓渡ニ因リテ權利ヲ取得シタル者即チ讓受人カ其取得シタル權利ヲ讓渡人以外ノ者ニ對シテ主張スルノ謂ニ外ナラサルヲ以テ第四百六十七條第一項ハ指名債權ノ讓受

人カ其權利ヲ債務者及ヒ其他ノ第三者ニ對抗スルニ必要ナル條件ヲ規定シタルニ外ナラサルコト毫無疑ヲ容ルヘキニ非ス由是之ヲ觀レハ指名債權ノ讓受人カ其權利ヲ債務者以外ノ第三者ニ對抗シキニ爲メハ讓渡人カ讓渡ヲ債務者ニ通知シ若クハ債務者カ之ヲ承諾スルコトヲ要スル一條件ト其通知若クハ承諾ハ必スヤ確定日附アル證書ヲ以テスルコトヲ要スルニ條件ト二條件具備スルコトヲ要スレトモ其之ヲ債務者ニ對抗セシカ爲メハ唯第一ノ條件存スルヲ以テ足ルコト法文上自ラ明ナレハ債務者ハ一旦讓渡ノ通知ヲ受ケ若クハ債務關係存立スルヲ以テ他ニ同一ノ債權ヲ主張スル者アラハ之ヲ排斥スルノ權アルヘキハ自明ノ理ナリト云ハサルヲ得スト(大審院明治三十六年(才)第四百六十八號民事判決)

○相續人ノ選定ト法定順序民法第九百八十二條ノ場合ニ於テハ親族會ハ同條規定ノ順序ニ從ヒ家督相續人ヲ選定スヘク若シ其法定順序ヲ變更スル場合ニ於テハ第九百八十三條ニ依リ裁判所ノ許可ヲ必要トス然ルニ此裁判所ノ

許可ヲ得シテ法定ノ順序ヲ變更シ其選定ヲ爲シタルトキハ其選定ハ有效ナリヤ否ヤ大審院ハ判決シテ曰ク當然ノ家督相續人タル者ナキカ爲メ適法ニ召集セラレタル親族會カ民法第九百八十二條ノ規定ニ則リ既ニ其決議ヲ以テ被上告人ヲ家督相續人ニ選定セシモノタル上ハ其決議上相續順序ノ變更ニ關シ遵守スヘキ同法第九百八十三條ノ規定ニ違背セシ點ヲ以テ假定スルモ該決議ニ對スル不服ノ訴ヲ提起シ之カ取消ノ裁判ヲ受ケサル限りハ其選定ヲ當然無効トスルヲ得ス是レ同法第九百五十一條ノ規定アル所以ナリト(大審院明治三十六年(才)第四百三十七號不當相續取消請求事件明治三十六年四月七日第一民事部判決)

○假登記ノ性質及ヒ其當否ハ不動産登記法第二條ノ場合ニ於テハ假登記ノ申請ヲ爲スコトヲ得ルモノト然レトモ其性質及ヒ其登記スヘキ事項如何等ニ關シテハ法律ノ規定甚ク明瞭ヲ缺カ如ク(不動産登記法第二條第七條第二項第三二條第一項第三三條第五四條第五五條參照)故ニ若シ假登記事項中誤謬ノ存スル場合ニ於テハ其效力ヲ異ニスルコトアリヤ否ヤ此等ノ問題ハ大審院ノ判決ニ據リテ之ヲ知ルコトヲ得シ其判決理由キ曰ク假登記ハ登記權利者



カ單獨ニテ之カ申請ヲ爲シ豫シ本登記ノ順位ヲ保存スルガ爲メニ爲スルコトニ  
シテ本登記ノ前提タルニ外ナラズ且假登記ノミニテハ法律上何等ノ效果ヲ地  
生セサルヲ以テ結局本登記ヲ請求セサルヲ得サルモノナリ而シテ登記權利者  
カ假登記ヲ爲シタル後登記義務者ニ對シテ本登記ヲ請求スル場合ニ於テ登記  
權利者ハ先ツ其假登記ヲ爲シタル原因即チ實體上權利ノ存在スル事實ヲ證明  
スルノ責任ヲ有スルヲ常トス故ニ假登記ノ當不當ハ一ニ登記原因ノ存否ニ因  
ル假令ヒ其假登記上偶々地代支拂時期地代ノ額又ハ權利ノ存續期間等ニ關シ  
眞實ニ相違セル點アリトスルモ其根本タル實體上登記原因ノ存在スル以上ハ  
登記權利者ノ爲シタル假登記ハ右ノ相違セル點ヲ更正シテ其登記ヲ爲シ得ヘ  
キ筋合ニ付キ登記義務者ヨリ其權利者ニ對シ右等ノ取返ヲ口實トシテ假登記  
ノ抹消ヲ請求スルノ不當ナルヲ知ル可シ下(或地上權假登記三十六年七月四日  
日三十二年四月十五日)ノ如ク其假登記ノ抹消ハ其權利者ノ請求ニ依リテ  
之ヲ抹消スルハ其權利者ノ請求ニ依リテ抹消スルハ其權利者ノ請求ニ依リテ  
之ヲ抹消スルハ其權利者ノ請求ニ依リテ抹消スルハ其權利者ノ請求ニ依リテ

# 法學志林

第四十四號  
六月十五日發行

一部定價金十二錢郵稅一錢十  
部前金郵稅共一圓二十錢  
校友、生徒、校外生、一部特價  
郵稅共十一錢十部前金郵稅共一圓

◎本誌ハ本號ヨリ大改良ヲ加ヘ掲載事項ヲ精選シ紙數ヲ増加シタリ

## 志林

◎最近判例批評(其九).....法學博士 梅謙次郎  
◎自殺下手未遂ノ處罰.....法學博士 豐島義典  
◎課稅標準ヲ合算シタル營業稅ノ附加稅ニ付テ(續).....法學博士 若谷禮次郎  
◎株式會社ノ發給シタル營業稅ノ無効宣言ヲ目付トスル手續規定.....法學博士 寺尾  
◎大日本.....法學博士 寺尾

## 解疑

◎金減額ヲ生シタル場合ニ於ケル差額請求權.....法學士 吾孫子勝  
◎手形上ノ債務ハ連帶債務ナリヤ.....法學士 矢部  
◎命令ト公權ノ性質.....法學士 松浦鎮次郎  
◎領事裁判權ト國際私法及ヒ國際刑法トノ關係.....法學士 秋山正介  
◎船舶所有者ト荷送人ニ對スル運送狀ノ請求.....法學士 加藤正若

## 散錄

◎散錄ノ尻馬.....能美房太郎

## 寄書

◎法人ノ理事ハ定款ノ規定ニ違反セル總會ノ決議ニ從フ義務アリヤ否ヤニ付テ.....能美房太郎

其他判例、雜報、記事數十件

和佛法律學校

發行所

# 特別法講義錄

第三號  
六月一日  
發行

本講義錄ハ○戶籍法(島田學士)○人事訴訟手續法(松岡學士)○特許法、意匠法、商標法(杉本學士)○府縣制、郡制、市制、町村制(松浦學士)○供託法(塚田學士)○非訟事件手續法(橫田學士)○不動産登記法(鈴木學士)○競賣法(吾孫子學士)○租稅法(若槻學士)○著作權法(水野博士)○公證人規則(松岡學士)○執達吏規則(仁井田博士)ヲ掲載ス

○毎月一回發行○月謝金十五錢

六月  
發行所  
**和佛法律學校**

明治三十六年六月二十日印刷  
明治三十六年六月廿一日發行

(定價金貳拾五錢)

編輯者  
發行所

東京市牛込區牛込北町十番地  
萩原敬之

印刷者

東京市牛込區矢來町三番地  
小宮山信好

印刷所

東京市芝區西久保明舟町十一番地  
金子活版所

發行所  
司法省  
指定  
**和佛法律學校**

(電話番町百七十四番)

(明治二十二年十二月九日內務省許可)  
明治三十五年十一月四日第三種郵便物認可 毎月十九回一日五日六日八日十日十一日十二日十三日十四日十六日十七日十八日十九日二十日廿一日廿二日廿三日廿四日廿五日廿六日廿七日廿八日廿九日三十日發行